大県郡条里遺跡7

二〇二一年一〇月

公益財団法人　大阪府文化財センター

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第311集

柏原市

大県郡条里遺跡 7

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021年10月

公益財団法人　大阪府文化財センター

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 311 集

柏原市

大県郡条里遺跡 7

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人　大阪府文化財センター

序　　文

大県郡条里遺跡は、大阪府柏原市の北端に位置する遺跡で、生駒山西麓の扇状地と旧大和川の自然堤防に挟まれた氾濫平野に立地します。この周辺は古くから河内と大和をつなぐ交通の要所であり、数多くの遺跡が確認されています。生駒山西麓の扇状地では縄文時代早期から集落が営まれ、隣接する大県遺跡では、古墳時代に鉄器生産が行われていました。古代には、東高野街道に沿って、多くの寺院が建立されていたことが分っています。

大県郡条里遺跡は、当センターによって平成23年度から、6次の発掘調査が行われてきました。その結果、縄文時代の河川や集落、古墳時代から奈良時代の水路、古代から近世まで続く条里型地割に基づいた耕作遺構などが発見されています。

今回の調査は一級河川恩智川法善寺多目的遊水地建設に伴う事業ですが、恩智川に沿った堤防となる区域で、恩智川がこの場所に定まって以降、最も河川の氾濫、増水による影響を受けやすかった地域と言えます。今回の調査でもこれまでと同様に、縄文時代晩期から古墳時代の流路や溝、古代末から中世にかけての水田や畠がみつかりました。数百年にわたって耕作地としての利用が続けられていた事や、この地域の土地利用のあり方がより明らかになりました。

最後になりましたが、発掘調査にあたって、大阪府都市整備部八尾土木事務所、大阪府教育庁、柏原市教育委員会をはじめとする関係各位より多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

今後とも埋蔵文化財調査へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和3年10月

公益財団法人　大阪府文化財センター
理事長　坂井　秀弥

例　　言

1．本書は大阪府柏原市法善寺４丁目に所在する大県郡条里遺跡（調査名：大県郡条里遺跡 20 － 1 ）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴い、大阪府都市整備部八尾土木事務所の委託を受け、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。

3．受託契約名、受託期間、調査及び整理体制は以下の通りである。

受託契約名：寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡（その７）発掘調査
受託期間：令和２年６月１日～令和３年 10 月 29 日
現地調査期間：令和２年６月１日～令和３年１月 31 日
整理期間：令和３年２月１日～令和３年 10 月 29 日
調査体制：事務局次長兼調整課長　岡本茂史　調査課長　岡戸哲紀
調査課長補佐　佐伯博光　主査　駒井正明、川瀬貴子
整理体制：（令和２年度）　事務局次長兼調整課長　岡本茂史　調査課長　岡戸哲紀
調査課長補佐　佐伯博光　主査　川瀬貴子
（令和３年度）　事務局次長　市本芳三　総務企画課長　亀井聡
調査課長　岡戸哲紀　調査課長補佐　佐伯博光　主査　川瀬貴子

4．遺構写真撮影は調査担当者が、遺物写真撮影は中部調査事務所写真室が行った。

5．本書の作成は、第２章は駒井が執筆したものに川瀬が一部加筆し、それ以外の執筆と編集を川瀬が担当した。

凡　　例

1．標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。使用単位はmである。

2．座標値は世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第Ⅵ系に基づき表示し、単位はmである。

3．全体図及び遺構実測図の方位は、すべて平面直角座標系に基づく座標北を示す。

4．現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010 に準拠した。

5．土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007 年度版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。記号、土色名、土質名の順に記述している。

6．遺構名は、検出順に通し番号を付与したものと、整理時に番号を付与したものとがある。また、各調査区の調査時期が異なるため、同一遺構面であっても連続した番号にはなっていない。各々のアラビア数字の後ろに遺構の種類（例：１溝）をつけて表示している。

7．本書では、調査区平面図は 400 分の１、遺構断面図は 20 分の１を原則として使用しているが、一部のものに関してはその限りではない。掲載挿図に関しては、縮尺を明記している。

8．遺物実測図の縮尺は土器を４分の１、瓦・金属製品・石製品・木製品は２分の１を基本として掲載するが、一部のものに関しては、縮尺を変更して掲載している。須恵器は断面を黒色とする。掲載挿図に関しては、縮尺を明記している。写真図版の遺物は縮尺を統一していない。

9．掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文、挿図、写真図版ともに一致する。

目　　次

序　　文
例　　言
凡　　例
目　　次
第１章　調査の経緯と方法…… 1
　　第１節　調査に至る経緯と経過…… 1
　　第２節　調査・整理の方法…… 2
第２章　遺跡の位置と環境…… 7
　　第１節　地理的環境…… 7
　　第２節　歴史的環境…… 7
　　第３節　既往の調査…… 9
第３章　調査成果…… 11
　　第１節　基本層序…… 11
　　第２節　第３ａ面・第４ａ面・第４－２ｂ面の遺構と遺物…… 23
　　第３節　第５ａ面の遺構と遺物…… 34
　　第４節　第６ａ面の遺構と遺物…… 38
　　第５節　第７－１ａ面・第７－４ａ面・第８ａ面・第９ａ面の遺構と遺物…… 42
　　第６節　第 10 －１ａ面・第 10 －２ａ面の遺構と遺物 …… 54
　　第７節　第 11 ａ面・第 12 ａ面の遺構と遺物 …… 62
第４章　総括…… 69
　　第１節　遺構面の変遷…… 69
　　第２節　大県郡条里遺跡出土の蓮華文軒丸瓦…… 74
遺物観察表…… 77 ～ 80
写真図版
報告書抄録
奥　　付

挿　図　目　次

図１　調査位置図 …… 1
図２　調査区配置図・地区割図…… 3
図３－１　周辺の遺跡 …… 8
図３－２　河内六寺位置図…… 9
図４　１区南壁断面図…… 12・13
図５　１区北壁断面図…… 14
図６　３区南壁断面図…… 17
図７　南北・東西壁断面対照図　南半…… 19・20
図８　南北・東西壁断面対照図　北半…… 21・22
図９　第３ａ面平面図…… 24
図 10　第３ａ面遺構断面図 …… 25
図 11　第４ａ面平面図 …… 26
図 12　第４ａ面遺構断面図 …… 27
図 13　第４－２ｂ面平面図 …… 29
図 14　第４－２ｂ面遺構断面図 …… 30
図 15　第３ａ層･第４－１ａ層･第４－２ａ層他出土土器実測図 …… 31
図 16　第３ａ層・第４－１ａ層・第４－２ａ層出土瓦・銭貨・金属製品・木製品実測図 …… 32
図 17　第５ａ面平面図 …… 33
図 18　第５ａ面遺構断面図 …… 35
図 19　第５ａ層・第５ｂ層出土遺物実測図 …… 36
図 20　第６ａ面平面図 …… 37
図 21　第６ａ面遺構断面図 …… 39
図 22　第６ａ層出土遺物実測図 …… 40
図 23　第７－１ａ面平面図 …… 41
図 24　54 流路断面図…… 42
図 25　第７－４ａ面平面図 …… 43
図 26　第７－４ａ面遺構断面図 …… 44
図 27　第８ａ面平面図 …… 46
図 28　第９ａ面平面図 …… 47
図 29　第７－１ａ層・第７－２ａ層・54 流路出土土器実測図 …… 48
図 30　第７－１ａ層・第７－２ａ層出土瓦・石器実測図 …… 50
図 31　第７－４ａ層・第８ａ層・第９ａ層出土遺物実測図 …… 51
図 32　第 10－１ａ面平面図 …… 53
図 33　第 10－１ａ面遺構断面図 …… 55
図 34　第 10－２ａ面平面図 …… 57
図 35　第 10－２ａ面遺構断面図 …… 58
図 36　第 10－１ａ層・第 10－２ａ層他出土土器実測図 …… 59
図 37　第 10－１ａ層・第 10－２ａ層出土石製品実測図 …… 60
図 38　第 11 ａ面平面図 …… 61
図 39　第 11 ａ面遺構断面図 …… 62
図 40　第 12 ａ面平面図 …… 63
図 41　第 12 ａ面遺構断面図－１ …… 65
図 42　第 12 ａ面遺構断面図－２ …… 66
図 43　第 11 ａ層・55 流路出土遺物実測図 …… 67
図 44　第 12 ａ面合成平面図 …… 69
図 45　第 11 ａ面合成平面図 …… 70
図 46　第 10 ａ面合成平面図 …… 70
図 47　第７－１ａ面合成平面図 …… 71
図 48　第６ａ面合成平面図 …… 72
図 49　第５ａ面合成平面図 …… 72
図 50　大県郡条里遺跡と周辺出土の蓮華文軒丸瓦 … 75

表　目　次

表１　既往調査一覧表…… 10
表２　既往の調査との基本層序対応表…… 18
表３　遺物観察表…… 77 ～ 80

写　真　目　次

写真１　機械掘削……5
写真２　人力掘削……5
写真３　平面実測……6
写真４　遺構実測……6
写真５　高所作業車による写真撮影……6
写真６　大阪府教育庁立会……6
写真７　洗浄……6
写真８　注記……6
写真９　実測……6
写真 10　トレース……6

写　真　図　版　目　次

写真図版１　遺構
１．１区第３ａ面全景（南から）
２．１区第３ａ面全景（北から）
写真図版２　遺構
１．１区第４ａ面近景（東から）
２．１区第４－２ｂ面検出状況（南西から）
３．１区第４－２ｂ面畝溝断面（南東から）
写真図版３　遺構
１．２区第５ａ面南半全景（北から）
２．２区第５ａ面 81 畦畔（南から）
写真図版４　遺構
１．３区第５ａ面全景（南から）
２．３区第６ａ面全景（南から）
写真図版５　遺構
１．１区第６ａ面全景（北から）
２．２区第６ａ面全景（北東から）
写真図版６　遺構
１．１区第６ａ面近景（南西から）
２．１区第６ａ面近景（北東から）
３．２区第６ａ面全景（北から）
写真図版７　遺構
１．１区第７－１ａ面全景（南から）
２．２区第７－１ａ面全景（北東から）
３．２区 54 流路断面（西から）
写真図版８　遺構
１．１区第７－４ａ面全景（南から）
２．２区第７－４ａ面近景（北東から）
写真図版９　遺構
１．３区第８ａ面全景（南から）
２．３区第９ａ面全景（南から）
３．３区第 11 ａ面全景（南から）
４．３区第 12 ａ面全景（南から）
写真図版 10　遺構
１．１区第 10－１ａ面全景（南から）
２．１区第 10－２ａ面全景（南から）
写真図版 11　遺構
１．１区 26 溝・29 溝・31 畦畔（東から）
２．１区 42 溝・43 溝（南西から）
３．１区第 11 ａ面全景（北から）
写真図版 12　遺構
１．２区第 12 ａ面全景（北東から）
２．２区第 12 ａ面近景（西から）
写真図版 13　遺構
１．２区 56 溝断面（南東から）
２．２区 55 流路（東から）
３．２区 55 流路断面（東から）
写真図版 14　遺構
１．１区南壁断面（北東から）
２．１区北壁断面（南から）
３．３区南壁断面（北から）
写真図版 15　遺物
１．第５ａ層出土磁器
２．第４ａ・５ａ・５ｂ層出土瓦質土器
３．第４ａ層出土軒丸瓦

４．第４ａ層出土木製品

５．銭貨

６．第４ａ層出土金属製品

写真図版 16　遺物

１．第７－１ａ・７－２ａ層出土陶器

２．54 流路出土瓦器・土師器

３．第６ａ層出土磁器

４．第７－１ａ・７－２ａ層出土磁器

５．第６ａ層出土土器

写真図版 17　遺物

１．第７－１ａ～７－３ａ層出土土器

２．第７－１ａ～７－３ａ層出土瓦器

３．第７ａ層出土ミニチュア土器

４．第７－１ａ・７－２ａ層出土平瓦

写真図版 18　遺物

１．第７－４ａ・７－４ｂ層出土陶器

２．第７－４ａ～９ａ層出土須恵器

３．第７－４ａ～９ａ層出土ミニチュア土器

４・５・７．第７－４ａ～９ａ層出土土師器

６．第９ｂ層出土土師器

８．第８ａ層出土瓦器

９．第７－４ａ～９ａ層出土金属製品

写真図版 19　遺物

１・２．第 10 － 1 ａ層出土土師器

３・４・６．第 10 － 1 ａ～ 10 － 2 ｂ層出土須恵器

５．42 溝出土須恵器

７．第 10 ａ・11 ａ層出土須恵器（転用硯）

８～ 10．第 10 － 2 ａ～ 11 ａ層出土弥生土器

写真図版 20　遺物

１．55 流路出土縄文土器・弥生土器

２．第 10 － 2 ａ・10 － 2 ｂ層出土出土石製品

３．第 11 － 1 ａ層出土石器

４．第 10 ａ層以下出土石製品

第１章　調査の経緯と方法

第１節　調査に至る経緯と経過

（１）調査の経緯

大県郡条里遺跡は柏原市の北端、大和川と石川の合流点から約 2.0㎞北に位置する。生駒山地西麓の扇状地と旧大和川の自然堤防に挟まれた氾濫平野に立地する。南北約 1.0㎞、東西約 0.2㎞に広がる遺跡である。

本調査は、大阪府都市整備部が進めている、一級河川恩智川法善寺多目的遊水地の建設に伴い実施された。一級河川恩智川法善寺多目的遊水地の建設予定地は約 114,000㎡に及ぶが、その範囲には大県郡条里遺跡、山ノ井遺跡が含まれる（図３－１）。そのため、平成 14 年度・15 年度に大阪府教育委員会（現、大阪府教育庁）によって、事業予定地内の確認調査が実施された。この確認調査では、大県郡条里遺跡と山ノ井遺跡において、古墳時代から中世の遺構、遺物が確認された。その他、中世の包含層より縄文時代や弥生時代前期の遺物が出土し、また、下層にさらに古い遺構、遺物の存在が予想された。

この調査成果を受けて、公益財団法人大阪府文化財センター（以下、当センター）によって、一級河川恩智川法善寺多目的遊水地建設に伴う発掘調査が平成 23 年度から、山ノ井遺跡も含めると７次にわたって実施されてきた。

今回の調査地は大阪府柏原市法善寺４丁目地内に所在し、多目的遊水地の越流堤部であり、事業地の西端にあたる。

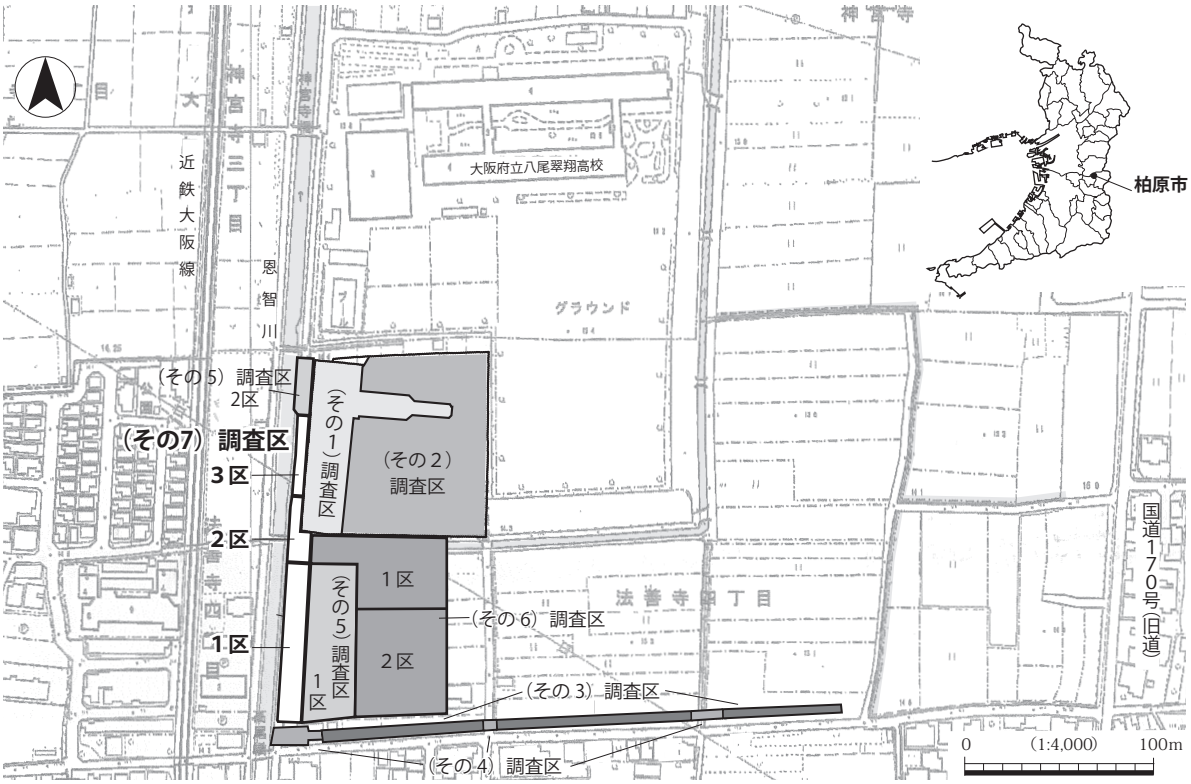


図１　調査位置図

調査に先立って、当センターでは令和２年６月１日付で「寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡（その７）発掘調査」として、大阪府八尾土木事務所との間で委託契約を締結し、大阪府教育庁の指導の下、同日より令和３年１月 31 日まで現地調査を実施した。

その後は同契約により、当センター中部調査事務所において遺物整理作業を令和３年２月１日より令和３年７月 31 日まで実施し、令和３年 10 月に報告書の刊行と発送をもって終了した。

（２）調査の経過

今回の発掘調査は事業地の最も西側、恩智川沿いにあたり、南北に細長い形状をとる。旧恩智川護岸設備撤去工事や掘削土搬出の関係から、調査区を３つに分け、南側を１区、中央を２区、北側を３区とし、１区、３区、２区の順で調査に着手した（図１・２）。

掘削に際しては鋼矢板などによる土留は行わず、オープンカットの工法で行った。今回の調査地は恩智川の越流堤にあたるため、調査区西端は堤部を残して、西から東へ斜めに下がる法面を成形する必要があった。よって、調査面は下層に行くほど東にずれ、東西横断面が平行四辺形の形状となった。

発掘調査は盛土や表土、及び近世の耕作土層を重機で慎重に除去（写真１）した後、スコップやジョレン、両刃鎌などを使用して人力掘削を行った（写真２）。層序ごとに掘削を行い、遺構面、遺構の確認及び遺物の取り上げに努めた。

人力掘削では地層の堆積状況を調査区法面の断面で観察、分層し、地層堆積状況を写真撮影し、土層断面図を作成した。地層の堆積状況を観察した結果、耕作土や遺物包含層が累重している事が認められたため、必要と判断された遺構面で平面調査を実施した。

各遺構面では平板を使用して平面図を作成し（写真３）、各遺構面で検出した遺構は必要に応じて写真撮影を行い、遺構平面図や断面図を作成した（写真４）。主要な遺構面の全景写真を撮影する場合には高所作業車を使用した（写真５）。

発掘調査に使用した標高値や、断面図の記録に使用した高さは、調査区際に設置した４級基準点をもとにしており、高さ表記はすべて T.P. 値である。基準点の打設、水準測量は隣接する（その６）調査が測量会社に委託しており、その委託で打設した４級基準点を使用した。

発掘調査開始（令和２年６月１日）から発掘調査終了（令和３年１月 31 日）までの間、大阪府教育庁文化財保護課による立会を各調査区で必要に応じて計４回受け、調査に関する指示、指導を受けた（写真６）。大阪府教育庁の立会を経て調査を終了した調査区ごとに、事業者である大阪府八尾土木事務所に引き渡し、本体工事に移行する事となった。

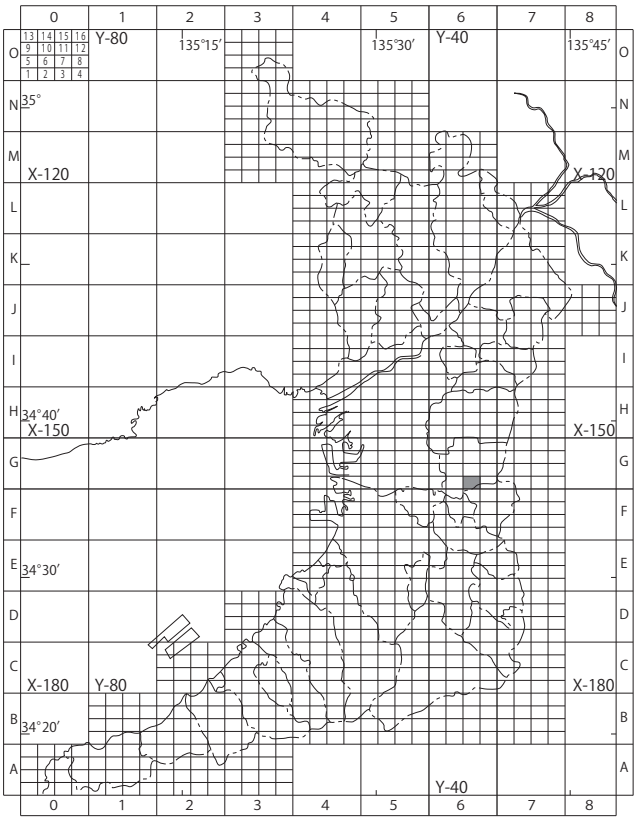
第２節　調査・整理の方法

当センターには『遺跡調査基本マニュアル』2010 という発掘調査の統一や標準化をはかるマニュアルがあり、これによって発掘調査並びに整理作業を行った。

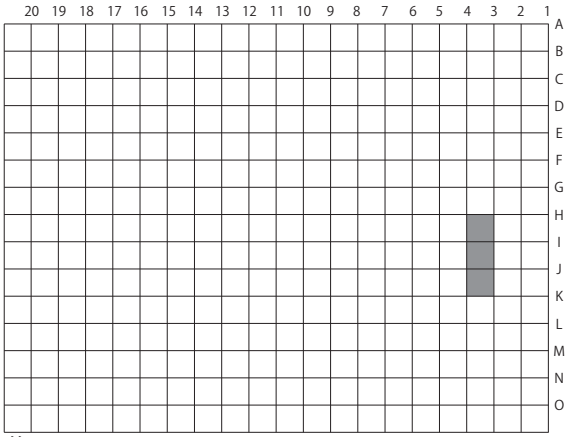
（１）調査の方法

調査区割　遺物の取り上げや遺構の位置確認に関しては、当センターマニュアルに基づき平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）を基準とした区画を使用した。これにのっとり、第Ⅰ～第Ⅳまでの大小４段階の区画を設定した（図２）。

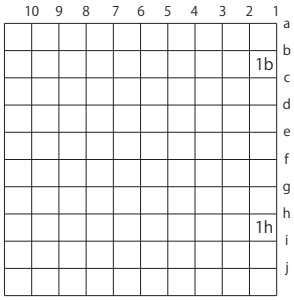
第Ⅰ区画は、大阪府の南西端 X ＝－ 192,000 m、Y ＝－ 88,000 mを基準とし、南北方向に６㎞、



第Ⅰ・Ⅱ区画



第Ⅲ区画



第Ⅳ区画 区画名→右上（北東） 隅のポイント

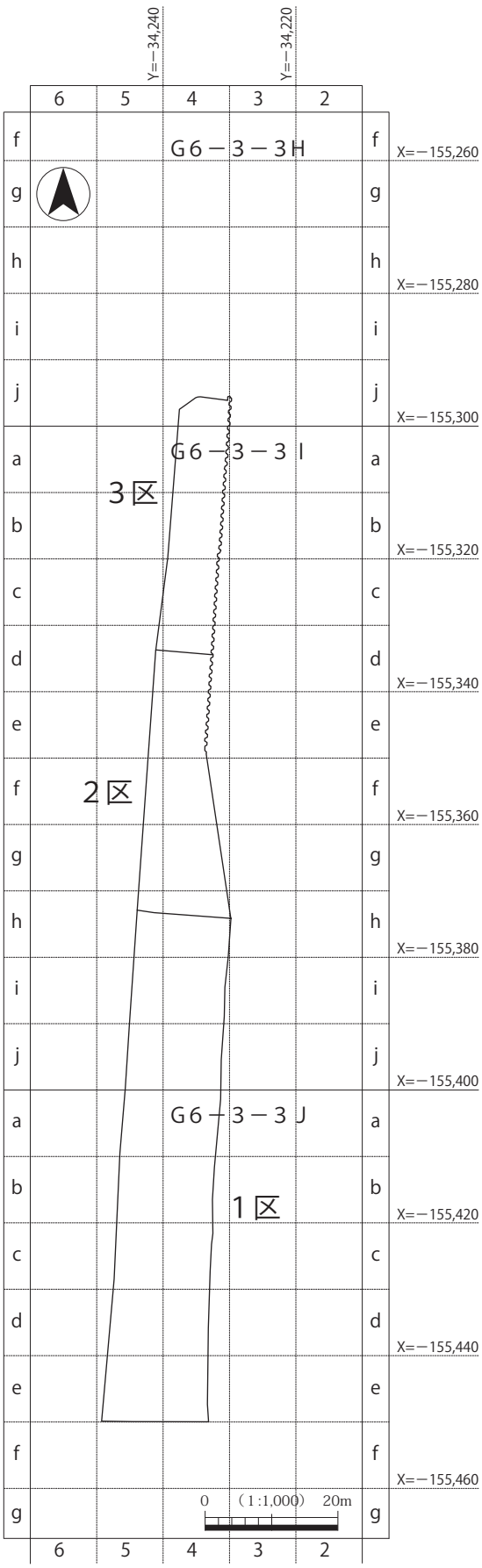


図２　調査区配置図・地区割図

東西方向に８㎞で府域を 62 区画に分割したものである。表示は、南西端を基点に北へＡ～Ｏ、東へ０～８とする。

第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を南北方向に 1.5㎞、東西方向に 2.0㎞でそれぞれ４分割し、計 16 区画を設定する。表示は南西端を１とし、東へ４まで、あとは西端を５、９、13、北西端を 16 と平行式で表す。

第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を 100 ｍ単位で、南北 15、東西 20 に区画する。表示は北東端を基点に、南へＡ～Ｏ、西へ１～ 20 とする。

第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を 10 ｍ単位で南北方向、東西方向ともに 10 に区画する。表示は北東端を基点に南へａ～ｊ、西へ１～ 10 とする。

今回の調査地は第Ⅰ区画がＧ６、第Ⅱ区画が３、第Ⅲ区画が３Ｈから３Ｊにあたる。出土遺物を取り上げる際には、第Ⅲ区画から第Ⅳ区画までをラベルに記入した。また、遺構面や遺構の平面図作成にも区画名を表記するようにした。

なお、方位は座標北を使用し、高さはすべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値を用いた。

調査名・調査区の設定・呼称　当センターでは、前述のマニュアルに従って遺跡名に調査年度を加えた調査名称を使用しており、今回の調査名は大県郡条里遺跡 20 － 1 となる。調査区名は、３つの調査区を南から１区、２区、３区とした。

遺構名　遺構の検出順に、１からの通し番号を遺構種別の前に付与した（例：１溝）。発掘調査時に実測や遺物取り上げが生じた遺構にのみ、遺構名を付与した。整理作業時にその遺構名は踏襲して使用し、それ以外に必要が生じた遺構は遺構面ごとに遺構名を付与した。従って、同じ遺構面でも遺構番号は連続していない。

記録作業　今回の調査区は立地状況などから、ラフタークレーンなどによる航空測量は行っていない。主要な遺構面の全景写真を撮影する場合には高所作業車を使用した（写真５）。写真撮影に使用したカメラは APS － C デジタル一眼レフカメラと中型フィルムカメラ（６×７白黒、６×７カラーリバーサル）である。

発掘調査に使用した標高値や、断面図の記録に使用した高さは、調査区際に設置された４級基準点をもとにしており、高さ表記はすべて T.P. 値である。基準点の打設、水準測量は隣接する（その６）調査が測量会社に委託しており、それで打設した４級基準点を使用して手計りで遺構実測図を作成し、レベル測量を実施した。

遺構面は平板測量で 100 分の１の縮尺で平面図を作成し、必要な場合にはレベル測量を行い、高低差など地形の変化を記録した。また、個別遺構の平面図、断面図、立面図や出土状況図については、必要に応じて、10 分の 1、20 分の１の縮尺などで適宜作成した。土層観察用の断面に関しては１区外周の北壁面、南壁面、３区南壁面で 20 分の１縮尺の断面図を作成した。

基礎整理作業　調査と並行して、現場事務所にて基礎整理作業を実施した。発掘調査で出土した遺物は洗浄（写真７）し、調査名や登録番号を注記し（写真８）、出土調査区、層位、出土遺構などの情報を検索しやすいように Microsoft 社の Excel を用いて台帳を作成した。

現場で記録した遺構実測図については、隣接する調査区との整合性を確認するなどの基礎的な整理を実施した。また、撮影したフィルム写真はアルバムに収納した。デジタルカメラで撮影した写真はハードディスクに保存し、必要情報（調査区、層位、遺構名など）のデータを入力して写真を貼り付けた Excel 形式の台帳を作成し、遺構写真の整理を行った。

（２）整理の方法

台帳作成　基礎整理作業から継続して、遺物台帳や写真台帳を作成した。写真台帳は、写真図版に掲載する写真を決定すると、掲載写真番号なども登録してどの写真を使用したか検索できるようにし、今後の活用に対応できるよう努めた。挿図や写真図版に使用した遺物は、実測番号や掲載遺物番号、収納コンテナ番号なども遺物台帳に入力し、整備した。

遺構挿図作成　遺構については、現場で実測した原図をもとに、Adobe 社の IllustratorCS6 を用いてデジタルトレースで調査区平面図を作図した（写真 10）。平面図や主要遺構については現地で作成した実測図を編集し、遺構挿図を作成した。

遺構挿図の合成は Adobe 社の PhotshopCS6 を用いて行い、浄書は Adobe 社の IllustratorCS6 を用いてデジタルトレースを行った。

遺物の抽出・実測・復元・挿図作成　洗浄と注記作業を終えた遺物は、同じ遺構や隣接する地区ごとに接合を試み、より原形を復元できるように努めた。その中から報告書に挿図や写真として掲載する遺物を抽出し、遺物実測図を作成した（写真９）。また、一部の遺物に関しては拓本を採った。

遺物実測図は遺構、包含層ごとにレイアウトを作成し、合成は Adobe 社の PhotshopCS6 を用いて行った。浄書は Adobe 社の IllustratorCS6 を用いてデジタルトレースを行い、遺物挿図を作成した。

写真図版作成　現地で撮影した遺構面や個別遺構、断面の写真の中から、報告書に掲載するものを選別した。そのフィルム写真のスキャニング作業を行い、デジタルデータ化して写真図版を作成した。

また、遺物は報告書に掲載するものを選別して、どのように載せるか決定し、中部事務所写真室で写真撮影を行った。その写真をデジタルデータ化して写真図版を作成した。

原稿執筆・編集　その他、報告書作成に必要な、周辺地域や既往の調査成果を記載した文献の収集や、原稿執筆のための基礎資料を作成した。以上の作業と併行して調査報告の原稿を執筆し、編集作業を実施して報告書を完成した。入稿後、校正作業を経て本書の刊行をもって完了した。

収納　編集作業と併行して、出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類した。掲載遺物は挿図番号や写真図版番号が確定すると、個々の遺物に添付した掲載遺物ラベルに必要情報を記入し、掲載順にコンテナに収納作業を行った。未掲載遺物についても登録番号順に収納し、台帳に収納先を入力した。

遺構実測図についても図面番号を付与して番号順に図面ケースに収納した。遺物実測図は挿図番号順に並べ替え、図面ケースに並べ替えた。

写真１　機械掘削

写真２　人力掘削

写真３　平面実測

写真４　遺構実測

写真５　高所作業車による写真撮影

写真６　大阪府教育庁立会

写真７　洗浄

写真８　注記

写真９　実測

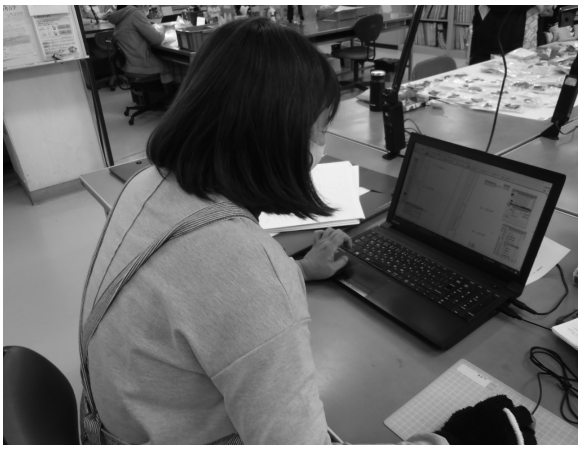


写真 10　トレース

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

大県郡条里遺跡は大阪府の中央部、柏原市法善寺２・４丁目及び平野１丁目の市域北端に所在する遺跡で、大和川と石川との合流地点から約 2.0㎞北に位置する。この大和川は宝永元（1704）年に付け替えられたもので、現在の長瀬川や玉串川などにその痕跡をみる事ができる。

当遺跡は、東に生駒山西麓からの扇状地と、西に旧大和川が形成した自然堤防に挟まれたところにある。遺跡の南半を蛇行し、北半西辺を北流する恩智川は、元来は生駒山地から流れる小河川が合流して北へ流れる自然河川であった。しかし、戦後に改修されて東西、南北と直角に曲がり、その後北西にのびて現流路に戻る、人工河川となっている。

遺跡西側を北流する恩智川から生駒山西麓にかけては、地表面に条里型地割を示す方形区画が良好に遺存する。また、大和川と石川との合流地点は水運の要衝とともに、この生駒山西麓に沿う東高野街道が長尾街道・奈良街道と交差する地点でもあった。

第２節　歴史的環境

ここでは、当遺跡に隣接する遺跡の調査成果を中心に歴史的変遷を紹介する（図３－１）。

縄文時代　大県郡条里遺跡の南東に位置する大県遺跡では、縄文時代早期の押型文土器や石器、縄文時代後期の石囲い遺構がみつかっており、同時期の集落の存在を想定する。集落はその後、扇状地縁辺へ拡大したと考えられ、東高野街道付近では縄文時代後期末から晩期の遺構を検出し、多数の土器や石器が出土した。

弥生時代　恩智遺跡は弥生時代中期に集落活動を盛んにしたが、大県遺跡でも中期の竪穴建物やサヌカイト集積土坑、後期の竪穴建物を確認している。また、線刻で描かれた手楯をもった人物と、犬と思しき動物をかたどった粘土を貼りつけた中期の土器片が平野遺跡から出土した。神宮寺遺跡では中期の土器棺墓や、後期の竪穴建物を検出した。

後期には高尾山山頂遺跡に高地性集落が営まれ、同遺跡の南側の谷から多紐細文鏡がみつかっている。

古墳時代　古墳時代初頭には神宮寺遺跡で河川が検出され、平野遺跡では初頭の遺物が出土しており、生駒山西麓沿いに当該時期の集落が点在したと推測される。

弥生時代中期から後期にかけて中心的な集落となった大県遺跡では、隣接する大県南遺跡とともに鍛冶関連の遺構・遺物が多数みつかった。大県遺跡一帯に、鍛冶集団の集落があった可能性がある。また、韓式系土器も顕著に出土する事から、鍛冶集団と渡来人との関係も指摘される。

大県遺跡の東側、生駒山地の中腹に築かれた平尾山古墳群平野・大県支群では、簪（かんざし）やミニチュア炊飯具といった渡来系氏族を彷彿させる副葬品や鉄滓などが出土し、同古墳群と大県遺跡との関連が指摘されている。

古代　神宮寺遺跡においても、古墳時代後期の土坑・溝を検出している。

飛鳥時代から奈良時代にかけては、『続日本紀』天平勝宝８（756）年に孝謙天皇の難波宮行幸時に

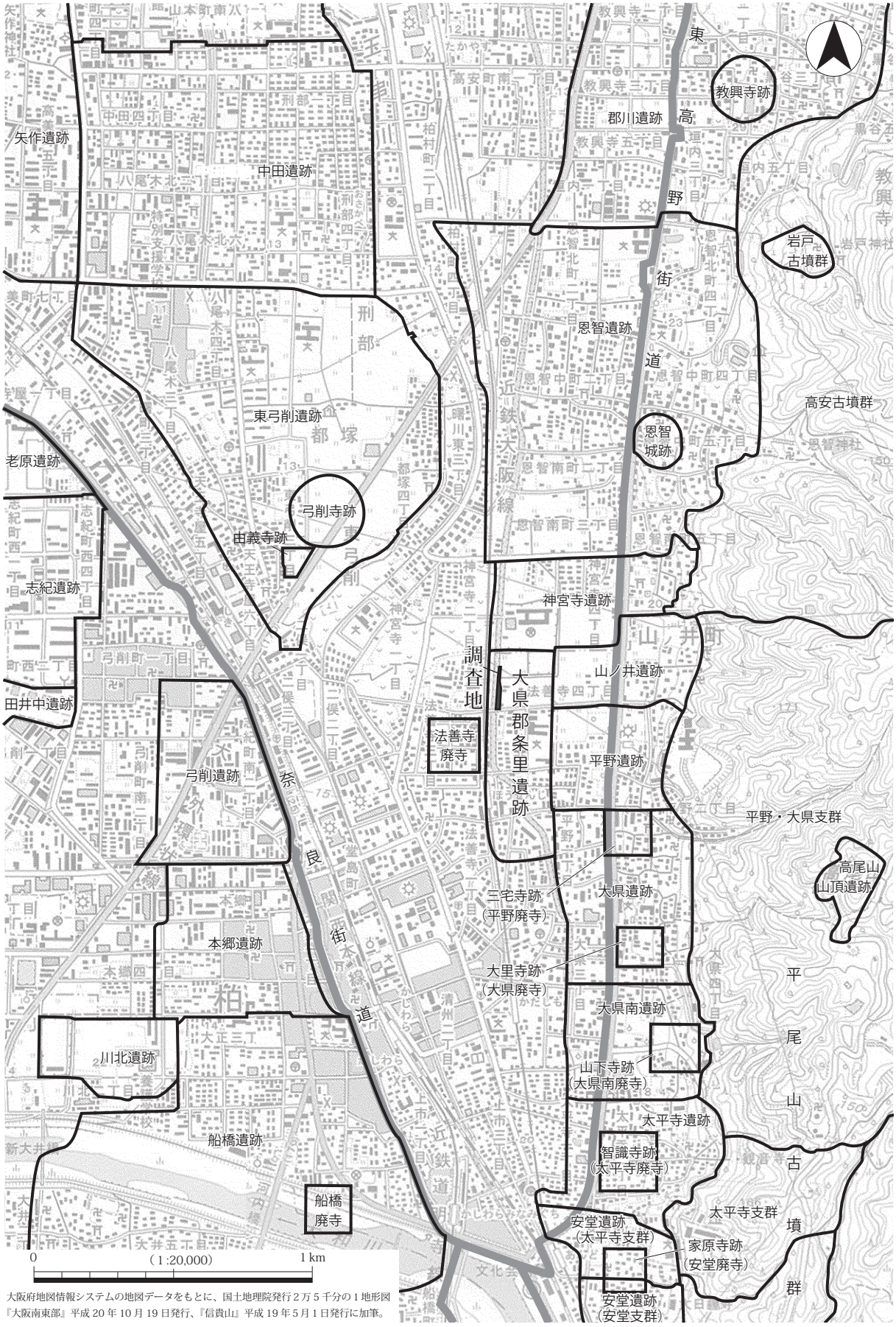

東高野街道
教興寺跡
郡川遺跡
矢作遺跡
中田遺跡
岩戸古墳群
恩智遺跡
高安古墳群
恩智城跡
東弓削遺跡
老原遺跡
弓削寺跡
由義寺跡
志紀遺跡
神宮寺遺跡
調査地
大県郡条里遺跡
山ノ井遺跡
田井中遺跡
法善寺廃寺
平野遺跡
弓削遺跡
平野・大県支群
高尾山山頂遺跡
三宅寺跡（平野廃寺）
大県遺跡
本郷遺跡
大里寺跡（大県廃寺）
大県南遺跡
川北遺跡
山下寺跡（大県南廃寺）
太平寺遺跡
船橋遺跡
智識寺跡（太平寺廃寺）
船橋廃寺
安堂遺跡（太平寺支群）
太平寺支群
家原寺跡（安堂廃寺）
安堂遺跡（安堂支群）
平尾山古墳群
奈良街道
0
（1:20,000）
1 km
大阪府地図情報システムの地図データをもとに、国土地理院発行２万５千分の１地形図『大阪南東部』平成 20 年 10 月 19 日発行、『信貴山』平成 19 年５月１日発行に加筆。

図３－１　周辺の遺跡

参拝が記された、鳥坂寺、家原寺、智識寺、山下寺、大里寺、三宅寺の「河内六寺」と称される寺々が生駒山西麓に沿って建立された。『続日本紀』によれば、聖武天皇や称徳天皇はこれらの寺院にたびたび行幸したと言う（図３－２）。

この六寺院のうち、大県南遺跡に近接する大県南廃寺は河内六寺の山下寺に、大県廃寺は井戸から「大里寺」と墨書された土師器鍋が出土した事から大里寺にそれぞれ比定される。

また、高井田廃寺は、周辺に「戸坂」の字名が残る事や「鳥坂寺」と書かれた墨書土器が出土している事から、鳥坂寺と考えられている。この寺跡は、調査で塔跡、金堂跡、講堂跡などが検出され、河内六寺の中で伽藍配置がわかる唯一の寺院である（高井田廃寺は家原寺跡より約 0.5㎞南に位置する）。

一方、大県遺跡では奈良時代の鍛冶関連遺構や、古代東高野街道の側溝の可能性がある溝を検出し、萬年通寶（760 年初鋳）や神功開寶（765 年初鋳）が９枚出土した。

中世　山ノ井遺跡の扇状地上の調査では鎌倉時代の石垣を検出し、10 世紀末から 15 世紀前半に至る土師器皿をはじめ、黒色土器、瓦器、陶磁器などが多量に出土した。神宮寺遺跡では、14 世紀の掘立柱建物や土坑などが検出されている。

近世　付け替え以前の大和川は、たびたび洪水を繰り返した。寛文６（1666）年から 10 年ほどで川底が周囲の土地より数メートルも急激に上がった結果、延宝２（1674）年には法善寺前二重堤にて決壊が起こり、以後『堤切所之覚付箋図』によれば、洪水が頻繁に下流域で発生した事がうかがえる。宝永元（1704）年に川が付け替えられた後は、新田開発が進むとともに、河内平野は綿花の一大産地として知られるようになる。

センター第289集『山ノ井遺跡13』図５に加筆。
（図５は柏原市立歴史資料館2007『河内六寺の輝き』をもとに、国土地理院発行５万分の１地形図『大阪東南部』平成21年発行に加筆したもの。）

図３－２　河内六寺位置図

第３節　既往の調査

平成 14・15 年度、大阪府教育委員会が恩智川（法善寺）多目的遊水地予定地内の確認調査を実施し、弥生時代から中世の遺物が広範囲に出土する事を確認した。その結果、事業予定地内を調査する事が決定し、平成 23 年度から令和２年度にかけて、６次にわたって調査が実施されている（図１）。

平成 23 年度～平成 26 年度の（その１）・（その２）調査では、縄文時代後期後葉から晩期中葉頃の河川を検出し、河川内から滋賀里Ⅰ式の深鉢が出土した。河川は縄文時代晩期中葉には埋没し、縄文時代晩期末頃の竪穴建物の検出から居住域となった事が分った。さらに 10 世紀～中世にかけての、南北に長い長地型条里水田を検出した。

平成 27 年度の（その３）調査と平成 28 年度の（その４）調査では、小規模ながら縄文時代晩期の遺構や古代から中世にかけての条里地割が確認されている。

表１　既往調査一覧表

調査機関	調査次数	調査期間	主な調査成果	文献
大阪府教育委員会		2003.12.20 ～ 2004.04.21	中世の溝、落ち込み検出、縄文～中世の遺物出土	1
（公財）大阪府文化財センター	（その１）調査	2011.06.01 ～ 2012.11.30	縄文後期の河川、古代～中世の条里地割、縄文～中世の遺物出土	2
（公財）大阪府文化財センター	（その２）調査	2013.04.10 ～ 2014.09.30	縄文晩期の建物、古代～中世の条里地割、縄文～中世の遺物出土	3
（公財）大阪府文化財センター	（その３）調査	2015.08.03 ～ 2015.11.09	縄文晩期の遺構、古代～中世の条里地割、縄文～中世の遺物出土	4
（公財）大阪府文化財センター	（その４）調査	2016.12.01 ～ 2017.02.21	古代～中世の条里地割、弥生～中世の遺物出土	6
（公財）大阪府文化財センター	（その５）調査	2018.04.02 ～ 2020.05.31	古代～中世の条里地割、縄文～中世の遺物出土	8
（公財）大阪府文化財センター	（その６）調査	2019.10.01 ～ 2021.01.29	縄文晩期の遺構、古代～中世の条里地割、縄文～中世の遺物出土	9

※　文献番号は以下の参考文献に対応する

平成 30 年度から平成 31 年度の（その５）調査では、古代～中世の条里地割の変遷がより明確になった。

北側のその１・その２調査区が事業予定地北半の調査とすれば、令和元年度～令和２年度の（その６）調査は、（その５）調査と併せて事業予定地南半の大規模な調査となった。北端が坪境にあたるため、坪境を挟んでの南北の基本層序の違いを追える事となった。また、条里地割も坪境より北では南北長地型、坪境より南では東西長地型である事が明確となった。

また、条里制施行以前では、自然地形の高低に応じて古墳時代の溝や縄文時代晩期の河川が、広範囲に広がっている事が確認された。

大県郡条里遺跡は現地形においても条里地割がよく残るが、上記のように、調査によって少なくとも平安時代から現在に至るまで長期間にわたって、連綿と地割がほぼ踏襲され、耕作が続けられてきた事が明らかとなった。

参考文献

１.『大県郡条里遺跡確認調査概要』2005　大阪府教育委員会

２.『大県郡条里遺跡』2013　（公財）大阪府文化財センター

３.『大県郡条里遺跡２』2015　（公財）大阪府文化財センター

４.『大県郡条里遺跡３・山ノ井遺跡』2016　（公財）大阪府文化財センター

５.『大県遺跡・東高野街道』2016　大阪府教育委員会

６.『大県郡条里遺跡４・山ノ井遺跡２』2017　（公財）大阪府文化財センター

７.『山ノ井遺跡３』2018　（公財）大阪府文化財センター

８.『大県郡条里遺跡５』2020　（公財）大阪府文化財センター

９.『大県郡条里遺跡６』2021　（公財）大阪府文化財センター　（刊行予定）

第３章　調査成果

第１節　基本層序

当調査区西端は、現恩智川の堤防にあたるため堤防造成時に攪乱され、基本層序を確認できなかった。また、東端は隣接する（その１）・（その５）・（その６）調査区が先行して調査されており、壁断面実測は実施していない。そこで、南北方向の基本層序は、（その１）・（その５）・（その６）調査区の西壁断面の層序を参考とした。東西断面と南北断面の対照は図示した（図７・８）。

南北長約 160 m、東西幅約 15 mの細長い調査区を３つに分け調査しており、南端の１区南壁（図４）、１区と２区の境にあたる１区北壁（図５）、２区と３区の境にあたる３区南壁（図６）の３箇所で東西方向の地層断面図を作成し、基本層序の把握に努めた。

また、２区のＸ＝－ 155,360 付近は坪境にあたるため、それを境とした北と南では堆積状況や各層の標高が異なる。その他、昭和 20 年代まで旧恩智川が坪境を東西に流れていたため、屈曲の内側と外側では堆積環境の違いもあり、大きく地層が異なった。坪境より北は（その５）・（その６）調査区と、坪境より北は（その１）調査区と堆積状況が似るため、それぞれの基本層序を参考にして（その７）調査区の基本層序を作成し、対比を一覧表にした（表２）。

既往の調査では、氾濫堆積層とその上部の耕作土層を含む土壌化層をセットとして層序を捉えている。氾濫堆積層上部の耕作土層や古土壌層と言った土壌化層をａ層、母材である水成層をｂ層と呼称する。以下に基本層序の概要を述べる。遺構面は層の上面を層と共通した名称とする（例：第３ａ層の上面は第３ａ面）。枝番号やａ・ｂを付して分けた層を一括して呼称する場合は「第○層」とする。

第１層　１区南側でのみ残存し、観察できた。第１ａ層は上部がにぶい黄橙色～灰黄褐色、下部が暗灰黄色の極細砂～細砂混じりシルトの耕作土層である。南にいくほど砂質が強まる。厚さは 0.2 ～ 0.3 mである。第１ｂ層は黄灰色の中砂～細砂とシルトが混じる。人為的な攪拌を受けており、洪水堆積層を整地した地層と思われる。部分的に薄く堆積する。

第２層　ａ層は１区でのみ残存し、第２－４ｂ層のみ２区でも残存している。第２層は第２－１ａ層から第２－４ａ層に分かれるａ層とその最下部のｂ層で構成されるが、第２－１ａ層と第２－２ａ層など層別が明確でない。

第２－１ａ層は明黄褐色細砂で、耕作土層である。第２－２ａ層は黄褐色～暗灰黄色シルトで、島畠上の耕作土層である。第２－３ａ層は黄灰色～にぶい黄褐色の細砂質シルトの耕作土層である。第２－４ａ層は黄褐色極細砂～細砂混じりシルトで、かなり粘質である。

第２－４ｂ層は第２－４ａ層直下のにぶい黄褐色極細砂～細砂と暗灰黄色シルトが互層となって、厚さは 0.3 ～ 0.5 mと厚く堆積する。北にいくと互層が乱れ、シルトがブロック状に混じる。

第１層から第２－４ｂ層までは中世末か近世以降の堆積であるため、重機で掘削した。

第３層　第３層は１区と２区の南半まではみられるが、２区の北半と３区では削平を受けていた。ａ層のみを確認した。第３ａ層は灰色で、中砂～細砂混じりシルトの耕作土層である。

１区では第２－４ｂ層に覆われているので、第３層上面はほとんど削平を受けていない。上面は北から南までほぼT.P.＋12.4 ～ 12.5 mと平坦である。第３層は瓦質土器や陶磁器など中世後半の遺物を含む。

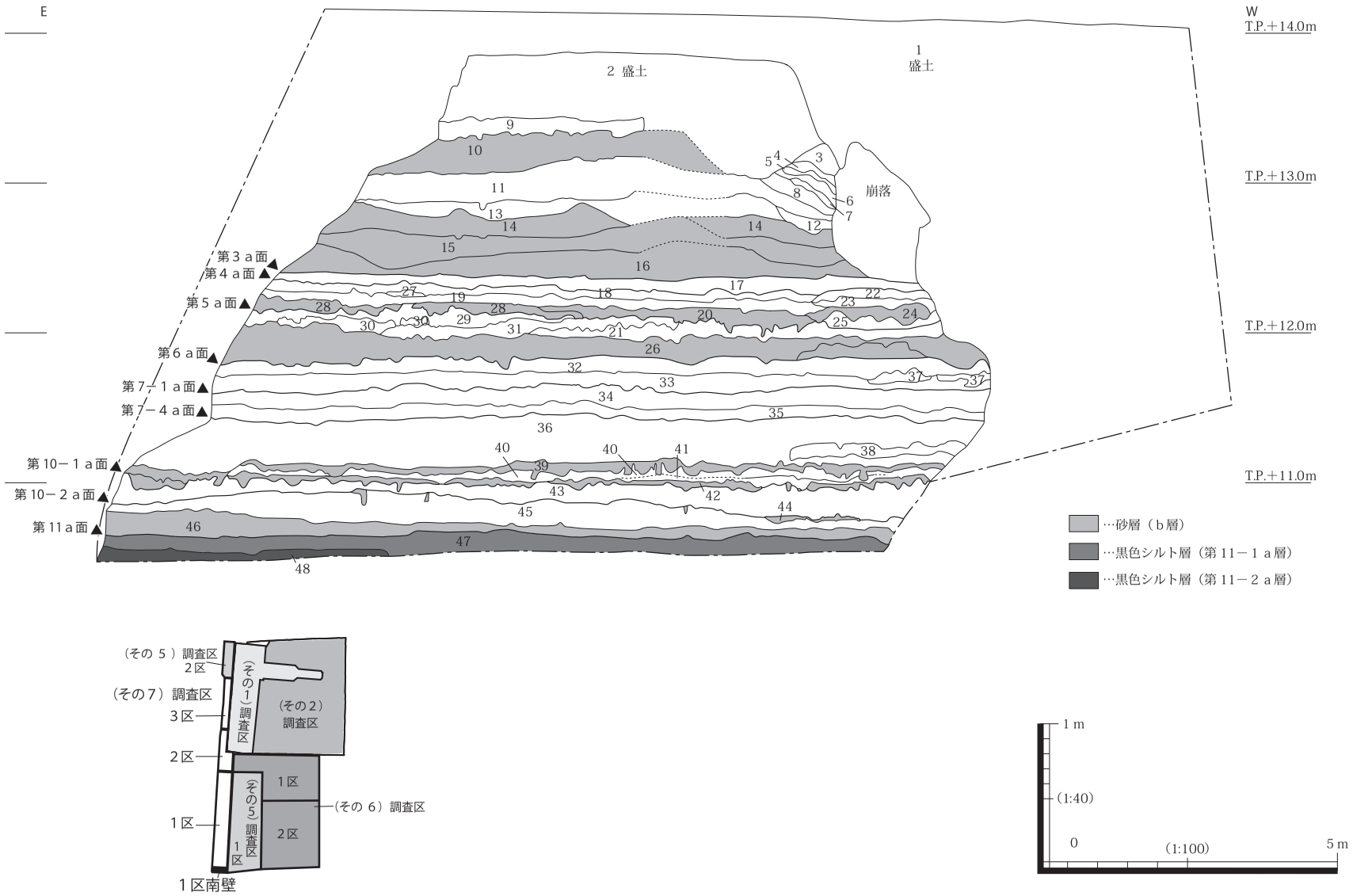
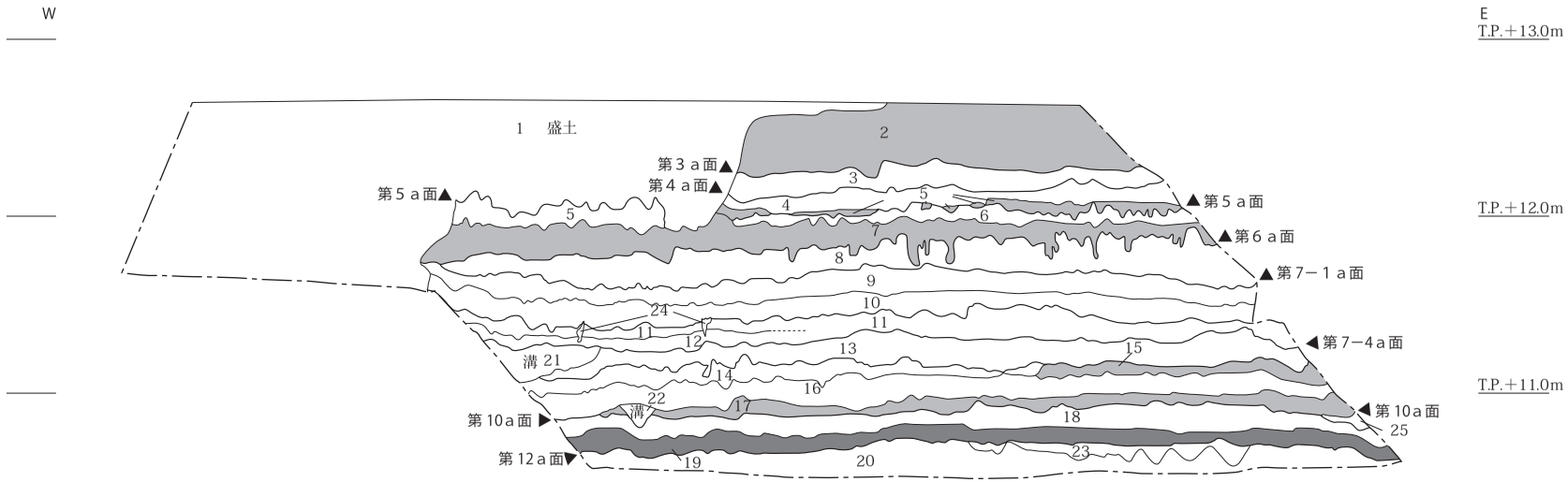

E
W
T.P.＋14.0m
T.P.＋13.0m
T.P.＋12.0m
T.P.＋11.0m
1 盛土
2 盛土
崩落
第３ａ面
第４ａ面
第５ａ面
第６ａ面
第７－１ａ面
第７－４ａ面
第10－１ａ面
第10－２ａ面
第11ａ面
…砂層（ｂ層）
…黒色シルト層（第11－１ａ層）
…黒色シルト層（第11－２ａ層）
（その５）調査区
２区
（その７）調査区
３区
２区
１区
１区
（その１）調査区
（その２）調査区
１区
２区
（その５）調査区
１区
（その６）調査区
１区南壁
1 m
(1:40)
0
(1:100)
5 m

図４　１区　南壁断面図

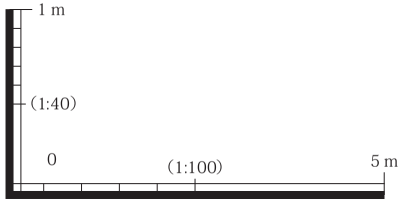
〈１区南壁断面図　土色〉

1　2.5Y4/3　オリーブ褐　細砂～礫　盛土
2　10YR5/2　灰黄褐　細砂に　2.5Y5/2　暗灰黄色　シルトブロックが混じる　盛土
3　2.5Y6/4　にぶい黄　極細砂にシルトブロックが混じる　盛土
4　2.5Y5/4　黄褐　極細砂　盛土
5　2.5Y5/4　黄褐　細砂にわずかにシルトが混じる　盛土
6　2.5Y5/4　黄褐　極細砂　盛土
7　2.5Y4/4　オリーブ褐　細砂　盛土
8　2.5Y4/3　オリーブ褐　細砂　10がすべりおちた層　盛土
9　10YR4/2　灰黄褐　シルト　第１層
10　10YR6/6　明黄褐　細砂　第２－１ａ・２－１ｂ層
11　10YR5/4　にぶい黄褐　極細砂混シルト　第２－３ａ層
12　2.5Y5/4　黄褐　細砂
13　10YR5/8　黄褐　極細砂～細砂混じりシルト　水平堆積　第２－４ａ層
14　10YR5/6　黄褐　極細砂～細砂混じりシルト　ラミナあり　第２－４ｂ層
15　2.5Y6/3　にぶい黄　極細砂と　2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂が互層、ラミナ堆積　第２－４ｂ層
16　2.5Y4/3　オリーブ褐　極細砂と　10YR5/4　にぶい黄褐　極細砂が互層、ラミナあり　第２－４ｂ層
17　2.5Y4/1　黄灰　シルト　第３ａ層
18　5Y4/1　灰　極細砂混シルト　第４－１ａ層
19　5Y4/1　灰　極細砂～細砂混シルト　第４－１ａ層よりやや砂質つよい　第４－２ａ層
20　2.5Y5/4　黄褐　細砂と　5Y4/2　灰オリーブ　シルトが混じる　踏み込み状　第４－２ｂ層
21　5Y4/1　灰　細砂混シルト　第５ａ層　この中に黒色植物遺体層がある
22　2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂混シルト　近世堤　盛土か
23　5Y5/2　灰オリーブ　極細砂混シルト　近世堤　盛土か
24　5Y4/3　暗オリーブ　細砂混シルト　近世堤　盛土か
25　5Y4/1　灰　細砂　近世堤　盛土か
25　5Y4/1　灰　細砂　近世堤　盛土か
26　5Y6/1　灰　極細砂　第５ｂ層
27　5Y5/1　灰　極細砂混シルト　西側盛土部分
28　5Y4/2　灰オリーブ　極細砂～細砂
29　5Y4/3　暗オリーブ　シルトに　2.5Y5/4　黄褐　細砂が混じる　第４－２ｂ層　西側盛土部分
30　2.5Y5/4　黄褐　細砂～中砂　西側盛土部分
31　2.5Y5/2　暗灰黄　シルト混極細砂　溝埋土
32　7.5Y4/1　灰　極細砂混シルト　第６－１ａ層
33　7.5Y4/2　灰オリーブ　極細砂シルト　第６－２ａ層　第６－１ａ層よりやや砂質弱い
34　5Y4/2　灰オリーブ　シルト～粘質土　第６－１ａ・６－２ａ層よりさらに粘性が高くなる　第７－１ａ層
35　10Y4/1　灰　細砂混シルト～粘質土　カルシウムの結核が混じる　第７－２ａ層
36　5Y3/2　オリーブ黒　細砂混シルト　第７－４ａ層　上層が第７－３ａ層の可能性がある
37　2.5Y6/3　にぶい黄　極細砂
38　2.5Y4/1　黄灰　極細砂混シルト
39　10YR6/6　明黄褐　中砂～粗砂　第７－４ｂ層
40　5Y4/1　灰　細砂混シルト　第８ａ層　第８層と第９層の層界は恣意的　第８層の方がやや土色が濃く、第７－４ｂ層の影響か砂質が強い
41　5Y5/1　灰　極細砂混シルト　第９ａ層　第８層と第９層の層界は恣意的　第８層の方がやや土色が濃く、第７－４ｂ層の影響か砂質が強い
42　2.5Y5/3　黄褐　極細砂～粗砂　第９ｂ層
43　2.5GY4/1　暗オリーブ灰　シルト　第10－１ａ層
44　2.5Y6/4　にぶい黄　シルト混極細砂～粗砂　第10－１ｂ層
45　2.5YGY4/1　暗オリーブ灰　シルト　第10－２ａ層
46　5Y4/1　灰　シルト　水成シルト層　第10－２ｂ層
47　5Y3/1　オリーブ黒　シルト　第10－２ｂ層と対比すると、やや濃く紫灰色にみえる　第11－１ａ層
48　2.5Y3/1　黒褐　シルト　黒色帯　第11－２ａ層



1　10YR7/4　にぶい黄褐　極細砂（第２－４ｂ層埋土）に 2.5Y4/2　暗灰黄　シルト（第３ａ層 or 第４ａ層埋土）ブロックが混じる　盛土層
2　2.5Y7/3　浅黄　極細砂　第２－４ｂ層
3　2.5Y4/2　暗灰黄　極細砂混シルト　第３ａ層
4　2.5Y4/2　暗灰黄　極細砂混シルト、酸化斑あり　第４ａ層
5　5Y5/3　灰オリーブ　シルト～極細砂　第４－２ｂ層
6　5Y4/1　灰　極細砂混シルト　第５ａ層
7　2.5Y6/4　にぶい黄褐　極細砂　第５ｂ層
8　7.5Y4/1　灰　極細砂混シルト　第６ａ層
9　10YR4/2　灰黄褐　シルト　第７－１ａ層
10　2.5Y4/2　暗灰黄　シルト、北では少ないが南から中央ではカルシウムの結核がみられる　第７－２ａ層
11　10YR5/1　褐灰　シルト　第７－３ａ層
12　5Y4/3　暗オリーブ　シルト　第７－３ａ層
13　10YR4/2　灰黄褐　極細砂～細砂混シルト、他層より茶色味を帯び、砂の含有量が多い層　第７－４ａ層
14　5Y3/2　オリーブ黒　極細砂混シルト　第８－１ａ層
15　5Y4/3　暗オリーブ　極細砂混シルト　第７－４ｂ層
16　2.5GY4/1　暗オリーブ灰　シルト　第８－２ａ層
17　10Y4/1　灰　極細砂混シルト　第８－２ｂ層
18　2.5GY5/1　オリーブ灰　シルト　第10ａ層
19　7.5Y3/1　オリーブ黒　シルト　暗色帯　第11ａ層
20　5GY4/1　暗オリーブ灰　シルト　第12ａ層
21　10YR4/2　灰黄褐　極細砂～細砂混シルト　溝埋土
22　10YR4/1　褐灰　シルト　溝埋土
23　7.5Y3/1　オリーブ黒　シルトと 5GY4/1　暗オリーブ灰　シルトが混じる、攪拌された層
24　2.5Y6/6　明黄褐　細砂　足跡の踏み込み
25　10YR4/3　にぶい黄褐　シルト　第９ａ層

…砂層（ｂ層）
…黒色シルト層（第 11－２ａ層）



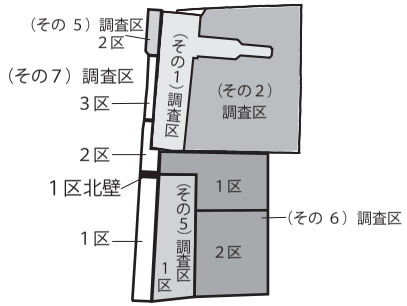


図５　１区　北壁断面図

第４層　第４層のａ層は南側では２つに分かれるが、北側では１層となる。３区では第４ａ層まで削平されていた。その下部で上半分が細砂、下半分がシルトのｂ層からなる。第４－１ａ層と第４－２ａ層の間にｂ層は認められなかった。

第４－１ａ層は灰色～暗灰色の中砂～細砂混じりシルトの耕作土層である。第４－１ａ層上面を第４ａ面とする。第４－２ａ層は灰色～緑灰色の中砂混じりシルトの耕作土層で、第４－１ａ層より砂質が強い。厚さはいずれも 0.1 m程度である。上面の高さは T.P. ＋ 12.1 ～ 12.4 mで、南が高く北が低い地形である。

第４－２ｂ層は灰オリーブ～青灰色の細砂～シルトで、ラミナのある洪水堆積層である。ラミナはかなり乱れ、足跡の踏み込みがみられる。下部のシルトの上面には土壌化の痕跡は一切なく、一回の洪水で堆積したものと言える。厚さは 0.1 ～ 0.2 mである。第４層も瓦質土器など中世後半の遺物を含む。

第５層　第５層は最上部の砂粒を含むａ層と下部のｂ層に分かれる。第５ａ層は３区では堆積が厚く２つに分かれたが、それ以外は１つの層と認識した。

第５ａ層は、灰色細砂混じりシルトの耕作土層で、灰オリーブ色細砂のブロックを含む。上面の高さは T.P. ＋ 11.9 ～ 12.1 mで、南が高く北が低い。厚さは 0.1 ～ 0.2 mである。第４－２ｂ層で覆われていたため第５ａ層上面は削平を受けず、１区から３区のすべての区で畦畔・溝などが検出されている。下面の土壌化はさほど進行していない事から、比較的短期間で埋没したものと思われる。

第５ｂ層は、厚さが平均 0.2 ～ 0.3 mと比較的厚く堆積していた。灰オリーブ色細砂～灰色細砂混じりシルトのブロックからなり、ブロックの中にはラミナが残るものもある。第５層は瓦質土器などを含むが、第４層より若干古い遺物が混じる。

第６層　ａ層のみからなり、第６ａ層はわずかに細砂を含む灰色シルトの耕作土層である。第６ａ層以下の層はシルト～粘質土が主体となる。厚さは 0.1 ～ 0.2 mで、１区南側では第６－１ａ層と第６－２ａ層に分かれたが、北にいくほど層厚が薄くなり、分層できなかった。第６－１ａ層上面を第６ａ面とする。上面の高さは T.P. ＋ 11.7 ～ 11.8 mで、南が高く北が低い、東が高く西が低い地形である。

第５ｂ層で覆われているので、第６ａ層上面はほとんど削平を受けておらず、１区から３区のすべての区で畦畔や畝溝、耕作具痕、人や牛の踏み込みを検出した。第６層の遺物は 13 世紀後半～ 14 世紀前半の瓦器などが主体となる。

第７層　第７層は坪境より北では厚く堆積し、３層に分かれるａ層と、最下層のｂ層から構成される（隣接する (その５) 調査区ではａ層を４つに分層しているが、当調査区では第７－２ａ層と第７－３ａ層、もしくは第７－３ａ層と第７－４ａ層の判別が困難で、合致すると想定する層名のみ隣接区から踏襲した。よって、第７－３ａ層は１区北壁断面では分層しているが、第７－２ａ層もしくは第７－４ａ層として掘削している）。ただし、坪境を超えた３区では第７層の堆積は極めて薄く分層できない。

第７－１ａ層は灰色～灰オリーブ色の細砂混じりシルトで、わずかに細かい植物遺体を含む耕作土層である。上面の高さは T.P. ＋ 11.6 ～ 11.7 mで､厚さは 0.1 mである。上面では､畦畔の痕跡を検出した。

第７－２ａ層は灰色の中砂混じりシルトで、炭酸カルシウムの結核が上半部に目立つ耕作土層である。上面の高さは T.P. ＋ 11.5 ～ 11.6 mで、厚さは 0.1 mである。

第７－４ａ層は暗オリーブ灰色～灰黄褐色の粗砂混じりシルトの耕作土層である。砂質の強いａ層であり、上層（第７－２ａ層もしくは第７－３ａ層）との差異は、北にいくほど砂質が強くなり明瞭である。上面の高さは T.P. ＋ 11.5 mで、厚さは 0.3 mである。上面では、畦畔や溝の痕跡を検出した。

第７－４ｂ層は１区の南から北東部にかけて部分的に堆積していた。青灰色～灰白色の粗砂～細砂で、かなり人為的に攪拌されている。第７層の遺物は 13 世紀から 14 世紀前半の瓦器・土師器などが主体となるが、第７－４ａ層以下には 12 世紀前半代の瓦器も含まれる。

第８層　１区と２区では第８層と第９層の分層が困難で、第８ａ層上面の調査も行っていない。１区北壁でのみ第８－１ａ層と第８－２ａ層を識別した。３区では第８層と第９層の間にわずかに砂層（第８ｂ層？）が認められる。

第８－１ａ層は灰色極細砂混じりシルトの耕作土層である。第８－２ａ層は暗オリーブ灰色極細砂混じりシルトである。第８－２ｂ層は灰色極細砂混じりシルトで部分的に存在する。

坪境以北では第７層の堆積が薄かったが、３区では第８ａ層が厚さ 0.2 ｍと厚く堆積し、その結果、第８層以下は標高も北が高くなり、これまでと逆転する。上面の高さは１区南端で T.P. ＋ 11.1 ｍ、３区で T.P. ＋ 11.4 ～ 11.5 ｍと、第７層までの南が高い地形から、北が高く南が低い地形へと変化する。第５ａ層から第８ａ層までは瓦器が包含されているが、第８ａ層から第９ａ層になると 11 世紀後半から 12 世紀前半の遺物が主体となる。

第９層　ａ層と黄褐色極細砂～細砂のｂ層で構成される。第９ａ層は暗灰黄色シルトの耕作土層である。１区と２区では第８層と第９層の分層が困難で、第９ａ層上面の調査も行っていない。１区ではａ層とｂ層合わせて 0.1 ｍ程の層厚であったが、３区では第９ａ層が 0.2 ｍと比較的厚く堆積している。第９ａ面の高さは T.P. ＋ 11.3 ～ 11.4 ｍである。

１区南半でのみ、にぶい黄色細砂の第９ｂ層を確認した。第９ｂ層は厚さ 0.05 ～ 0.1 ｍであるが、遺物の含有量が多い。遺物は瓦器は含まれず黒色土器や須恵器が目立つようになる事から、瓦器出現以前の古代末に属すると考えられる。

第 10 層　第 10 層は２層に分かれるａ層とその間、最下層の２層のｂ層で構成される。ただし、第 10 － 1 ｂ層が確認されるのは１区南半のみで、北側では第 10 － 1 ａ層と第 10 － 2 ａ層の判別は困難である。第 10 － 2 ｂ層は１区と２区で認められる。

第 10 － 1 ａ層は暗オリーブ灰色の細砂混じりシルトの耕作土層である。上面の高さは T.P. ＋ 11.0 ～ 11.3 ｍで、厚さは 0.1 ｍ程度である。第９ｂ層を除去し、１区南半や２区で畦畔や溝を検出した。

第 10 － 2 ａ層は暗オリーブ灰色シルトの耕作土層で、上面の高さは T.P. ＋ 10.9 ～ 11.1 ｍで、厚さは 0.1 ｍ程度である。１区南半で溝などを検出した。第 10 層は１区南端では T.P. ＋ 11.0 ｍ前後だが、２区では T.P. ＋ 11.3 ｍと高くなり、３区では再び T.P. ＋ 11.0 ｍと低くなる。

第 10 － 2 ｂ層は厚さ 0.1 ｍ程度の灰オリーブ色シルトで、北にいくとやや粘性が強くなり、ａ層との判別が難しい。第10層までを耕作土層と捉える。第10層には弥生時代から奈良時代の土器が含まれる。

第 11 層　第 11 層は２層に分かれるａ層であるが、粘質の強い黒色土層である事から、他の層とは容易に判別できる鍵層となる。ただし、北にいくほど２層の分層は困難で、３区では１層にしか認識できなかった。第 11 － 1 ａ層上面を第 11 ａ面とした。第 11 層までは全調査区で調査を実施した。

第 11 － 1 ａ層はオリーブ黒色シルト～粘土で下層よりやや黒色が薄く、わずかに細砂を含む。第 11 － 1 ａ層の上面の高さが T.P. ＋ 10.7 ～ 10.9 ｍである。第 12 ａ面で検出した２区の 56 溝～ 58 溝や土坑は第 11 層から切り込む可能性も高いが、遺構埋土と第 11 層が認識できず、第 12 ａ面で検出した。

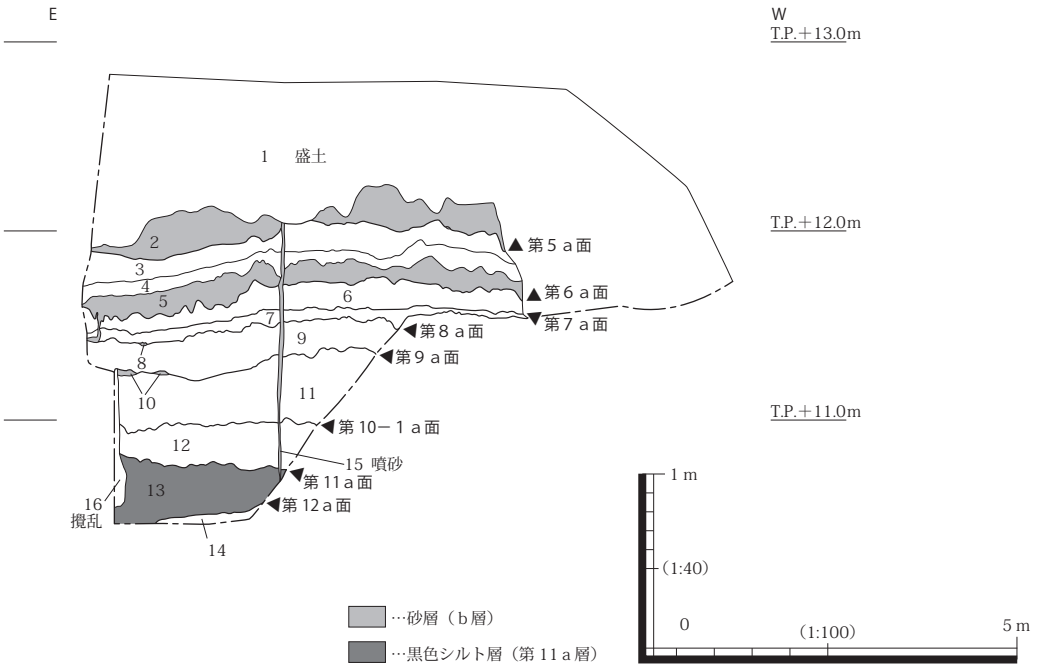
第 11 － 2 ａ層は黒色シルト～粘土である。第 11 － 2 ａ層の上面の高さが T.P. ＋ 10.5 ～ 10.7 ｍと、第 11 － 2 ａ層は南から北にいくほど高くなる。

第 11 層からはわずかに古墳時代から奈良時代の須恵器などが出土し、古代以前の層と考えられる。また、３区では第 11 層から液状化現象によって、第４－２ｂ層まで巻き上がった地震痕跡（噴砂）が観察できた。

第 12 層　第 12 ａ層は青灰色シルトの古土壌層である。第 12 層以降は遺物が出土しない無遺物層となる。第 12 ａ面までを調査対象とした。

上面の高さが T.P. ＋ 10.3 ～ 10.5 ｍと南が低く北が高い地形で、１区南半では設計掘削深度が第 12 層上面より高い。よって、遺構面調査は１区の南半では第 11 ａ面で、それより北では第 12 ａ面で終了した。しかし、隣接する (その５)・(その６) 調査区の下層流路から古墳時代の土師器が出土した。そこで、１区の第 11 面で調査を終了した区域において、流路が延伸すると想定される部分のみ下層確認を行ったが、顕著な遺構・遺物は認められなかった（図 40）。

２区から３区にかけては、第 12 ａ面で (その６) 調査区から続く流路（55 流路）や溝、土坑などを検出した。55 流路は大規模な流路で、縄文時代晩期前半から弥生時代前期の土器が出土している。



1　10YR7/4　にぶい黄褐　細砂に　2.5Y4/2　暗灰黄　シルトブロックが混じる　盛土
2　2.5Y7/3　浅黄　細砂　ラミナあり　第４－２ｂ層
3　5Y5/1　灰　細砂混シルト　第５－１ａ層
4　5Y5/1　灰　細砂混シルト　第５－２ａ層
5　2.5Y7/3　浅黄　細砂　ラミナあり　第５ｂ層
6　N5/0　灰　極細砂混シルト　第６ａ層
7　N5/0　灰　極細砂混シルト　６よりシルト質が強い　第７ａ層
8　N5/0　灰　極細砂　第７ｂ層
9　5Y5/1　灰　極細砂混シルト　６・７より砂質強い　上面にわずかに砂層残る　第８ａ層
10　5Y5/1　灰　極細砂　第８ｂ層
11　2.5Y5/2　暗灰黄　シルト　上面にわずかに砂層残る　第９ａ層
12　5B5/1　青灰　シルト　第 10ａ層
13　7.5Y3/2　オリーブ黒　シルト　第 11ａ層
14　10GY5/1　緑灰　極細砂混シルト　第 12ａ層
15　2.5Y6/4　にぶい黄　細砂～中砂　14 以下から２まで貫通する
16　撹乱　（鋼矢板打設時のもの）

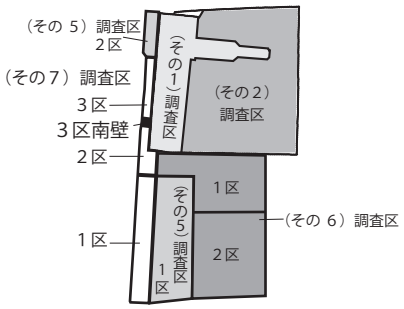


図６　３区　南壁断面図

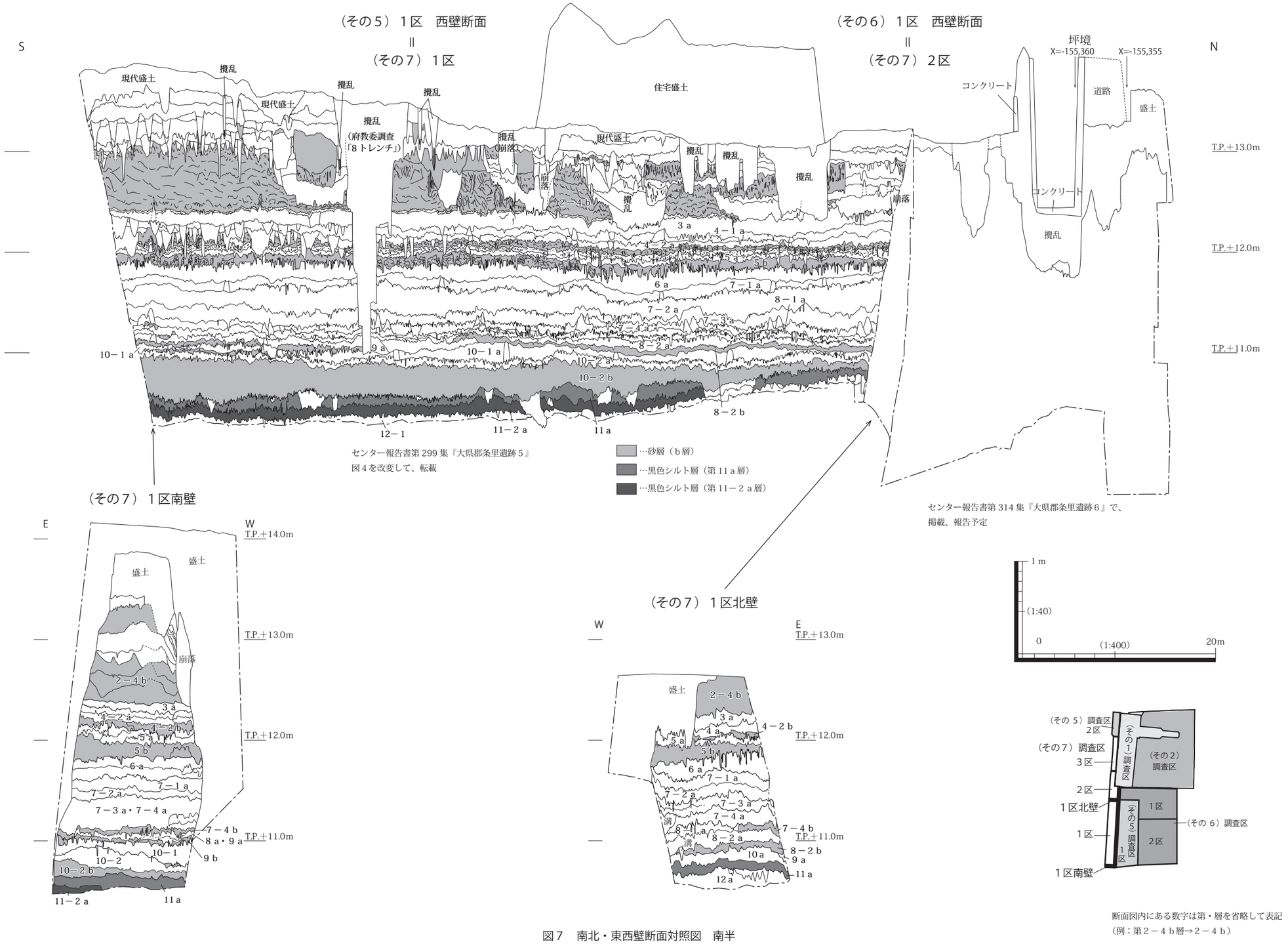


図７　南北・東西壁断面対照図　南半

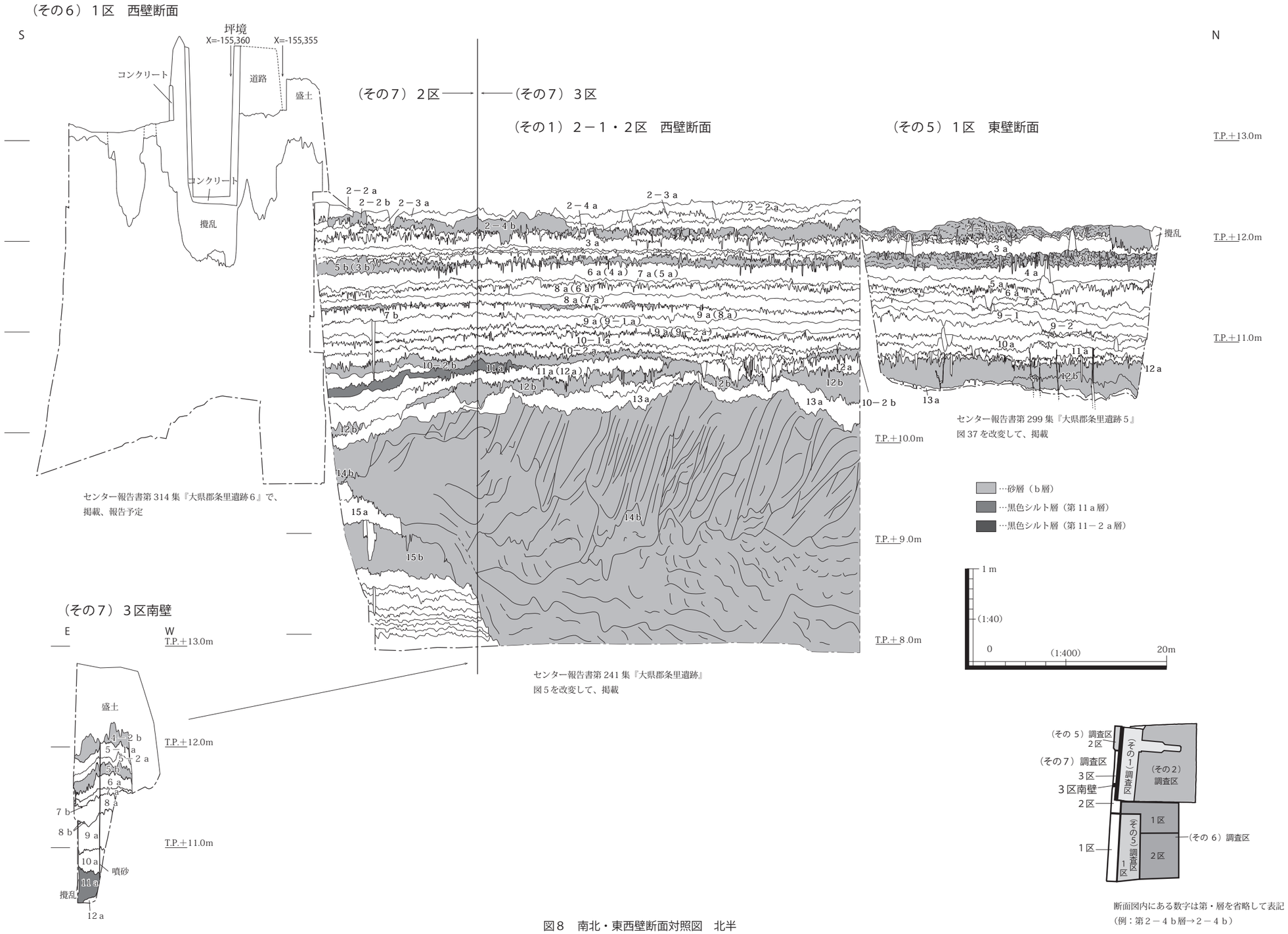


図８　南北・東西壁断面対照図　北半

表２　既往の調査との基本層序対応表

（その５・６） 南の坪	（その５・６） 北の坪	（その７）	（その１） （その５）２区	（その２）
第０層	第０層	第０層	第０層	
第１ａ層	第１ａ層	第１ａ層	第１ａ層	
第１ｂ層	第１ｂ層		第１ｂ層	
第２－１ａ層	第２－１ａ層	第２－１ａ層		
第２－１ｂ層		第２－１ｂ層		
第２－２ａ層	第２－２ａ層？	第２－２ａ層		
第２－２ｂ層	第２－２ｂ層	第２－２ｂ層		
第２－３ａ層	第２－３ａ層	第２－３ａ層		
第２－３ｂ層				
第２－４ａ層	第２－４ａ層	第２－４ａ層		
第２－４ｂ層	第２－４ｂ層	第２－４ｂ層		
第３ａ層	第３－１ａ層	第３ａ層		
	第３－２ａ層		第２－２ａ層？	
	第３－３ａ層		第２－２ａ層？	
	第３－３ｂ層		第２－２ｂ層	
第４－１ａ層	第４－１ａ層	第４－１ａ層	第２－３ａ層	
第４－２ａ層	第４－２ａ層	第４－２ａ層	第２－４ａ層	
第４－２ｂ層		第４－２ｂ層	第２－４ｂ層	ここまで第０層
第５ａ層	第５ａ層	第５ａ層	第３－１ａ層 （第３－２ａ層・ 第３－３ａ層）	第１－１層
第５ｂ層	わずかに砂層	第５ｂ層	第３－３ｂ層	第１－２層
第６ａ層	第６ａ層	第６－１ａ層・第６－２ａ層	第４ａ層	第２層
第７－１ａ層	第７ａ層	第７－１ａ層	第５ａ層	第３－１層
第７－１ｂ層	第７ｂ層			
第７－２ａ層		第７－２ａ層		
第７－３層洪水？		第７－３ａ層		
第７－４ａ層	第８ａ層	第７－４ａ層	第６ａ層	
第７－４ｂ層	第８ｂ層	第７－４ｂ層		
第８－１ａ層	第９－１ａ層	第８－１ａ層	第７ａ層	第４層
第８－２ａ層		第８－２ａ層		
第８－２ｂ層		第８－２ｂ層		
第９ａ層	第９－２ａ層	第９ａ層	第８ａ層・第９－１ａ・ 第９－２ａ層	第５層
第９ｂ層		第９ｂ層		第５層下層？
第 10 －１ａ層	第 10 ａ層	第 10 －１ａ層	第 10 ａ層	第６層
第 10 －１ｂ層	第 10 ｂ層	第 10 －１ｂ層	第 10 ｂ層	
第 10 －２ａ層		第 10 －２ａ層		
第 10 －２ｂ層	第 10 －２ｂ層	第 10 －２ｂ層	第 10 －２ｂ層	
第 11 －１ａ層	第 11 ａ層	第 11 －１ａ層	第 11 ａ層	第７層・８層・第９層 上面
第 11 －２ａ層	第 12 ａ層	第 11 －２ａ層		
第 12 －１層	第 12 ｂ層	第 12 ａ層	その１第 12 ａ層・ その５・２区第 12 ｂ層	第９層下面
第 12 －２層	第 12 ｂ層		第 12 ｂ層	
	第 13 －１ａ層		第 13 －１ａ層	
	第 13 －２ａ層		第 13 －２ａ層	第 10 層
	第 13 ｂ層		第 13 ｂ層	
	第 14 ａ層		第 14 ａ層	第 11 層
	第 14 ｂ層		第 14 ｂ層	

第２節　第３ａ面・第４ａ面・第４－２ｂ面の遺構と遺物

（１）第３ａ面の遺構（図９・10、写真図版１）

調査は、南北長約 160 m、東西幅約 15 mの細長い区画を３調査区に分けて行った。調査区名は南から１区、２区、３区とした（図２）。調査は掘削土の置き場を確保するため、１区、３区、２区の順で行った。重機で盛土から近世の包含層である第１層、第２層合わせて 0.5 ～ 1.0 m掘削した後、人力による掘削を第３ａ層から行った。

調査区によっては、近現代の攪乱によって上層の遺構面が削平されているか、あるいは認識できずに遺構面数が少なくなった場合もあるが、1 調査区で平均６、７遺構面を調査した。調査時に基本層序の層名に合わせて、同一層上面の遺構面名は揃えたが（例：第３ａ層上面は第３ａ面）、坪境を境に堆積状況が変わる事もあり、１つの区の南北で遺構面にずれが生じた場合もあった。整理作業でその整合性を検証し、３つの区を結合させた各遺構面の平面図を作成した。

第３ａ面は、重機で盛土から近世の包含層である第１層、第２層を除去して検出した。各区とも西端から幅 10 mにわたっては、恩智川のコンクリート擁壁や護岸造営のため、約 1.0 mの深さで攪乱されており、攪乱は第６ａ面まで達していた。それより東は、１区では第２層のａ層や第２－４ｂ層が厚く堆積していたため、第３ａ面は良好な状態で残存していた。

しかし、２区と３区では、現代の恩智川に流れる水路や水門調節室などの構造物造成時に大きく攪乱されていた。２区は X ＝－ 155,365 より北、Y ＝－ 34,238 より西は、第３ａ面は削平されて検出できなかった。３区は全域が削平されていた。

第３ａ面は浅黄色や黄灰色の極細砂混じりシルトをベースとし、遺構面の高さは１区で T.P. ＋ 12.3 ～ 12.4 m、２区で T.P. ＋ 12.1 ～ 12.2 mである。ほぼ平坦だが、南から北に低くなる傾向にある。

１区では東西方向の畦畔や溝、ピットを検出した。隣接する（その５）・（その６）調査区同様、東西長地型地割である事が判明した。耕作面は第２－４ｂ層の砂層に覆われていたため、人や牛の足跡が踏み込みとなって、明瞭に残る。

65・67 ～ 69・71・73 畦畔（図 10）　１区全域にわたって、北端の 73 畦畔から南端の 65 畦畔まで、６本の東西方向を横断する畦畔を検出した。畦畔と畦畔の間隔は、約 11.0 ～ 12.0 mが多いが、71 畦畔と 72 畦畔は間に３溝を挟み、約 18.0 m離れている。真の東西方向より、わずかに北西にふる畦畔が多い。幅は 0.5 m程度、高さは頂部を削平されているため、0.05 m程度である。断面は台形だが、高さが低いため緩やかな盛り上がりをみせる。

１区の東に隣接する、（その５）調査区の第３ａ面でも東西畦畔を複数検出しており、位置的にも合致するので、連続した畦畔と言える。（その５）調査区の東、（その６）調査区も含めると、約 80 mは東西長地型の地割が続いていた事が分る。

66・70・72 畦畔　66 畦畔は 65 畦畔の北、67 畦畔の南東部に位置する。70 畦畔は 71 畦畔の北西に位置する。72 畦畔は２溝の南に位置する東西畦畔である。上記の畦畔に比べると、短くて畦畔と畦畔の距離も不均等である。

72 畦畔と 70 畦畔はほぼ東西の真方位にのびるが、66 畦畔は西端が北にふる。各畦畔とも長さは約 2.5 ～ 3.0 m、幅は 0.5 m程度で、高さも 0.05 m程度である。

70 畦畔と 71 畔のように東西畦畔が並列するのは、北側と南側の畦畔で小時期差があるのかも知れ

Y=−34,250
Y=−34,240
Y=−34,230
Y=−34,240
Y=−34,230
1区
3区
2区
73畦畔
1溝
2溝
72畦畔
3溝
4ピット
71畦畔
70畦畔
69畦畔
68畦畔
67−1
67畦畔
67−2
66畦畔
65畦畔
X=−155,380
X=−155,390
X=−155,400
X=−155,410
X=−155,420
X=−155,430
X=−155,440
X=−155,450
X=−155,300
X=−155,310
X=−155,320
X=−155,330
X=−155,340
X=−155,350
X=−155,360
X=−155,370
0
(1:400)
10m

図9　第3ａ面平面図

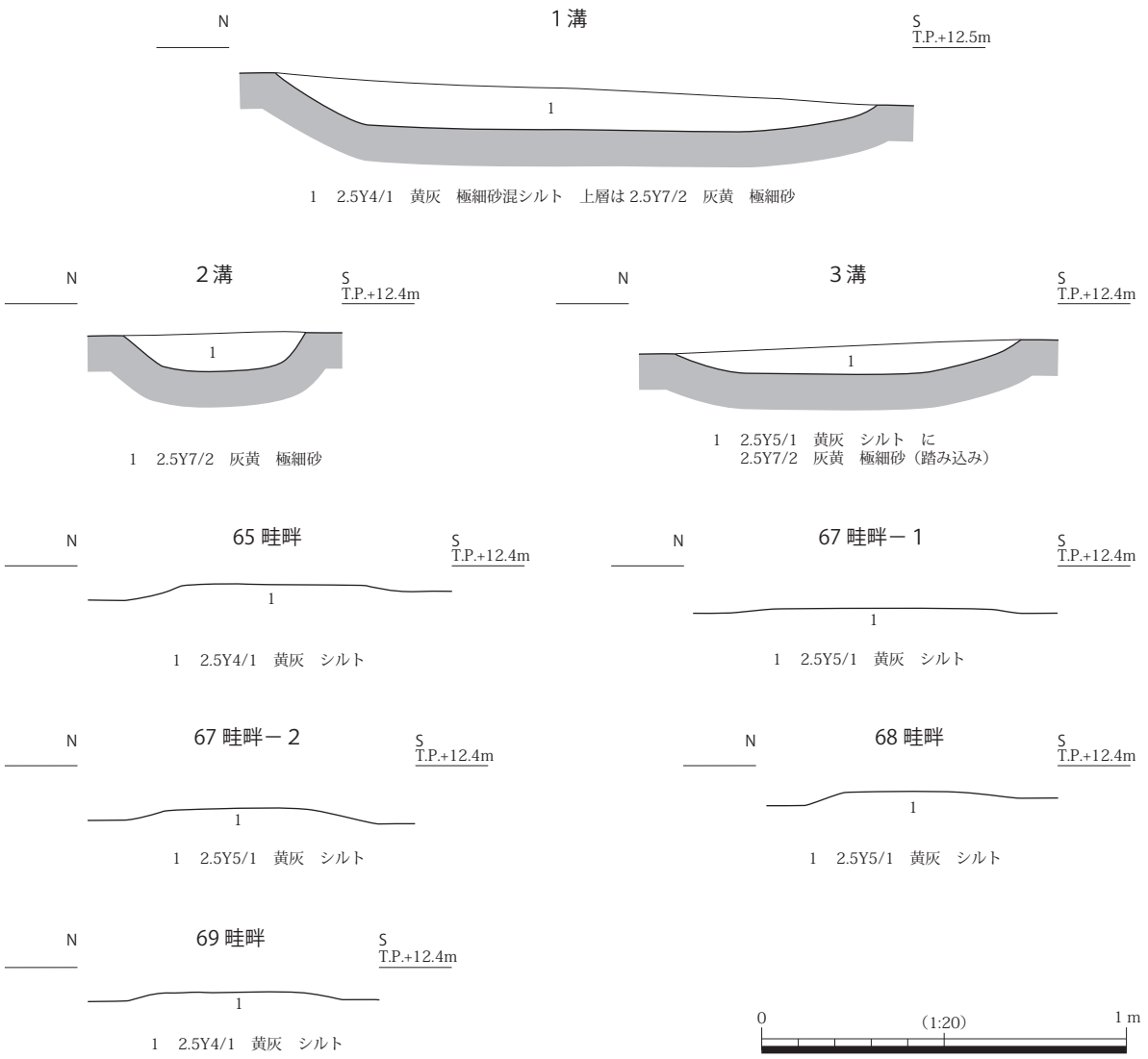


図 10　第３ａ面遺構断面図

ないが、畦畔中から遺物も出土していないため不明である。

１・２・３溝（図 10）　１溝は 73 畦畔の南、X ＝－ 155,380 付近で検出した。東西方向から途中で西へと弧を描いて曲がる不整形の溝であるが、自然のたわみ、落ち込みとした方がいいかもしれない。

最大幅 2.0 m、最小幅 0.5 m、深さ 0.13 mをはかる。第２－４ｂ層の黄灰色シルトから灰黄色極細砂が埋積する。

２溝は 72 畦畔の北、X ＝－ 155,390 付近で検出した、東西に直線的にのびる溝である。幅 0.5 m、深さ 0.1 mをはかる。第２－４ｂ層の灰黄色極細砂が埋積する。

３溝は X ＝－ 155,400 付近で検出した、東西に直線的にのびる溝である。幅 1.0 m、深さ 0.1 mをはかる。第２－４ｂ層の灰黄色極細砂が埋積する。

１溝から３溝は約 10.0 m間隔で位置するが、２溝と３溝は直線的だが１溝は曲線的で、互いの相関性は不明である。ただし、73 畦畔と２溝、２溝と３溝は約 11.0 m間隔であり、３溝以南の畦畔の間隔とも一致する事から、２溝・３溝は畦畔と関係をもつ遺構と言える。

４ピット　３溝と 71 畦畔の間で検出した。直径 0.4 mの円形のピットである。

第３ａ面は第２－４ｂ層、第３ａ層から瓦質土器や陶器が出土しており、15 世紀後半以降の遺構面

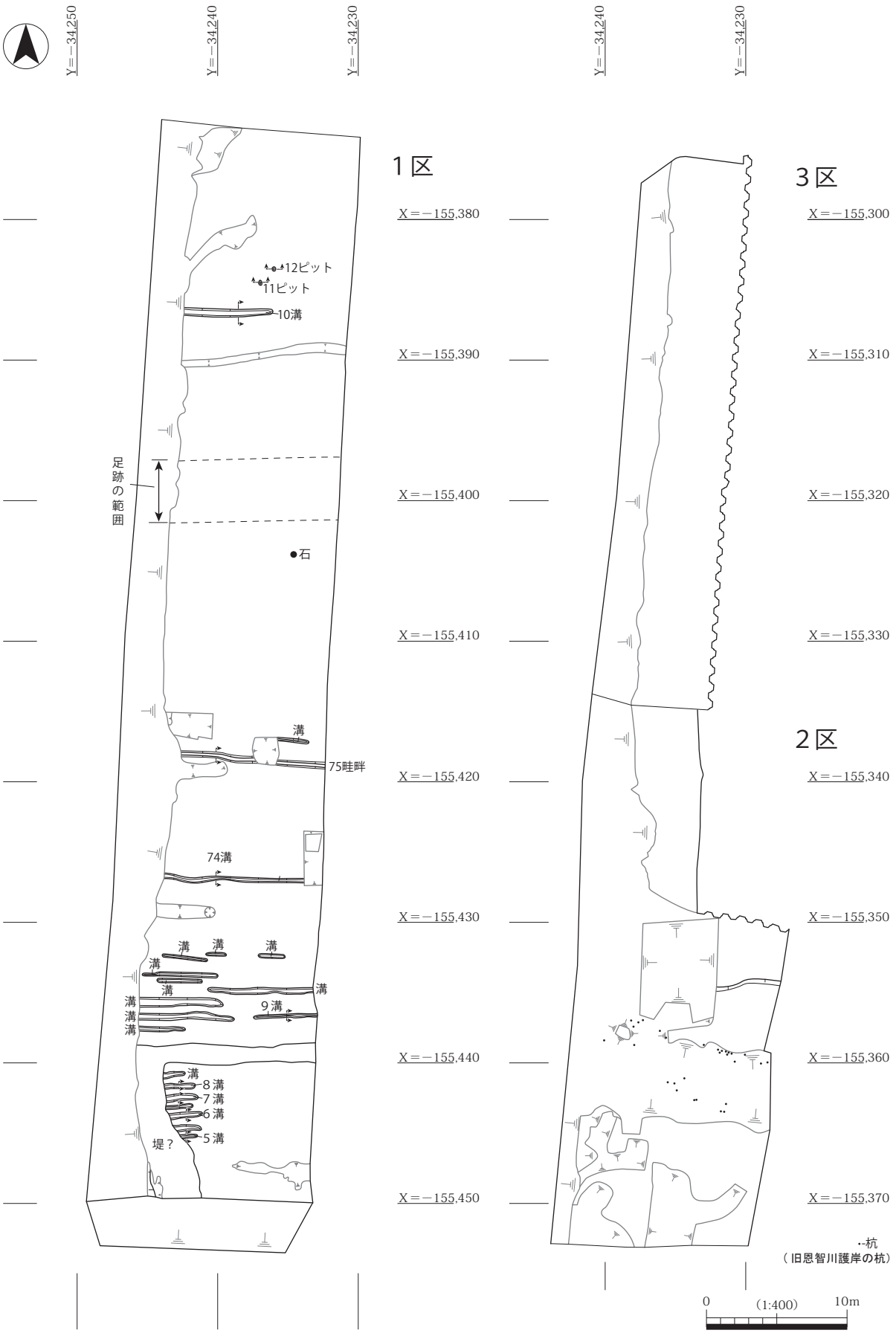

Y=−34,250
Y=−34,240
Y=−34,230
Y=−34,240
Y=−34,230
1区
3区
2区
X=−155,380
X=−155,390
X=−155,400
X=−155,410
X=−155,420
X=−155,430
X=−155,440
X=−155,450
X=−155,300
X=−155,310
X=−155,320
X=−155,330
X=−155,340
X=−155,350
X=−155,360
X=−155,370
12ピット
11ピット
10溝
足跡の範囲
●石
溝
75畦畔
74溝
溝
溝
溝
溝
溝
溝
溝
溝
9溝
溝
8溝
7溝
6溝
5溝
堤？
杭
（旧恩智川護岸の杭）
0
(1:400)
10m

図11　第４ａ面平面図

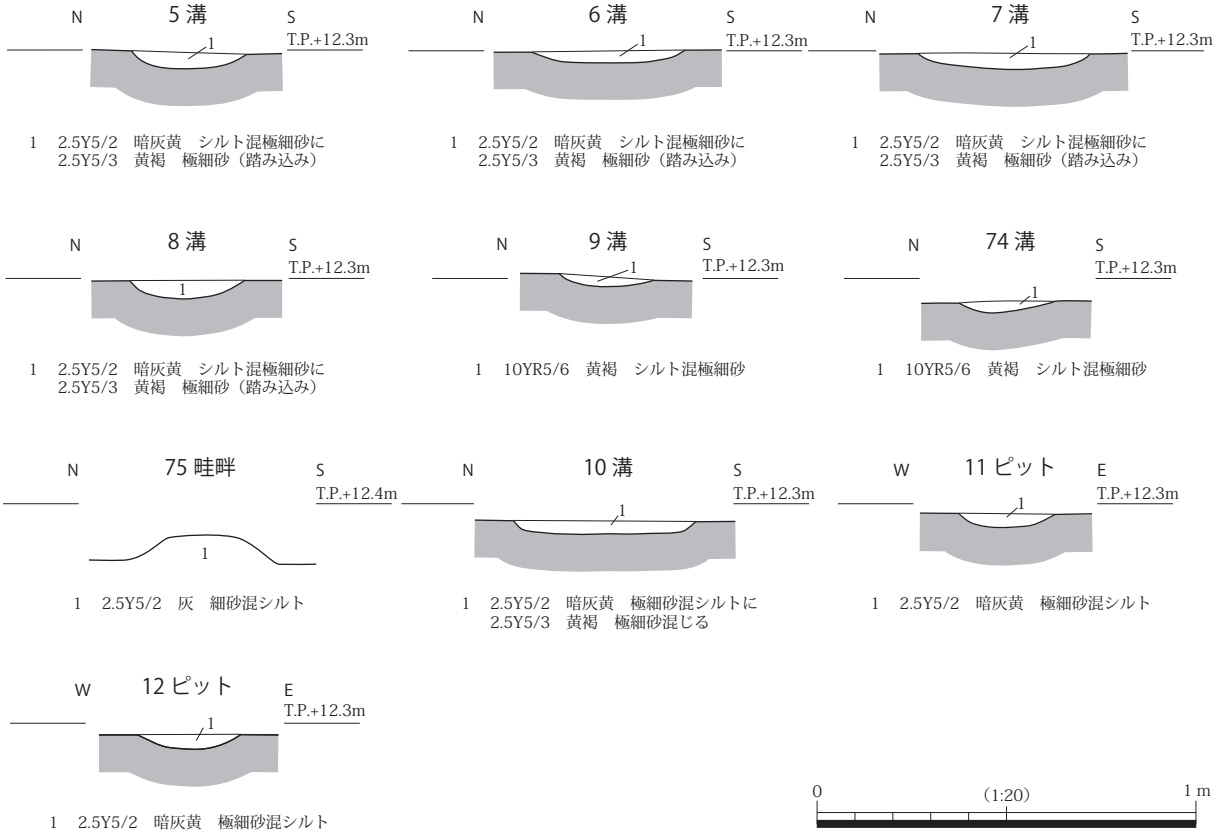


図 12　第４ａ面遺構断面図

と考えられる。

（２）第４ａ面の遺構（図 11・12、写真図版２）

１区では第４ａ層を第４－１ａ層と第４－２ａ層に分層し、各々の上面で調査を行ったが、他の調査区では分層不可能だった。１区の第４－１ａ面上面が２・３区の第４ａ面に相当するとし、第４ａ面として報告する。第４ａ面は灰色や暗灰色の極細砂混じりシルトをベースとし、遺構面の高さは１区で T.P. ＋ 12.2 ～ 12.3 m、２区で T.P. ＋ 12.0 ～ 12.1 mである。ほぼ平坦だが、南から北に低くなる傾向にある。

２区は１区同様、現代の恩智川や水門調節室などの近現代の構築物による攪乱が著しいが、X ＝－ 155,360 以北、Y ＝－ 34,235 より東（北東部）と、X ＝－ 155,365 以南、Y ＝－ 34,238 より西（南西部）では遺構面が残存している。X ＝－ 155,355 ～－ 155,365 の間で段状の落ちを確認した。２区の中央、X ＝－ 155,360 ～－ 155,366 付近に約 5.0 m幅で東西方向の溝状の攪乱があるが、これは旧恩智川である。掘削を進めると旧恩智川の北肩と南肩に、２列に並ぶ木杭が露頭した。時期は決定できないが、これらの木杭は旧恩智川の護岸施設であったと考えられる。

３区は全域が削平されていた。第３ａ面同様、遺構の検出は１区のみにとどまった。

１区では東西方向の畦畔と溝、畝溝、ピットを検出した。調査区南端から X ＝－ 155,440 までは南北にのびて５～８溝を切り、X ＝－ 155,440 で屈曲して東西にのびる幅 1.5 ～ 3.0 mの土色や土質が異なる範囲を検出した。溝より上面の堤か大畦畔とも思われるが、高さを失っており遺構と断定できなかった。

74 溝・75 畦畔（図 12）　75 畦畔は１区の中央、X ＝－ 155,418 付近で検出した東西方向の畦畔で

ある。調査区を横断し、東端は（その５）調査区に続く。畦畔の頂部は上層の耕作により削平されているが、頂部幅 0.2 m、底部幅 0.4 m、高さ 0.1 mの断面台形である。第４－１ａ層を盛り上げて成形する。

74 溝は 75 畦畔より約 9.0 m南、X ＝－ 155,427 付近で検出した東西方向の溝である。幅 0.25 m、深さ 0.05 mをはかる。

５～９溝（図 12、写真図版２） 74 溝より南の区域では、等間隔に並ぶ 20 本弱の溝を検出した。いずれも幅 0.25 ～ 0.4 m、深さ 0.05 mの溝で、暗灰黄色シルト混じり極細砂や黄褐色極細砂が埋積する。溝と溝の間隔は 0.5 mで、形状や規則的に並ぶ事から畠の畝溝と推測する。

10 溝（図 12） １区の北側、X ＝－ 155,386 付近で検出した東西方向の溝である。１区南半で検出した畝溝群とも似るが、10 溝のみ単独で検出した。幅 0.45 m、深さ 0.05 mをはかる。

11・12 ピット（図 12） 10 溝の北東部で検出した。直径 0.2 ～ 0.25 m、深さ 0.05 mの小穴である。

また、遺構ではないが X ＝－ 155,397 ～－ 155,401 の範囲に、人や牛の足跡が集中してみられた。この範囲が他より低いため湿地状になりやすく、踏み込んだ跡が強く残ったものと思われる。この範囲より南東では、人頭大の自然石１点を検出した。用途は不明だが、何かの目印として他の場所から持ち込まれた可能性がある。１区の南半でのみ畝溝が検出されたのは、水田と併用して畠が作られた事を示すか、この区域が第４ａ層の堆積が厚く、削平を受けても残ったためと考えられる。

第４ａ面は第４ａ層に瓦器や瓦質土器が包含されており、15 世紀後半の遺構面と考えられる。

（３）第４－２ｂ面の遺構（図 13・14、写真図版２）

第４―２ｂ層は、第４ａ層と第５ａ層を識別するｂ層として１区から３区まで遍く存在したが、１区の南半や３区では厚さ 0.2 mと堆積が厚く、１区北半から２区にかけては厚さ 0.1 m弱であった。１区でのみ上面を精査して、遺構検出を行い、東西方向の溝を多数検出した。第４－１ａ面か第４－２ａ面から切り込まれた遺構である。規則的に並ぶ事から、耕作に伴う畝溝と考える。

第４―２ｂ面は黄褐色細砂と灰オリーブ色シルトが混じりあった砂層（ｂ層）で構成され、遺構面の高さは T.P. ＋ 11.9 ～ 12.1 mである。ほぼ平坦だが、南から北に低くなる傾向にある。

13 ～ 16 溝（図 14） 調査区南側、X ＝－ 155,440 以南で検出した。13 ～ 15 溝は調査区東端から中央にかけてのびる長さ 10.0 ～ 15.0 m程度の溝である。第３ａ層と第４－２ｂ層の土が埋積する。

13 溝と 14 溝は隣接する東西溝で、その距離は約 0.5 mである。13 溝は幅 0.25 m、深さ 0.1 m、14 溝は幅 0.3 m、深さ 0.1 mをはかる。

15 溝は平面形では１つの溝として検出したが、断面でみると 13 溝・14 溝と同規模の３つの溝が、北から南へと切り合っている事が分る。幅 0.4 ～ 0.5 m、深さ約 0.1 mをはかる。16 溝は 13 ～ 15 溝とは異なり、調査区西端から中央にかけてのびる長さ 5.0 mの溝である。幅 0.4 m、深さ 0.1 mをはかる。これらの溝は東西端からのびて中央で途切れたようにみえるが、17 溝より北は東西に横断する溝であり、本来は同様に１本の長い溝だった可能性もある。

17 溝（図 14） X ＝－ 155,440 付近で検出した、調査区を横断する東西溝である。

平面では幅約 0.9 mの太い溝にみえるが、断面を観察すると 13 溝や 14 溝と同規模の、幅 0.4 m、深さ 0.1 m程度の２つの溝が切り合ったものを、１つの溝として検出したと考えられる。

18 溝より北では、調査区東端から西端まで通して横断する溝が多くなるが、X ＝－ 155,430 辺りまでは溝と溝の間隔が 0.5 mと密で、それより北では 1.0 ～ 3.0 mと疎らになる。西にいくと真方位よりわずかに南にふる。

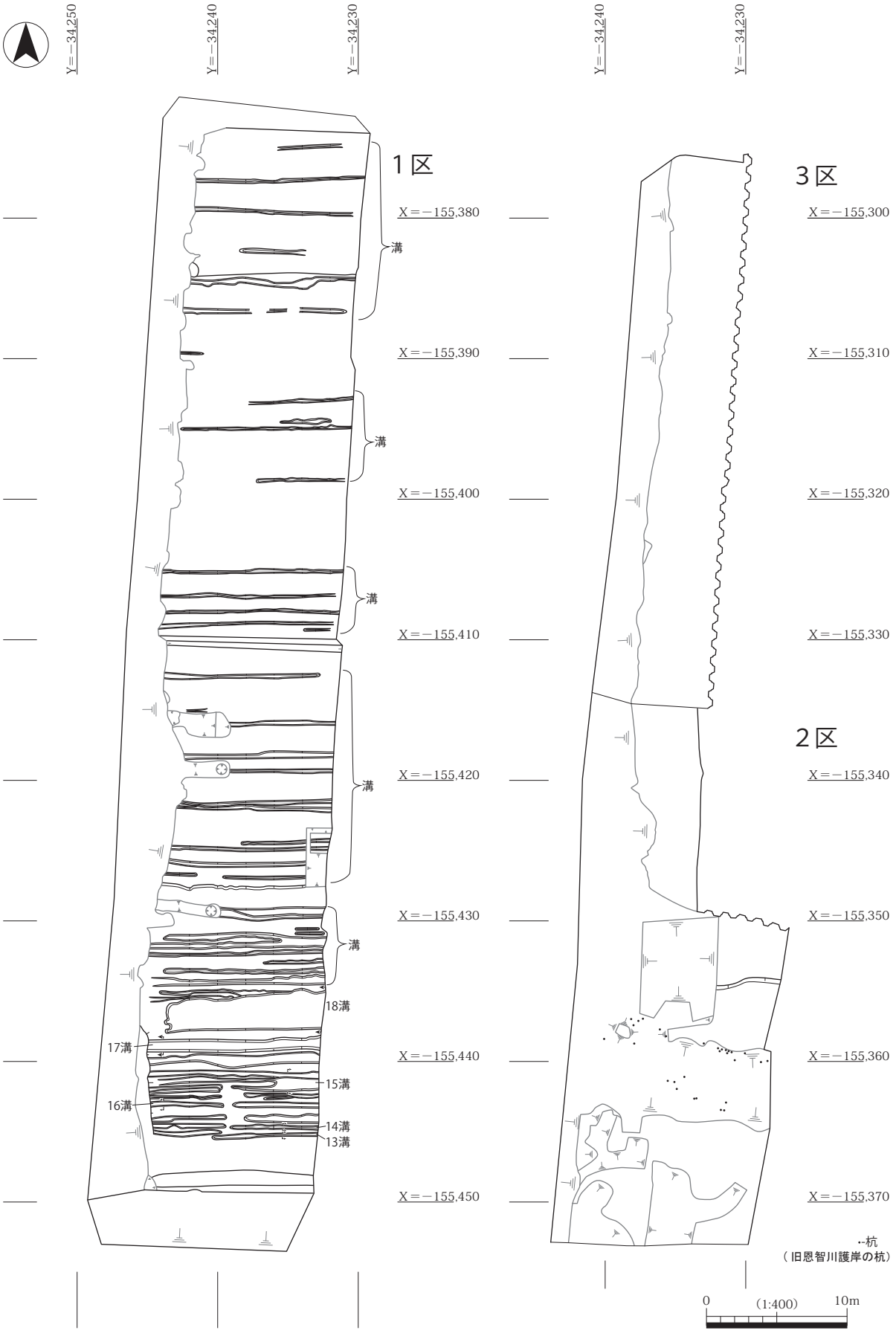


図13　第４－２ｂ面平面図

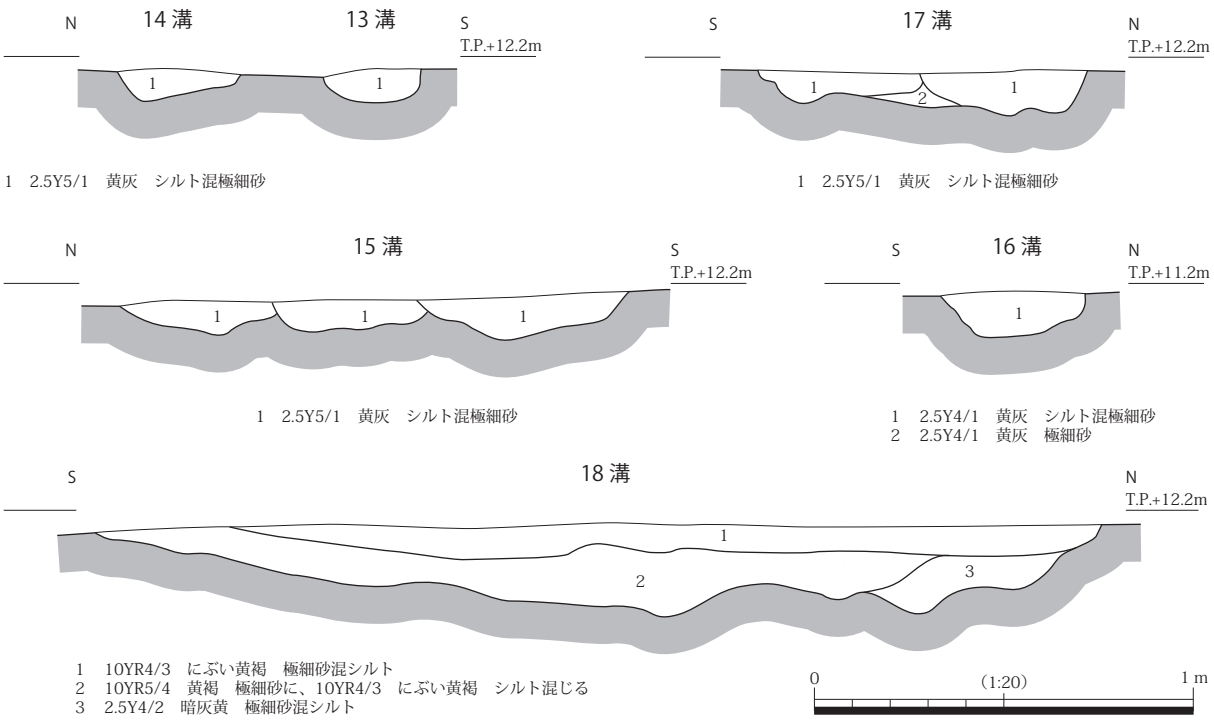


図 14　第４－２ｂ面遺構断面図

18 溝(図 14)　X＝－ 155,435 ～－ 155,438 で検出した、幅の広い溝である。最大幅 2.7 m、深さ 0.25 mをはかる。西端は途切れる。18 溝は、その規模から畝溝とは考えにくく、低地部に集水して溝となった落ち込み状の遺構と捉える。

（その５）調査区でも、第５ａ面で第４―２ｂ面の溝を検出している。X＝－ 155,415 より南の、Y＝－ 34,200 辺りから西にのびる東西溝である。（その７）調査区で検出した溝は、この溝の延長と考えられるが、検出範囲はより北まで及んでいる。

第４―２ｂ面は、第４ａ層、第５ａ層から 15 世紀以降の遺物が出土している事から、15 世紀後半の遺構面と考えられる。

（４）遺物（図 15・16、写真図版 15）

１～３は１区の第４ａ層中から出土した。

１・２は瓦質土器摺鉢の口縁部である。１・２とも小片で、外面は縦横ともヘラ状工具で削られている。２の内面は右上がりのハケメがみられる。いずれも断面三角形を呈する。

３は肩に把手がついた須恵器の破片である。手ごねで作った把手を体部になでつけている。自然釉が上から下へと流れる方向から、体部に対して縦方向に貼り付けていると判断した。提瓶、もしくは耳壺の肩に貼り付けた耳の一つであろうか。

４は１区の人力掘削開始面の堤部上溝から出土した。体部外面に梅と思われる５弁の花と枝文を、高台に三重圏線を描く、染付磁器碗である。口縁端部は細く尖り、底部は厚く、高台は直立する。内面見込みは蛇の目釉剥ぎで、畳付から高台にかけて重ね焼きで使用した砂が付着する。

５は口径が相当大きい陶器火鉢体部で、口縁部に近い部分と思われる。外面に突帯を貼り付け、それを菱形につまみ成形する。胎土も精良で、きわめて硬質で堺の湊焼であろう。４・５とも機械掘削終了直後の遺構面攪乱などから出土しており、近世の所産で、第２－４ｂ層からの混入と考える。

６は蓮華文軒丸瓦の瓦当部分である。胴部は剥離し、瓦当部も外縁は失われ、全体の４分の１程度の

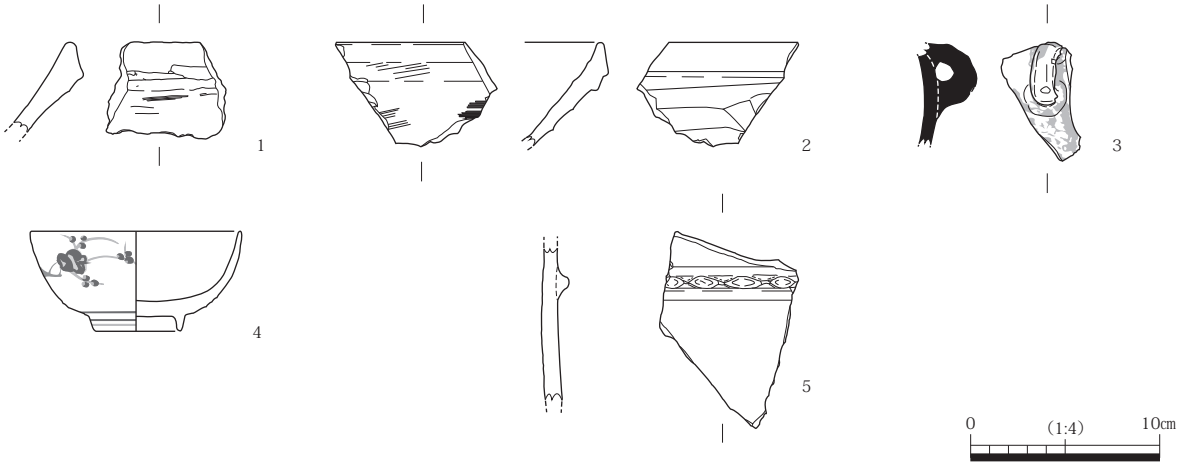


図 15　第３ａ層・第４－１ａ層・第４－２ａ層他出土土器実測図

残存状態である。蓮子径 0.7㎝、複弁長 3.0㎝程度で、複弁と複弁の間はＴ字状の棒芯線が入る。復元直径約 18.0㎝、中房径約 8.0㎝の、おそらく八葉の複弁蓮華文軒丸瓦と考えられる。川原寺式と呼ばれる飛鳥時代末の古代瓦である。

６が出土したのは１区の第４ａ層であり、古代の遺構面ではなく中世後期の遺構面である。また、当遺跡は古代から連綿と耕作地であるため、当地に寺院等が建立されていた可能性は低い。近辺から川の流れ等によって運ばれてきたものが巻き上がり、上層に混入したと考えられる。

古代において、当調査地より南東約 1.0 ～ 2.0㎞の範囲にわたって、東高野街道沿いに河内六寺と呼ばれる寺院が点在していた（第２章図３－２参照）。これらの寺院からは瓦が多数出土しており、６は智識寺跡出土の軒丸瓦と類似する。（その２）調査区でも重弁蓮華文軒丸瓦が１点出土しており、それは鳥坂寺跡出土の軒丸瓦と類似する。軒丸瓦は古代寺院との関係を示す貴重な資料と言える（詳細は第４章第２節参照）。

７・８は機械掘削時や表採で出土した銅銭である。７は寛永通寶で、直径 2.5㎝、厚さ 0.1㎝、中心に１辺 0.8㎝の方形孔を穿つ。字体から 18 世紀に鋳造された新寛永一文銭と考える。

８は直径 2.5㎝、厚さ 0.1㎝、中心に１辺 0.7㎝の方形孔を穿つ。表裏とも錆が付着し、かなり腐食しているため判然としないが、地が永、右が通、左が寶と読み取れる事から、寛永通寶でないかと推測する。

９・10 は１区の第４ａ層中から出土した金属製品である。

９は笄（こうがい）だが、装着するための小孔がない事から、刀装具でなく結髪道具と考えられる。

完形で、全体の長さ 18.9㎝、駒の最大幅 1.4㎝、厚さ 0.18㎝で、穂先の幅 0.6㎝、厚さ 0.1㎝である。材質は赤銅であろうか、やや金色を帯びる。竿部分は土圧を受けたためか、下半の竿はくねくねと湾曲して反る。上端に耳掻と顎、肩を作り出し、上端より約 8.5㎝下がると竿となって穂先に向け先が細くなる。駒の上枠は蕨手と眉形をなし、下枠は木瓜形で取り囲む。駒内の地板は圏点状の鏨（たがね）を打って、粟粒のような文様を表現した魚子（ななこ）地であるが、その中心に幅 0.1 ～ 0.15㎝の圏線を巡らせた長さ約 5.0㎝、幅 0.5㎝の無文の長円形をもつ。近世期の所産であろう。

10 は薄板状の製品で、上に鈎状の突起をもつが先端は欠損する。下半も欠損し、残存長は 8.7㎝、幅は 1.75㎝、厚みは 0.3㎝である。鉄製であるが、表面に錆が付着し隆起するため、本来の厚さより厚くなっている。用途は不明である。

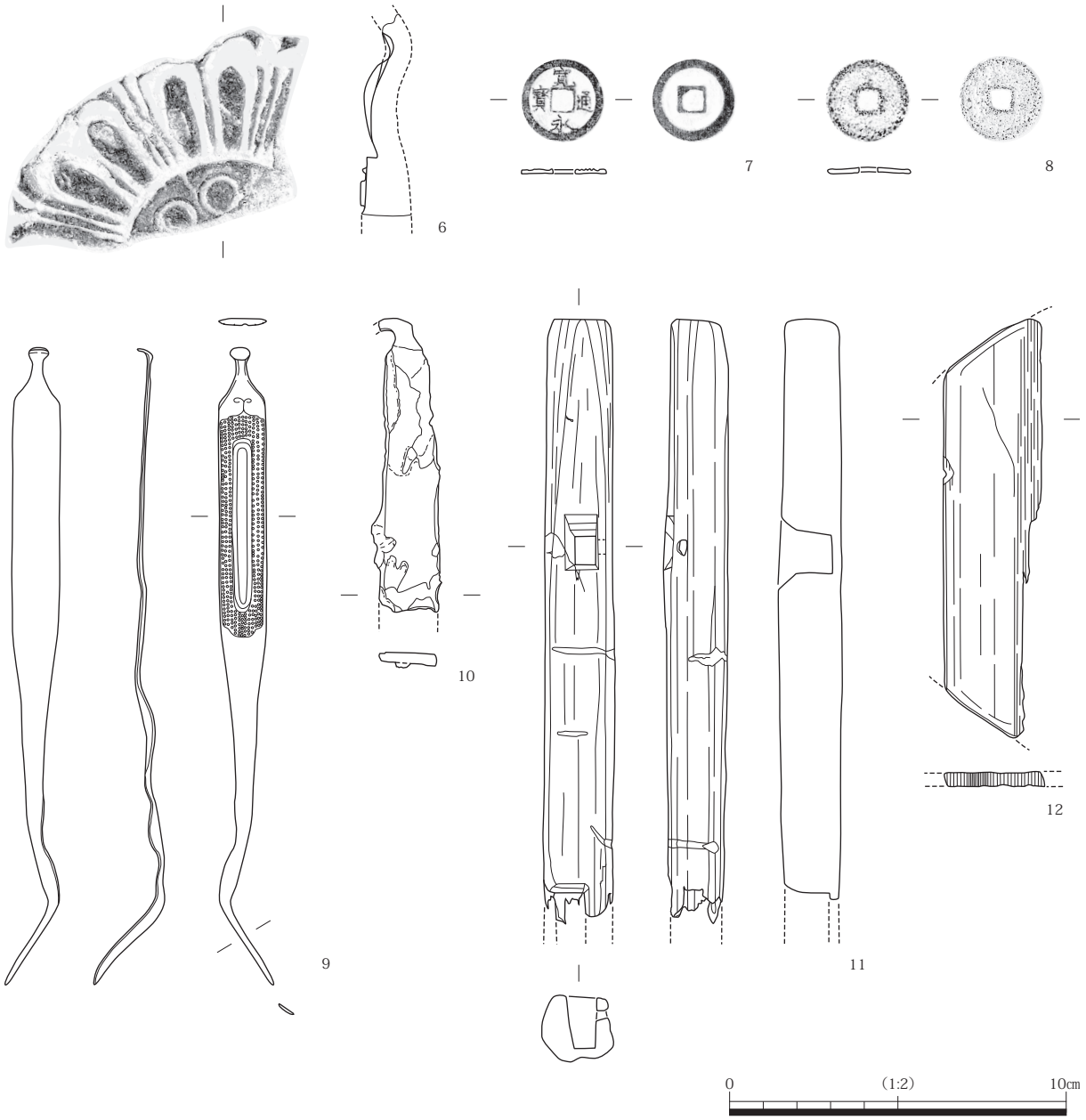


図 16　第３ａ層・第４－１ａ層・第４－２ａ層出土瓦・銭貨・金属製品・木製品実測図

11・12 は 1 区の第４ａ層中から出土した木製品である。

11 は残存長 17.8㎝、1 辺約 2.0㎝の角材状製品だが、上端は面取りを施し四隅は丸められている。下半は欠損しており、２箇所に長辺 1.6㎝、短辺 1.0㎝、深さ 1.5㎝の長方形の穴をもつ。穴は貫通しておらず、枘穴になっていて、断面逆台形に刳りこまれる。側面にも木釘の装着によると推定される圧痕、擦痕が認められる事から、他の部材をこの角材の穴に差し込んで固定し、さらに木釘を打って補強したと推定される。建築部材の一部であろうか。

12 は曲物底板の一部分である。左右とも失われているが、直径 15.0㎝程度の底板であったと推測される。針葉樹の柾目材である。

第４ａ層からの出土遺物がほとんどであるが、攪乱に埋積した第２－４ｂ層中の遺物など、近世の遺物も一定量含まれる。図化し得なかった遺物も含め、第３ａ層、第４ａ層出土遺物ははおおむね中世後期、15 世紀代を示す。

Y=−34,250
Y=−34,240
Y=−34,230
Y=−34,240
Y=−34,230
1区
3区
2区
X=−155,380
X=−155,390
X=−155,400
X=−155,410
X=−155,420
X=−155,430
X=−155,440
X=−155,450
X=−155,300
X=−155,310
X=−155,320
X=−155,330
X=−155,340
X=−155,350
X=−155,360
X=−155,370
79畦畔
78畦畔
77畦畔
76畦畔
20土坑
19溝
82畦畔
85溝
87溝
88溝
84畦畔
86溝
83畦畔
82畦畔
81畦畔
80畦畔
杭
(旧恩智川護岸の杭)
0
(1:400)
10m

図 17　第 5 a 面平面図

第３節　第５ａ面の遺構と遺物

（１）遺構（図 17・18、写真図版３・４）

３区では第５ａ面に至って、ようやく攪乱が消失し遺構の検出をみた。盛土を除去して検出した１面目の遺構面なので、他の区と同じく第３ａ面と捉えていたが、検出高や層序を検討した結果、第５ａ層上面、すなわち第５ａ面と決定した。２区もＸ＝－ 155,360 以北と以南で、検出した遺構面にずれがある事が判明した。Ｘ＝－ 155,360 付近に坪境が存在しており、これを境に堆積状況が大きく変わる。（その１）・（その５）・（その６）調査区の南北基本層序をもとに検証し、（その１）調査での第３ａ面が坪境以南の第５ａ面に相当すると結論づけ、整合させた（第３章第１節の図７・８、表２参照）。

各区とも厚さの差異はあるが、第４－２ｂ層の洪水堆積砂層に覆われていた事もあり、遺構の残存状況が良かった。１区、２区、３区のすべてで畦畔や溝を検出した。水田面からは一面に人や牛馬の足跡が検出できた。

２区北側では南北の畦畔と、その東で南北畦畔にとりつきＬ字状となる東西の畦畔を、南側では南北の畦畔を検出した。３区では南北の畦畔と、それに交差して十字状となる東西の畦畔と、畦畔と畦畔の間に南北方向の畝溝を検出した。

第５ａ面は灰色細砂混じりシルトをベースとし、遺構面の高さは１区で T.P. ＋ 11.9 ～ 12.0 m、２区で T.P. ＋ 12.0 m、３区で T.P. ＋ 11.9 ～ 12.0 mとほぼ平坦である。

76 ～ 79 畦畔（図 18）　１区ではＸ＝－ 155,420 より北で、東西方向の畦畔を４本検出した。いずれも調査区東端から西端までを横断し、畦畔と畦畔の間隔は 10.0 ～ 11.0 mとかなり等間隔に近い。真方位よりやや南西にふる。

畦畔頂部は削平されているが、頂部幅は約 0.2 m、底部幅は約 0.5 m、高さは 0.05 m程度である。隣接する（その５）調査区でも、同じ位置に東西畦畔を検出しており、連続した畦畔と捉える。

19 溝（図 18）　１区南端で検出した東西方向の溝である。最大幅 4.0 m、深さ 0.1 mをはかる。第４－２ｂ層が埋積する。東端から 1.5 m西にいくと二股に分かれ、一方は約 2.0 m幅でほぼ真方位に西にのびるが、一方は約幅 1.0 m幅で南へのび、中央で調査区外へと抜けていく。

20 土坑（図 18）　１区の南半、Ｘ＝－ 155,435 ～－ 155,438 で検出した土坑である。第４－２ｂ面の 18 溝とほぼ同位置である事から、18 溝の底面痕跡とも考えられる。幅 2.1 m、深さ 0.15 mをはかる。第４－２ｂ層の埋土が埋積する。

80 畦畔　２区の南半で検出した南北方向の畦畔である。真方位よりやや西にふる。幅約 0.5 m、長さ 2.5 mをはかる。南北両端とも攪乱によって消失しているが、攪乱より北で検出した 82 畦畔が、80 畦畔の延長の可能性がある。

82 畦畔（図 18）２区の北半及び３区で検出した南北方向の畦畔である。真方位よりやや北西－南東にふる。検出長 50.0 mで北は調査区外にさらにのびていく。頂部幅約 0.3 m、底部幅約 0.5 m、高さ 0.05 ～ 0.1 mをはかる。２区で 81 畦畔、３区で 83 畦畔と 84 畦畔の３つの東西畦畔がとりつく。

また、３区の 82 畦畔と 83 畦畔に囲まれた北東区画には南北方向の 85 ～ 88 溝が存在し、畝溝と考えられる。隣接する（その１）調査区でも南北に長い畦畔の間に畝溝が確認されている。

81・83・84 畦畔（図 18）　２区と３区で検出した、82 畦畔にとりつく東西畦畔である。81 畦畔は２区で、それ以外は３区で検出した。

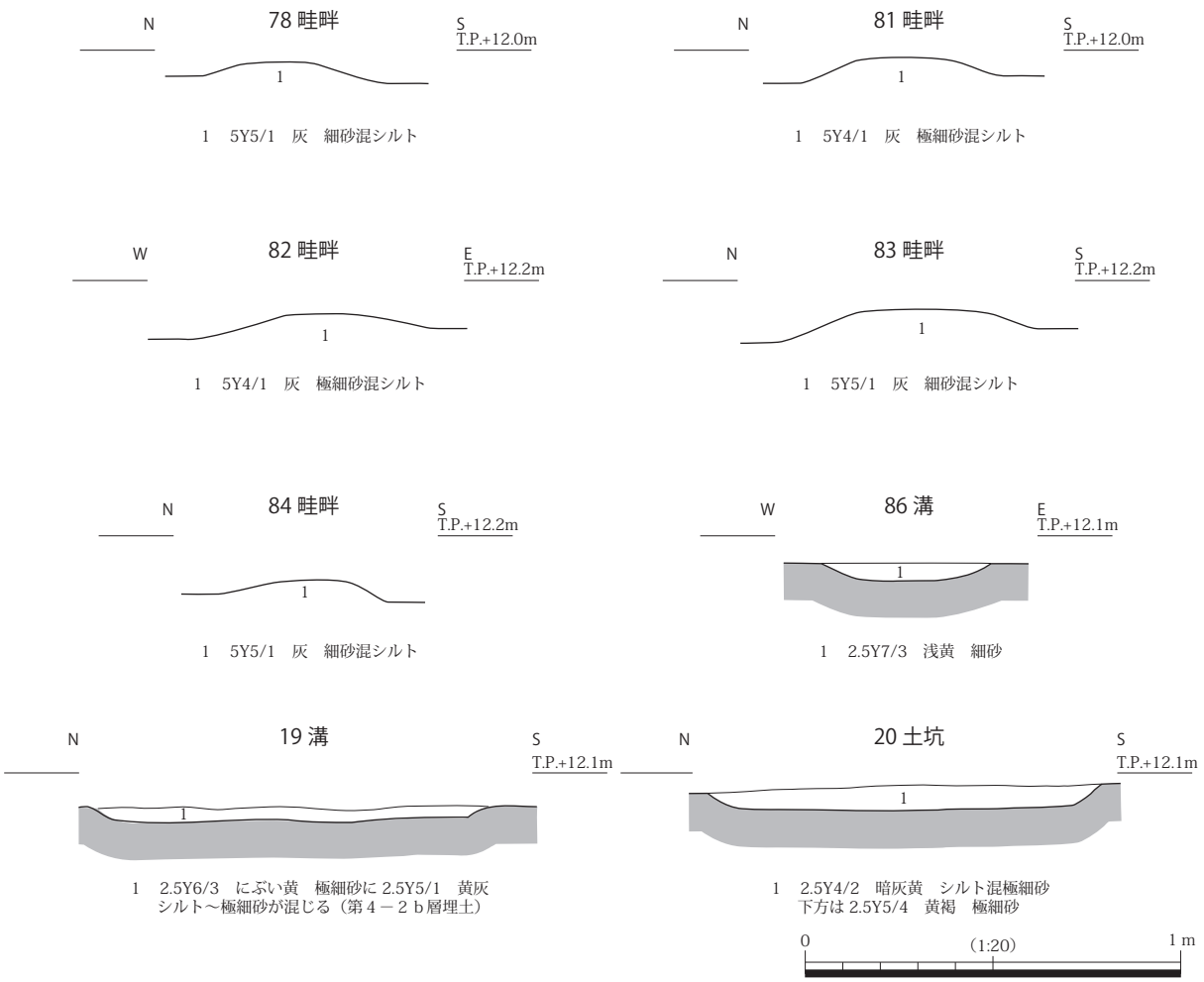


図 18　第５ａ面遺構断面図

83 畦畔はその中央で 82 畦畔と交差して十字状をなすが、81 畦畔は 82 畦畔の東側に、84 畦畔は 82 畦畔の西側に位置し、Ｌ字状もしくは逆Ｌ字状をなす。いずれの畦畔も頂部幅 0.3 ～ 0.4 m、底部幅 0.5 m、高さ 0.05 ～ 0.1 mをはかる。81 畦畔と 83 畦畔の間隔は約 16.0 m、83 畦畔と 84 畦畔の間隔は約 17.0 mとほぼ等間隔だが、１区の東西畦畔の間隔とは異なる。

85 ～ 88 溝（図 18）　83 畦畔と 82 畦畔に囲まれた区画で、82 畦畔に沿って東側で、畝溝が４本確認される。いずれも幅 0.4 m、深さ 0.05 mで浅黄色細砂が埋積する。約 1.0 m間隔で南北に並び、86 溝のみ３区内で南北端とも検出されており、その長さは約 20.0 mだが、他の溝では北端は検出されず、調査区外にさらにのびていく。

第５ａ面で特筆すべきは、１区は東西方向の地割で水田であるのに対し、２区より北では南北方向の地割で、畝溝の存在から畠への転作が示唆される事である。これは他の調査区でも、坪境以北、以南で広域で確認される（図 49）。１区と２区の境に東西型地割から南北型地割への変換点があると言える。

２区や３区に隣接する（その１）調査区では、南北方向の長地型地割の畦畔やその中に多数の南北畝溝、溝を第３ａ面から第 10 － 1 ａ面に至るまで検出している。今回調査した２区や３区でも、同様に南北方向の長地型地割であった事が判明した。１区は東西長地型の地割であるので、１区から２区の途中で地割方向が東西から南北に変化すると推測されるが、１区と２区の境界付近が大きく攪乱されているため変化箇所は不明である。

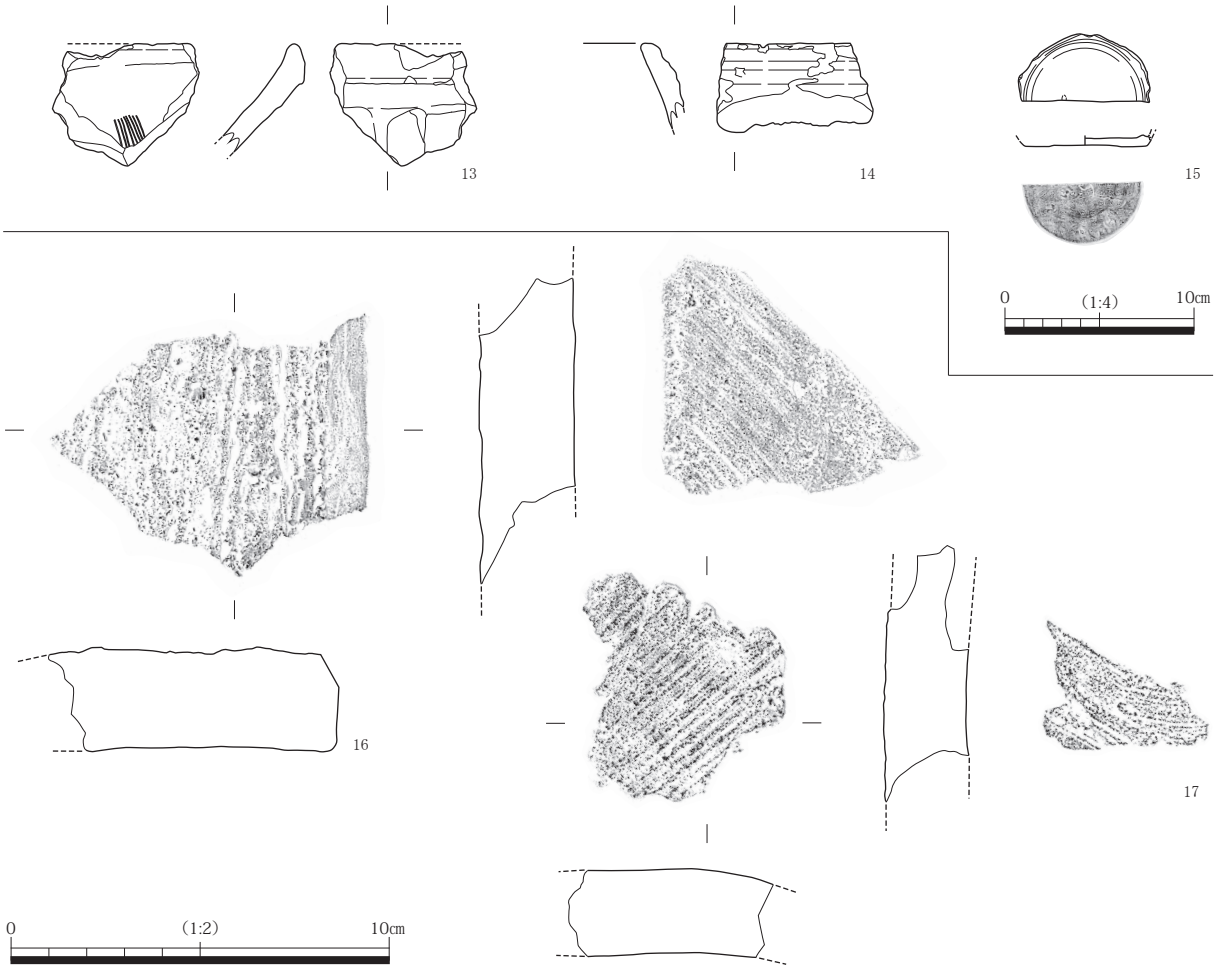


図 19　第５ａ層・第５ｂ層出土遺物実測図

第５ａ層の包含遺物から、第５ａ面は中世後半、15 世紀前半の遺構面と考えられる。

（２）遺物（図 19、写真図版 15）

13 は１区で出土した瓦質土器擂鉢である。口縁端部はやや丸みをもち、肥厚気味となる。内面は８本１組の摺目が残るが、全体に使用によると思われる摩耗を受け、器面が荒れている。外面体部は縦のヘラケズリ後にハケ状のもので縦横にナデた痕跡が残る。

14 は１区で出土した瓦質土器羽釜である。口縁部のみの小片で、３つの段をもち、口縁部は内傾する。川の流れなどによってローリングを受けたのか、摩耗し欠損が多くみられる。

15 は３区で出土した白磁皿である。底部のみの出土で、口縁部から体部は欠損する。内外面とも施釉され、内面見込みには沈線が入る。底部は回転糸切りの平底で、底部と体部の境界辺まで施釉されている。口縁部口禿の皿と思われる。

16・17 は平瓦である。16 は２区、17 は１区から出土した。

16 の右側面は凸面から斜めに面取りされた状態だが、もう１側面と天地は欠損する。厚みは 2.8㎝である。凸面には砂目と格子状のタタキ痕が、凹面には弧状の糸切り痕が残る。中世後期、室町時代のものであろうか。17 も小片で天地左右とも欠損する。厚みは 2.5㎝である。凸面には斜め方向の縄タタキの痕跡が、凹面には弧状の糸切り痕が残る。中世後期、室町時代のものであろうか。

第５ａ面出土遺物は少量だが、おおよそ中世後期、15 世紀前半代を示す。第３ａ面から第５ａ面までは小時期差ではあるが、徐々に古い時期を示す。

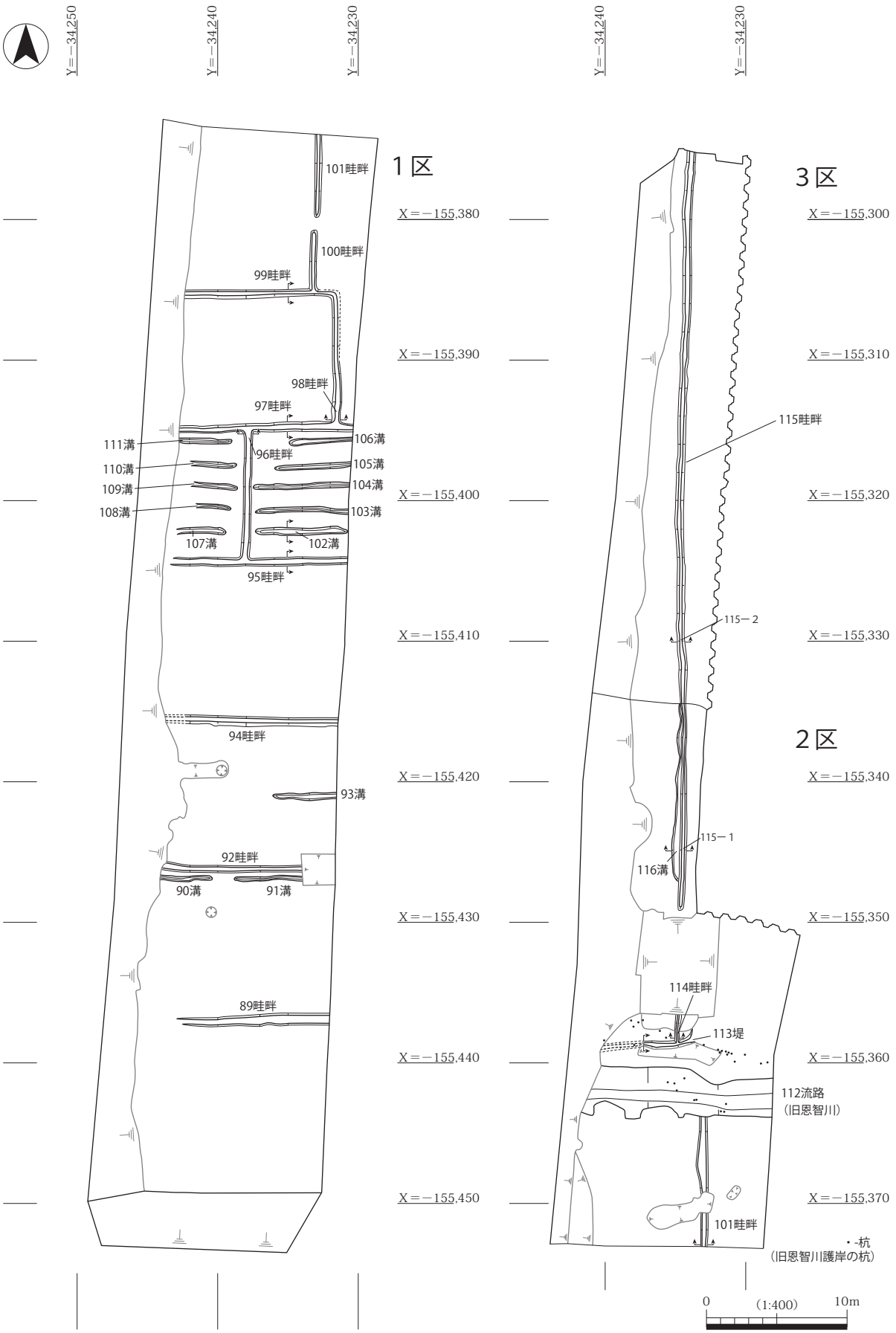

Y=−34,250
Y=−34,240
Y=−34,230
Y=−34,240
Y=−34,230
1区
2区
3区
X=−155,380
X=−155,390
X=−155,400
X=−155,410
X=−155,420
X=−155,430
X=−155,440
X=−155,450
X=−155,300
X=−155,310
X=−155,320
X=−155,330
X=−155,340
X=−155,350
X=−155,360
X=−155,370
101畦畔
100畦畔
99畦畔
98畦畔
97畦畔
96畦畔
95畦畔
94畦畔
93溝
92畦畔
90溝
91溝
89畦畔
111溝
110溝
109溝
108溝
107溝
106溝
105溝
104溝
103溝
102溝
115畦畔
115−2
115−1
116溝
114畦畔
113堤
112流路
(旧恩智川)
101畦畔
・-杭
(旧恩智川護岸の杭)
0
(1:400)
10m

図 20　第 6 a 面平面図

第４節　第６ａ面の遺構と遺物

（１）遺構（図 20・21、写真図版４～６）

第６ａ面は第５ｂ層の厚い洪水堆積層に覆われており、各区で畦畔や畝溝などを、水田面からは人や牛の足跡、耕作具痕を検出した。全遺構面で最も残存状況の良い遺構面と言える。

第６ａ面は灰色極細砂混じりシルトをベースとし、遺構面の高さは１区で T.P. ＋ 11.7 ～ 11.8 m、２区で T.P. ＋ 11.6 ～ 11.8 m、３区で T.P. ＋ 11.7 ～ 11.8 mと、２区の北半が最も低く、南北端にいくと高くなる地形をとる。また、１区北側の水田区画では、東から西へと段状に低くなる。

89・92・94 畦畔　１区の X ＝－ 155,415 より南で検出した東西方向の畦畔である。89 畦畔と 92 畦畔の間隔、92 畦畔と 94 畦畔の間隔はともに約 11.0 mで等間隔である。ほぼ真方位で、頂部幅 0.2 ～ 0.3 m、底部幅約 0.5 m、高さ 0.05 ～ 0.1 mをはかる。西にいくと削平されて不明瞭となる。

90・91・93 溝　１区の X ＝－ 155,415 より南で検出した東西方向の溝である。90 溝と 91 溝は 92 畦畔の南で 92 畦畔に沿うように、93 溝は 92 畦畔と 94 畦畔の間で検出した。いずれも長さ 4.0 ～ 5.0 m、幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.05 mである。

95 ～ 101 畦畔（図 21）　X ＝－ 155,405 より北では、間隔が 9.0 ～ 10.0 mで並ぶ東西畦畔を３本検出した。95 畦畔と 97 畦畔の間には南北の 96 畦畔が交わり、エの字状になる。97 畦畔と 99 畦畔の間には南北の 98 畦畔が走るが、99 畦畔との交点の角で屈曲してコの字状となる。99 畦畔の北にある 100 畦畔と 101 畦畔の間には 1.0 m途切れた箇所があり、ここが水口と思われる。

96 畦畔を挟んで東西の区画には高低差はないが、98 畦畔を挟んだ区画は東が 0.1 mほど高く、100 畦畔と 101 畦畔を挟んだ区画でも、東が 0.15 mほど高い。東から西へと水を引いていたと考えられる。101 畦畔は１区から２区まで約 15.0 mの長さで続く。

畦畔はいずれも頂部幅が 0.3 ～ 0.4 m、底部幅が 0.5 ～ 0.6 m、高さ 0. 1 ～ 0.15 m程度である。地表面には人や牛馬の足跡、耕作具痕が多数残る。

102 ～ 111 溝（図 21）95 畦畔と 96 畦畔、97 畦畔で囲まれた区画は地表高が低く、特に第５b 層の堆積が厚かった。この区画で等間隔に並ぶ溝列を検出した。

102 溝から 106 溝は長さ 5.0 ～ 7.0 m、107 溝から 111 溝は長さ 2.5 ～ 4.0 m、いずれも幅は 0.5 m、深さは 0.1 m、第５b 層のにぶい黄褐色細砂が埋積する。各溝は 1.5 mの等間隔で並び、畝溝と考えられる。

隣接する（その５）調査区では、第６ａ面は断面に激しい凹凸があり、平面では人や牛の足跡が耕作区画とは無関係な動きを示し、耕作具痕が多数認められる。調査担当者は、第５－２ａ層堆積の洪水後、浸水状態で、砂層の下から耕作土を掘りあげ、耕作土層を復旧する作業の痕跡と推論する。しかし、今回の調査では、畦畔や畝溝が明確に存在する地表面で多数の足跡や耕作具痕が併存してみられた。洪水で水田や畠が侵食された後の復旧遺構面とは考えられず、耕作時の工具痕と考えた方が無難と思われる。

112 流路・113 堤（図 21）　第６ａ面で検出した旧恩智川（２区の X ＝－ 155,361 ～－ 155,364 間）は川の底部を検出したもので、実際の川幅より狭まっている。この北肩に沿うように東西の堤防もしくは大畦畔の痕跡と考えられる、113 堤を検出した。

113 堤から計測すると川幅は 5.0 m以上で、113 堤の周辺が坪境にあたると推定される。113 堤も実際はさらに大きかったと推測されるが、残存幅 0.4 m、高さ 0.1 mをはかる。113 堤に沿うように、直径 0.2 mの丸杭や角杭が散在しており、これらの杭は旧恩智川の護岸施設と思われる。

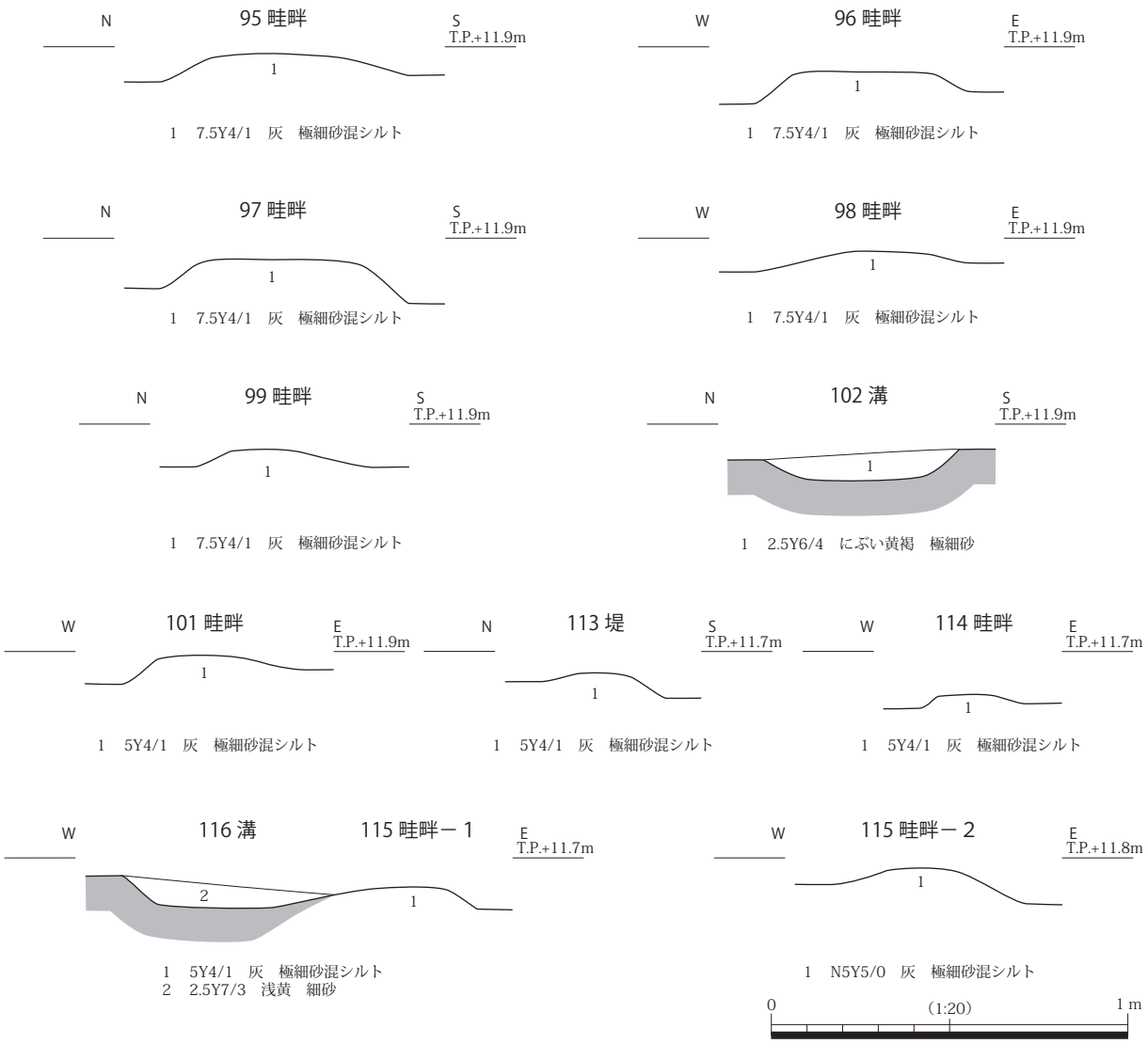


図 21　第６ａ面遺構断面図

114 畦畔（図 21）　旧恩智川流路北肩の 113 堤から垂直に北にのびる南北畦畔である。113 堤と 114 畦畔の切り合いは不明であるが、101 畦畔と 114 畦畔が相関性をもつとするなら、畦畔を切るように 112 流路が形成されている。114 畦畔は 101 畦畔より約 2.0 m西にずれた位置にあり、攪乱を挟んで、ほぼ同位置に 115 畦畔、116 溝が存在する。幅約 0.2 m、高さ 0.05 mをはかる。

115 畦畔・116 溝（図 21）　２区の北半で検出された南北方向の畦畔と溝である。116 溝は 115 畦畔の西に沿い、２区の中で消失する。幅 0.5 m、深さ約 0.1 mをはかる。

115 畦畔は２区からそのまま３区北端まで 50.0 m以上の長さでのびる事が確認できた。真方位より北西－南東にふる。頂部幅 0.2 m、底部幅 0.5 m、高さ 0.1 mをはかる。隣接する（その１）調査区では、10.0 m間隔で南北畦畔が２本検出されており、115 畦畔はこれらの畦畔と間隔や方向もぴったりと合致する（図 48）。

第５ａ面と同じく、第６ａ面でも南では東西長地型の、北では南北長地型の地割が行われていた事が判明した。その変化箇所をＸ＝－ 155,385 の 99 畦畔以北と捉えるか、Ｘ＝－ 155,360 付近の坪境以北と捉えるかは検討の余地がある。

第６ａ層の包含遺物は、12 世紀後半から 14 世紀までと広い時期に及ぶ。第６ａ面は上層遺構面と

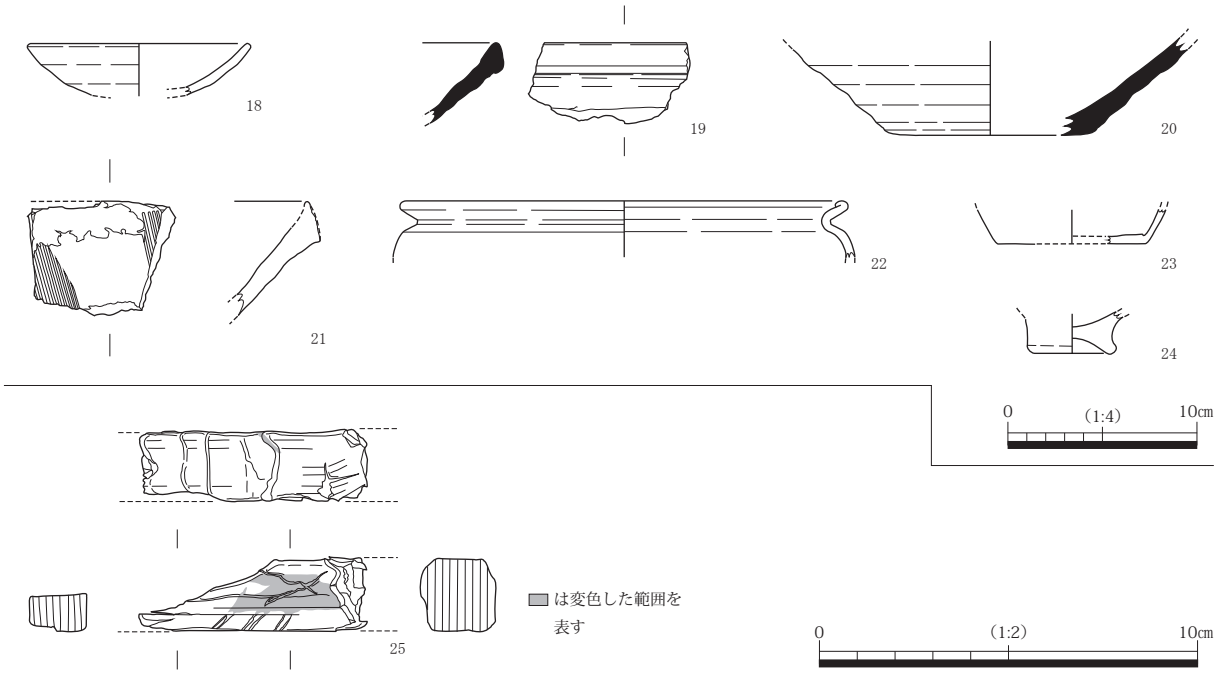


図 22　第６ａ層出土遺物実測図

の関係から、13 **世紀後半から** 14 世紀前半の遺構面と捉える。

（２）遺物（図 22、写真図版 16）

18 ～ 21 は１区から出土した土器である。

18 は瓦器椀である。内外面ともにミガキはみられず、外面の口縁部と体部の境にわずかにユビオサエが認められる。法量も小さくなった最終段階の、和泉型Ⅳ－３型式、13 世紀末～ 14 世紀初めのものである。

19・20 は東播系須恵器こね鉢である。19 は口縁部で、断面三角形だが端部は尖らずに丸みを帯びる。口縁部と体部の境に粘土紐の継ぎ目痕がみられる。第Ⅱ期第２段階、12 世紀末～ 13 世紀初めのものと思われる。20 は体部下半から底部で、底径 10.8㎝である。内面は摩耗しており、かなり使用されたと思われる。19 よりやや古い、第Ⅱ期第１段階、12 世紀後半位のものか。

21 は陶器擂鉢の口縁部で、内面の一部は剥離する。硬質の胎土や赤褐色の色調から備前焼陶器と思われる。断面は鋭角的な三角形であるが、外側に肥厚はしない。内面には９本１組程度の摺目が２箇所にみられる。13 世紀後半代のものか。

22 は３区から出土した土師器羽釜口縁部である。口縁端部は内側に巻き込み、口縁部から体部へは、くの字に屈曲する。器壁は薄く胎土も精良で、ナデで丁寧に仕上げられている。13 世紀代のものか。

23・24 は３区で出土した。23 は白磁皿底部である。内外面とも施釉され、底部から体部は直線的に立ち上がる。白磁皿Ⅸ類、13 世紀半ば以降のものか。

24 は弥生土器甕の底部である。底面は外に張り出す。これのみ他の遺物と大きく時期が異なることから、下層遺物の混入と考えられる。

25 は１区で出土した杭状木製品である。１辺 2.0㎝四方の角材で１端は欠損し、もう１端は斜めにそぎ落とされている。１面に「×」状の刻み痕と斜めに走る３本の擦痕が認められる。用途は不明である。

第６ａ面は、出土遺物に時期幅があるが 13 世紀後半から 14 世紀前半を主軸とする年代が与えられる。

図 23　第７－１ａ面平面図

第５節　第７－１ａ面・第７－４ａ面・第８ａ面・第９ａ面の遺構と遺物

（１）第７－１ａ面の遺構（図 23・24、写真図版７）

第７ａ層は１区や２区では堆積が厚く４層に分層ができるが、第７－４ｂ層以外はａ層とａ層の間にｂ層がみられず、各層の識別が困難だった。ただし、第７－２ａ層はカルシウムの結核を含み、第７－４ａ層は砂質が強く、酸化すると茶褐色にみえるなど比較的識別が容易だったため、これらの層を鍵層として第７－２ａ層と第７－３ａ層を分層し、第７－１ａ面と第７－４ａ面で遺構面調査を実施した。３区では第７ａ層は堆積が薄く、１層としか把握できなかったため、第７ａ層とした。第７ａ層上面を第７－１ａ面として報告している。

第７－１ａ面は灰黄色シルトをベースとし、遺構面の高さは１区で T.P. ＋ 11.5 ～ 11.6 m、２区で T.P. ＋ 11.6 ～ 11.7 m、３区で T.P. ＋ 11.6 ～ 11.7 mと、２区と３区はほぼ平坦で、１区がやや低く、北から南に低くなる地形をとる。１区全域で畦畔を、２区の X ＝－ 155,360 付近で流路を検出した。

117 ～ 123 畦畔　１区では東西方向の畦畔を７本検出した。畦畔の頂部は上層の耕作により削平されており、土色や土の締まり具合などから判断し、幅 0.5m程度の畦畔の平面痕跡のみ検出した。

調査区東から西まで横断するのは 119 畦畔のみで、他の畦畔は両端が途切れた状態で検出され、長さも 4.0 ～ 9.0 m程度しかない。いずれの畦畔も底部幅が約 0.5 m、高さは削平されているため 0.05 m未満で、真方位より南にややふる畦畔が多い。

119 畦畔と 120 畦畔の間隔は 9.0 m、121 畦畔と 122 畦畔の間隔は 9.5 m、122 畦畔と 123 畦畔の間隔は 11.0 mと、畦畔の間隔は不均等である。119 畦畔の南にある 117 畦畔と 118 畦畔は連続した畦畔になる可能性もある。隣接する（その５）・（その６）調査区でも東西方向の畦畔が検出されており（図 47）、これらの畦畔の延長で畦畔が連続していたなら、東西長地型の地割が西まで踏襲されていたと言える。

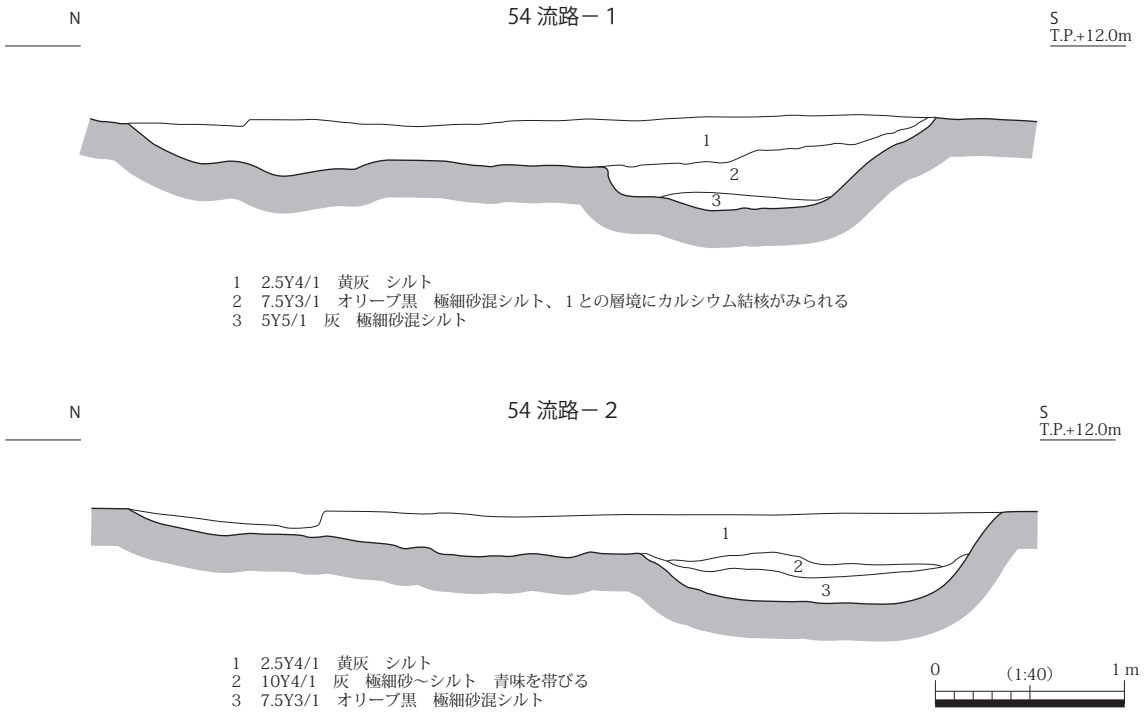


図 24　54 流路断面図

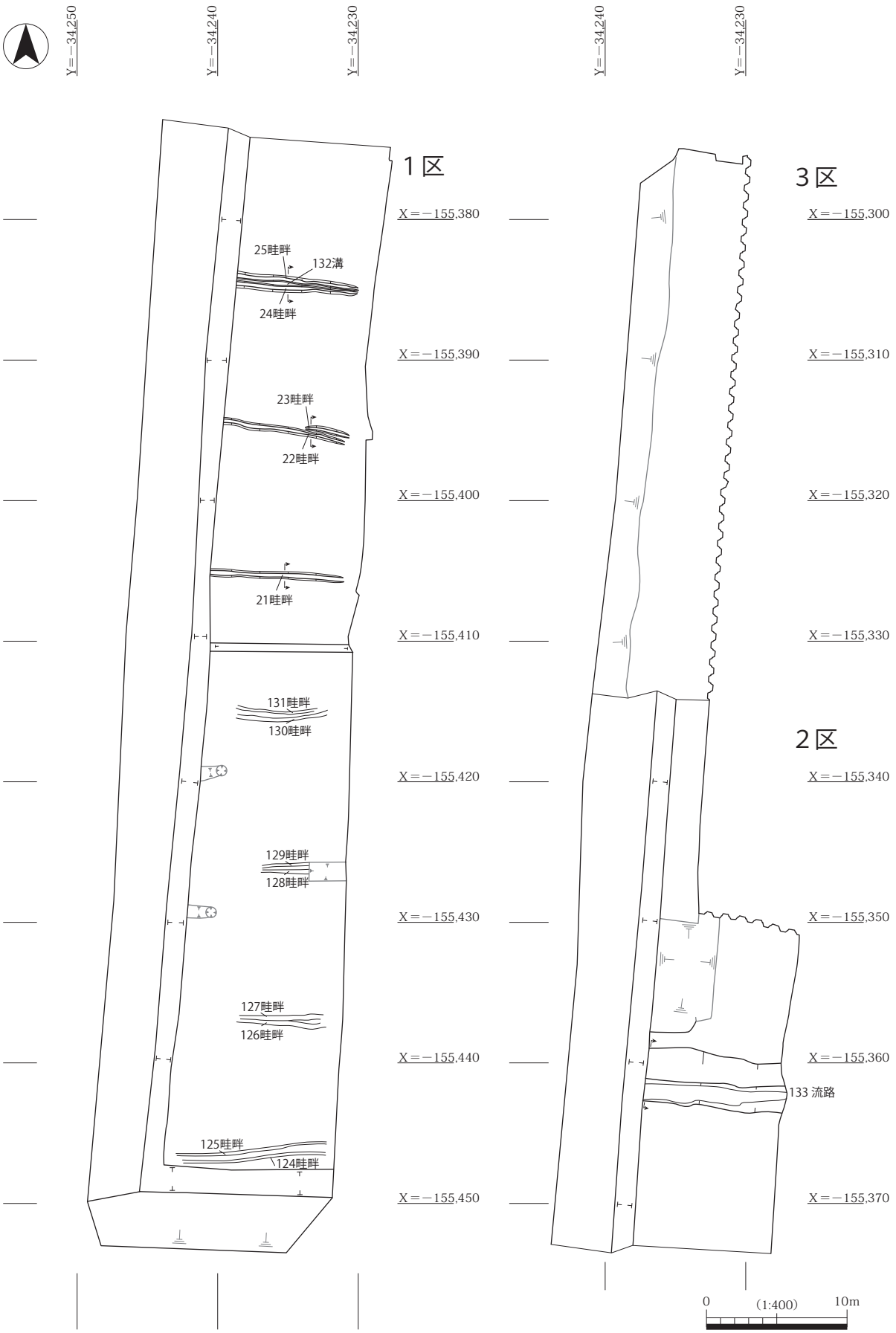


図 25　第７－４ａ面平面図

54 流路（図 24）　２区では畦畔は検出できなかったが、旧恩智川となる 54 流路を検出した。上面の第６ａ面 112 流路よりやや北にずれ、X ＝－ 155,360 ～－ 155,365 間で検出された。

南の肩は１段だが、北の肩は落ちから 2.0 ～ 3.0 m入って、もう一段深くなる２段落ちの形状をとる。

幅 4.3 ～ 4.6 mで、深さは浅い所で 0.2 m、段が落ちた最深部で 0.5 mをはかる。黄灰色シルト、灰色シルト、オリーブ黒色シルトが埋積するが、これらは上層の包含層が埋没したもので、水平堆積する事から、時間をかけて緩やかに堆積したと考えられる。両肩に護岸施設の杭が認められる。

54 流路内からは、13 世紀半ばから 14 世紀初めの瓦器椀や土師器皿が出土し、14 世紀初めに廃絶したと考えられる。

第７－１ａ面は遺構が希薄で、２区の 54 流路より北、及び３区では遺構は検出できなかった。

第７－１ａ層・第７－２ａ層には 13 世紀半ばから 14 世紀初めの遺物を含み、第７－１ａ面は 13 世紀後半から 14 世紀初めまでの遺構面と考えられる。

（２）第７－４ａ面の遺構（図 25・26、写真図版８）

第７－４ａ層は暗オリーブ灰色粗砂混じりシルトで、砂質が強く、酸化すると茶褐色を呈する。坪境以南では層厚 0.3 mと厚く堆積するが、坪境以北では堆積が薄くなる。

第７－４ａ面の遺構面の高さは、１区で T.P. ＋ 11.3 ～ 11.5 m、２区で T.P. ＋ 11.2 ～ 11.5 mである。１区から２区南半までは南から北へ徐々に低くなり、２区の坪境を越えると再び高くなる地形をとる。１区で多数の畦畔を、また、２区坪境付近で 133 流路を検出した。２区の 133 流路より北と、３区では遺構を検出していない。

21 ～ 25・124 ～ 131 畦畔・132 溝（図 26）　１区では東西方向で２本１組の畦畔６組と単独の畦畔１本、計 13 本の畦畔を検出した。また、２本の畦畔の間に部分的だが溝が検出された。

各畦畔の頂部は上層の耕作により削平されているため、平面形の痕跡を部分的に検出したものも多い。

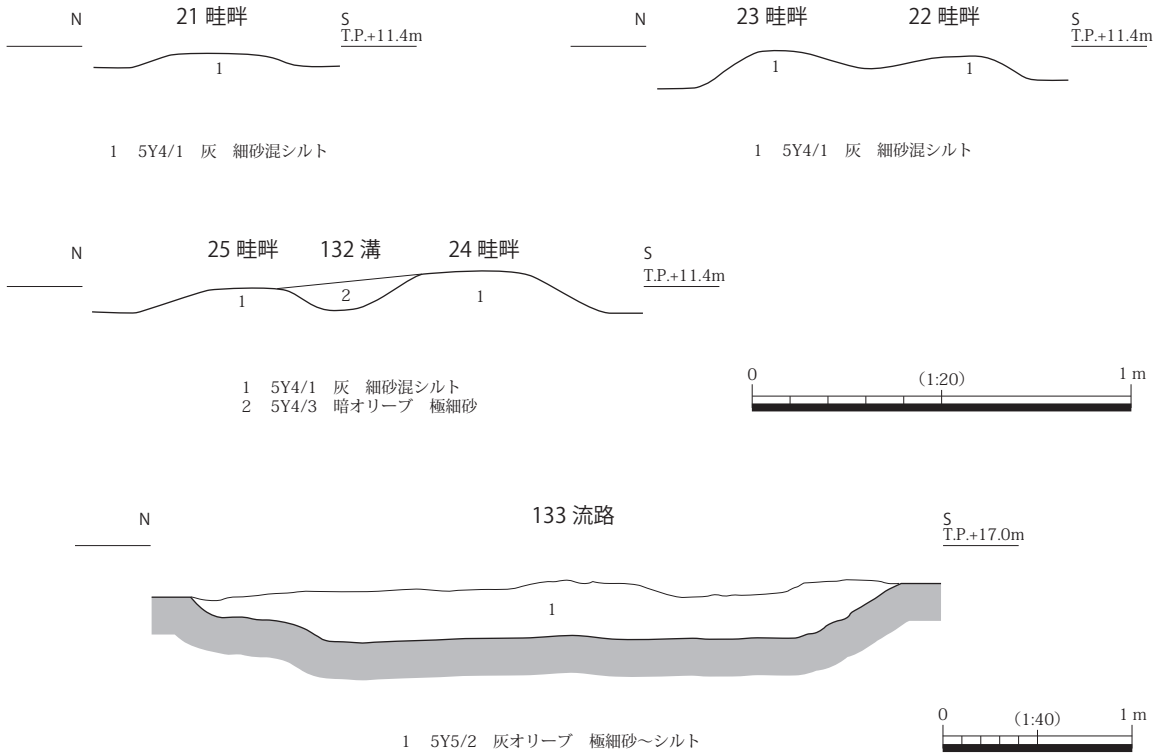


図 26　第７－４ａ面遺構断面図

第７－４ａ面の特徴は、例えば 24 畦畔と 25 畦畔の間に 132 溝があるように、２本の畦畔とその間の溝を１単位としているものが見受けられる事である。（その５）調査区でも同様の、２本の畦畔と溝の組み合わせを検出している。２本の畦畔に切り合いがあり、北側畦畔が南側畦畔の盛土にのる事から、２本の畦畔は同時に作られたのではなく、時期差があると報告されている。しかし、１区で検出した畦畔は、明確に北側畦畔と南側畦畔の切り合いを認められず、どちらが上層遺構か決定できなかった。いずれの畦畔も頂部幅が 0.1 ～ 0.15 m、底部幅が 0.2 ～ 0.25 m、高さが 0.05 ～ 0.1 mをはかる。その間の溝は 132 溝の場合、幅 0.2 m、深さ 0.05 mをはかる。

24 畦畔と 25 畦畔の対と 23 畦畔と 22 畦畔の対との間隔は約 10.0 m、22 畦畔と 21 畦畔の間隔も 10.0 m、と１対の畦畔同士はほぼ等間隔である。隣接する（その５）調査区では、ほぼ連続する位置に東西の畦畔が、そのさらに東の、（その６）調査区では東西畦畔とそれに 25.0 m間隔で交差する南北畦畔が検出されている。しかし、１区では調査区の東西幅が 10.0 mと狭い事もあり、南北方向の畦畔は検出されなかった。

西にいくほど遺構面が削平されて低くなっており、畦畔の検出は平面形での痕跡を検出したのみである。畦畔と畦畔の間がくぼみとなっている部分もあるが、132 溝以外は不明瞭である。

133 流路（図 26）　２区では第７－１ａ面 54 流路とほぼ同位置に、より古い段階の恩智川流路である 133 流路を検出した。

133 流路は 54 流路と比較すると川幅が若干狭くなり、最大幅 4.0 m、底部幅 2.2 m、深さ 0.3 mをはかる。遺物は出土していない。

第７－４ａ面は第７－４ａ層や第７－４ｂ層に瓦器椀や土師器を含み、13 世紀前半代の遺構面と考えられる。

（３）第８ａ面の遺構（図 27、写真図版９）

第８ａ面は、断面観察では識別できるが層界が曖昧であり、３区でのみ遺構面調査を行った。１区北壁付近では第８ａ層はさらに２層に分層可能であり、第８－２ｂ層も部分的にではあるが堆積していた（図７）。

３区では、１・２区と反対に第７ａ層の堆積が薄く、第８ａ層は層厚 0.2mと一定の厚さで堆積していた。また、第７ａ層と第８ａ層の間にわずかに砂層（ｂ層）が残るため、識別が容易であった。

第８ａ面は灰色細砂混じりシルトをベースとし、遺構面の高さは１区で T.P. ＋ 11.1 ～ 11.2 m、２区で T.P. ＋ 11.2 ～ 11.3 m、３区で T.P. ＋ 11.3 ～ 11.4 mである。第８ａ面以降は南から北へ低くなる傾向が逆転し、南から北へ高くなる地形をとる。３区の中央から北で、特に傾斜の度合いが強くなり北へと下がる。遺構は、３区で畦畔を１本検出した。

134 畦畔　３区では、調査区南端で南北方向の 134 畦畔を検出した。真方位よりやや西にふり、北西－南東を主軸とするが、長さ約 3.0 m検出したのみで、北端は調査区外へとのびて途切れる。隣接する（その１）調査区でも、わずかに西にふる南北畦畔が検出されており、南北長地型の水田区画が確認されている。この畦畔と 134 畦畔の間隔もほぼ合致する事から、１区から３区まで連続した南北長地型地割の区画があったと推定する。

第８ａ面は瓦器椀などの出土遺物から、12 世紀代の遺構面と考えられる。

（４）第９ａ面の遺構（図 28、写真図版９）

第９ａ面は、断面観察では識別できるが層界が曖昧であり、３区でのみ平面調査を行った。

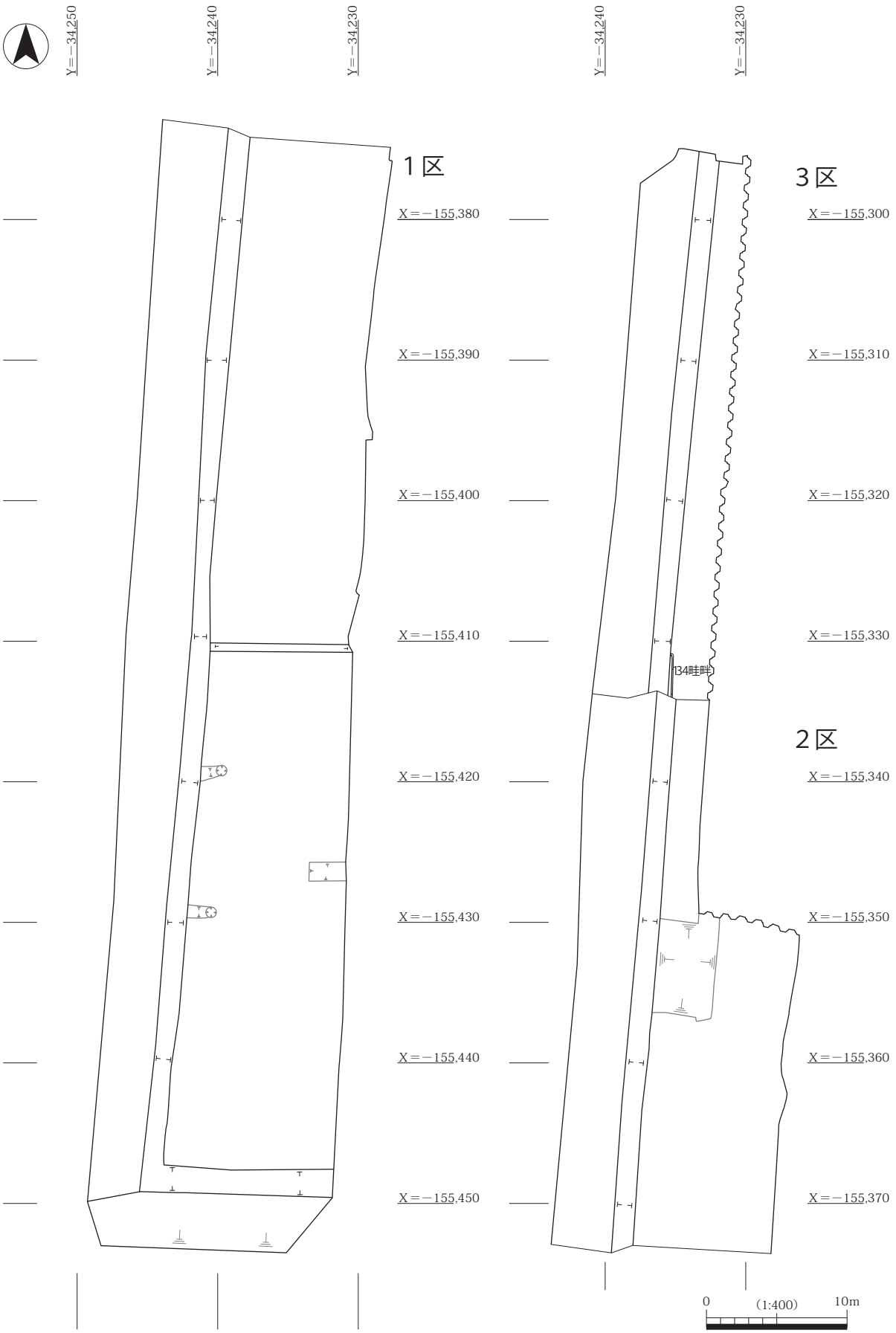

Y=−34,250
Y=−34,240
Y=−34,230
Y=−34,240
Y=−34,230
1区
3区
2区
X=−155,380
X=−155,390
X=−155,400
X=−155,410
X=−155,420
X=−155,430
X=−155,440
X=−155,450
X=−155,300
X=−155,310
X=−155,320
X=−155,330
X=−155,340
X=−155,350
X=−155,360
X=−155,370
134畦畔
0
(1:400)
10m

図 27　第 8 a 面平面図

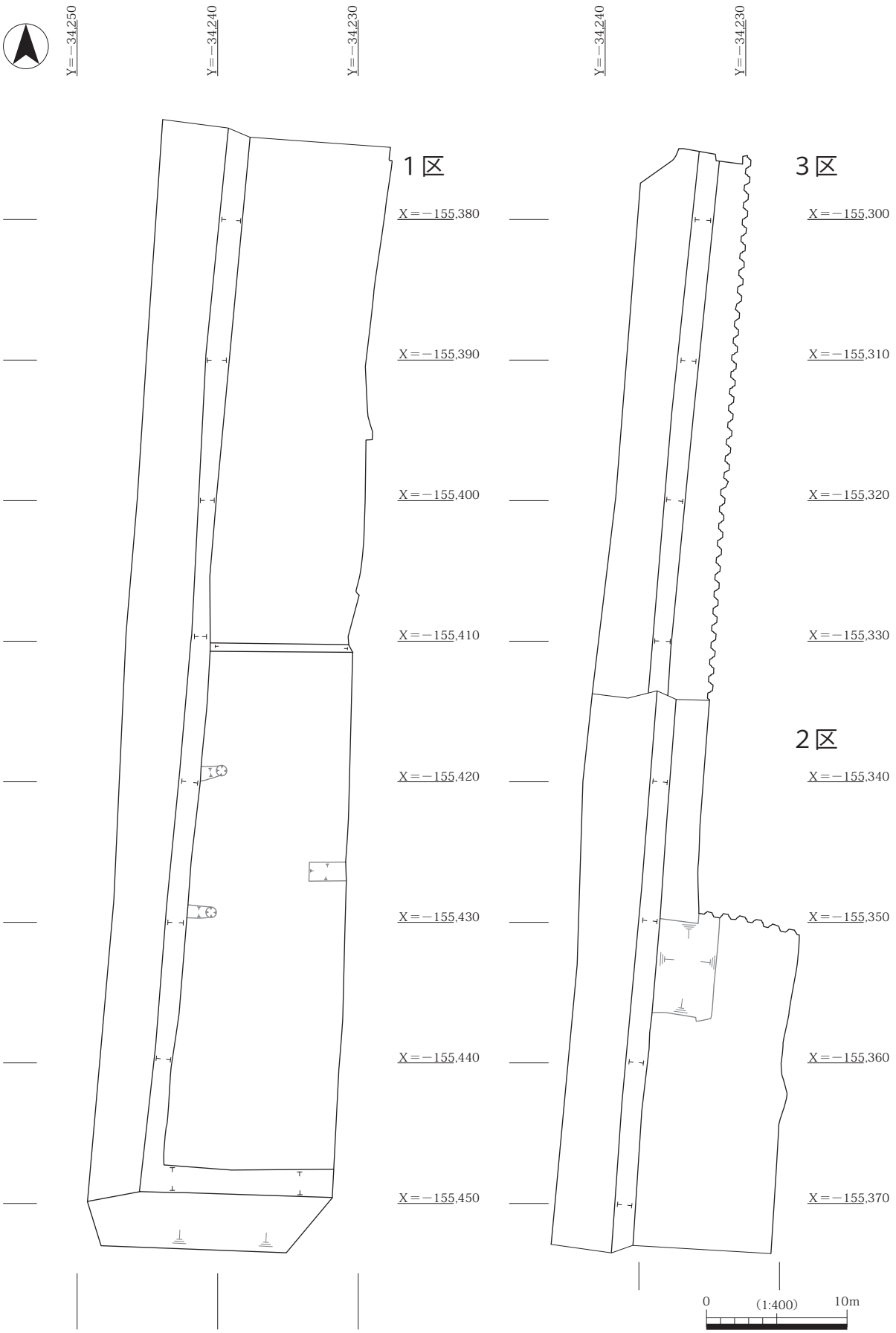

Y=−34,250
Y=−34,240
Y=−34,230
Y=−34,240
Y=−34,230
1区
3区
2区
X=−155,380
X=−155,390
X=−155,400
X=−155,410
X=−155,420
X=−155,430
X=−155,440
X=−155,450
X=−155,300
X=−155,310
X=−155,320
X=−155,330
X=−155,340
X=−155,350
X=−155,360
X=−155,370
0
(1:400)
10m

図 28　第 9 a 面平面図

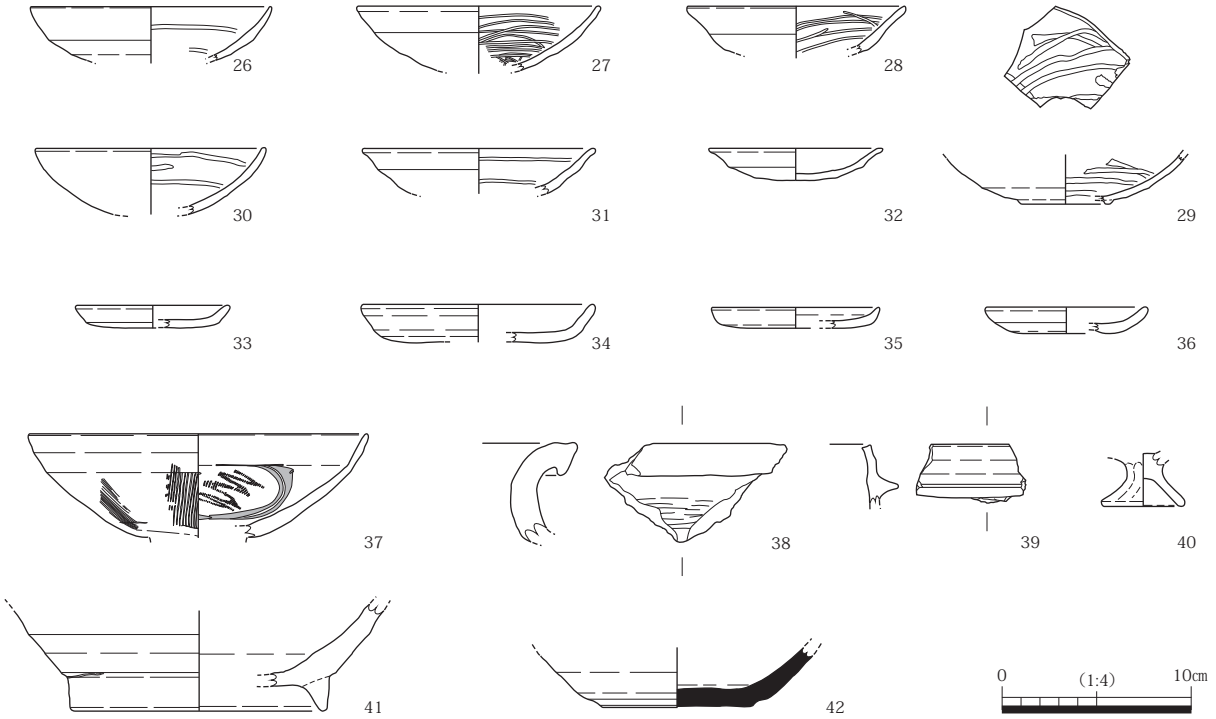


図 29　第７－１ａ層・第７－２ａ層・54 流路出土土器実測図

第９ａ層は第８ａ層よりやや緑色を帯び、粘質が強い。第９ａ面は灰色シルトをベースとし、遺構面の高さは１区で T.P. ＋ 11.0 ～ 11.1 m、２区坪境以南では第９ａ層はほとんどなくなるが、坪境以北では段違いに高くなって T.P. ＋ 11.3 ～ 11.4 m、３区で T.P. ＋ 11.2 ～ 11.3 mである。

３区では第９ａ層は層厚 0.3 ～ 0.4m と厚く、北にいくと若干薄くなる。平面精査を行ったが遺構は検出されなかった。１・２区に隣接する（その５）・（その６）調査区では、格子状の地割が、３区に隣接する（その１）・（その２）調査区では南北長地型の地割が検出されている。

第９ａ面は瓦器椀などの遺物から、第８ａ面よりわずかに古くなり、11 世紀後半から 12 世紀前葉の遺構面と考えられる。また、第９ｂ層以下は出土遺物に瓦器が含まれなくなり、土師器、須恵器、黒色土器が主となる。古代から中世への転換期にあたるのが、第８ａ面から第９ａ面であり、この時期に地割にも変化が生じると思われる。

（５）遺物（図 29 ～ 31、写真図版 16 ～ 18）

26 ～ 28 は１区の第７－１ａ層・第７－２ａ層から出土した瓦器椀である。

26 は体部下半から底部を欠損する。口径も小さく器高も浅くなっており、体部内部のミガキは太く、数条しか認められない事から、高台も消失した和泉型Ⅳ－３型式相当の瓦器椀と考えられる。27 と比較すると新しい時期のものである。

27 の口径は 26 とほぼ同法量だが、器高は深い椀形をなし、底部は欠損する。外面口縁部に強い棒状工具でなでた痕跡があるが、体部にミガキは認められない。体部内面は幅１～２㎜の細いミガキが密に施され、わずかに残る内面見込みには、体部と同じ幅の平行線ミガキが認められる。和泉型Ⅳ－２型式相当の瓦器椀と考えられる。

28 は 26・27 と比較すると法量は小さいが、器壁が厚く口縁部は外反気味である。体部内面にはミガキが疎らに施される。和泉型Ⅳ－３～４型式相当の瓦器椀と考えられる。

29 は３区の第７ａ層から出土した瓦器椀である。体部下半から底部のみ残る。底径が 4.8㎝と大きく、

体部も大きく広がる椀器形をなす事から、口径は 14.0 ～ 15.0㎝、器高も 4.0 ～ 5.0㎝あったと推測される。高台は、粘土紐状のものを貼り付けただけで整えられずに高さを失い、底面はつぶれ丸みを帯びる。外面の成形はかなり粗く、ユビオサエ痕が明瞭に残る。内面には幅４㎜の太いミガキを疎らに施す。和泉型Ⅲ－１～２型式相当の瓦器椀と考えられる。

30・33 は２区の第７－１ａ面 54 流路から出土した。30 は瓦器椀で、底部を欠損する。器壁は口縁部から体部までほぼ同じ厚さで、口縁端部は丸みを帯びる。外面にはミガキは認められず、内面は幅３㎜の太いミガキが数条巡るのみである。和泉型Ⅳ－３型式相当の瓦器椀と考えられる。

33 は土師器皿で、器壁は厚く、底部から体部が直線的に立ち上がる。13 世紀半ばと考えられる。54 流路から出土した遺物は、30 が 14 世紀初め、33 が 13 世紀半ばと時期差があるが、遺構の特質上古い時期のものを巻き上げたと考えられ、54 流路の廃絶時期として 14 世紀初めが求められよう。

31・32 は２区の第７－１ａ層～第７－３ａ層から出土した。31 は瓦器椀で、法量も小さく内面のミガキもごく疎らな事から、和泉型Ⅳ－３型式相当の瓦器椀と考えられる。32 は瓦器皿で、強いユビオサエのために口縁部は外反する。胎土も精良で精巧なつくりだが、内外面にミガキは認められない。

34 ～ 36 は土師器皿である。34 は大形で、口径 12.4㎝をはかる。口縁部は緩やかに立ち上がる。35 は 33 に似るがより器高が浅く、口縁端部は細くつまみ上げる。36 はやや厚く、口径に比して器高が深い。いずれも 13 世紀半ば～後半と考えられる。

37 は２区の第７－１ａ層･第７－２ａ層から出土した青磁碗である。口径 17.8㎝、器高 5.4㎝、底径 5.4㎝をはかる。口縁部は直線的に上方にのび、屈曲して体部へと続く。胎土は精良で、体部内外面ともオリーブ黄色に施釉されるが、底面は施釉されない。体部外面には櫛目文が、内面にはヘラによる片彫りで圏線を描き、その中に櫛でジグザグ文様を描いている。同安窯系の青磁で、12 世紀半ば～後半のものと思われる。

38 は１区の第７－１ａ層・第７－２ａ層から出土した。陶器甕の口縁部である。口縁部を外に折り曲げ、断面がＮ字形で、常滑焼と思われる。内外面ともに煤が付着し、被熱した痕跡が残る。

39 は３区の第７ａ層から出土した。瓦質土器羽釜の口縁部から鍔部である。いぶし焼が不十分で炭素が吸着していない。

40 は１区の第７－１ａ層・第７－２ａ層から出土した。土師器ミニチュア土器高杯である。杯部は欠損し、脚部から台部のみ残る。

41 は２区の第７－１ａ層・第７－２ａ層から出土した。陶器鉢で体部下半から底部のみ残る。底径 13.6㎝、高台高 1.8㎝をはかる大形の鉢である。体部外面に粘土紐の接合痕が残る事から、粘土紐を巻き上げた後にロクロ成形されている事が分る。外面は縦横にヘラナデ、底部近くは回転ヘラケズリを施し高台を貼り付ける。高台は断面三角形でほぼ垂直にのびる。内面は使用による荒れか、ローリングを受けたものか、かなり摩耗している。胎土は粗く、５㎜程度の白色礫を含み、灰白色を呈する。胎土や成形技法から常滑焼の鉢Ⅰ類（山茶碗系）と考えられ、片口鉢になる可能性が高い。12 世紀後葉～ 13 世紀前葉のものか。近畿では出土例が少ない。

42 は１区の第７－１ａ層から出土した。東播系須恵器こね鉢の底部である。内外面を回転ナデで仕上げるが、全体に粗雑な作りで外面にはユビオサエ痕が残る。

43・44 は平瓦である。43 は１区の第７－１ａ層・第７－２ａ層から出土した。側縁のみが焼成時のままで、それ以外は欠損する。凹面には布目痕が残る。

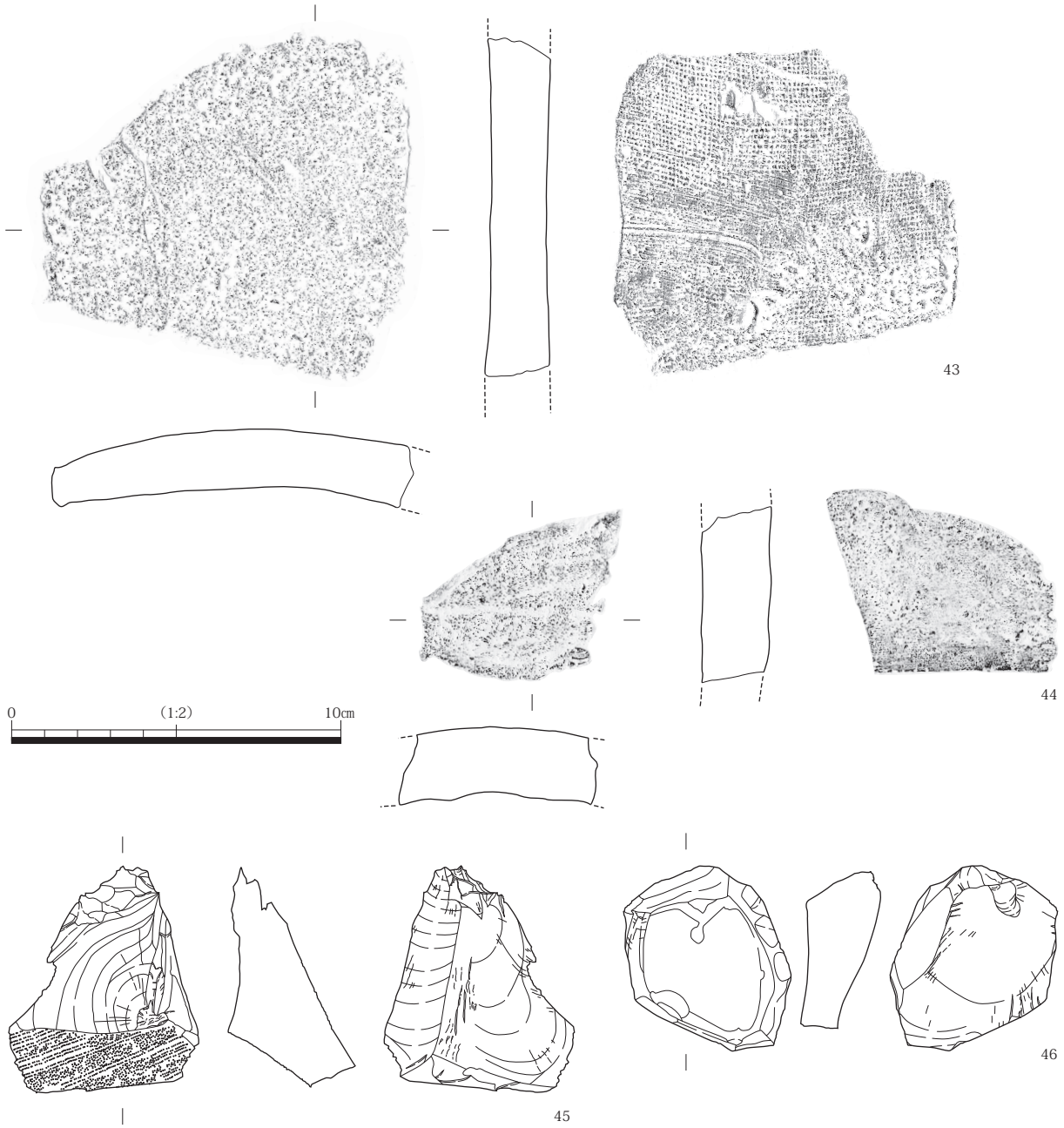


図30　第７－１ａ層・第７－２ａ層出土瓦・石器実測図

44は３区の第７ａ層から出土した。小片で、凹面と狭端面は火を受け、炭化している。

45・46は２区から出土したサヌカイトの剥片である。45の１面は自然面で残り、石核から打ち欠いたままの状態と思われる。46も石核から打ち欠いた際に生じた破片と思われる。ｂ面以外の３面が風化し、蝋化しているのは、地中の水分や鉄分によって変質を受けたものか。

47は３区の第８ａ層から出土した瓦器椀である。口径17.8㎝、器高6.2㎝、底径5.3㎝で、深い椀形を呈する。体部から口縁部は緩やかに立ち上がり、ヨコナデによってわずかに外反し、先端は丸く収める。高台もきれいに整えて貼り付け、断面三角形である。体部内面は幅１㎜の細いミガキを密に施す。内面の見込みは格子状ミガキである。和泉型瓦器椀Ⅰ－３型式相当、12世紀前半のものと考えられる。

48は１区の第９ｂ層から出土した瓦器椀である。体部下半わずかと底部のみ残存する。底径7.6㎝である。高台は外に大きく張り出す。内面には密にミガキが、見込みには格子状ミガキが施され、外

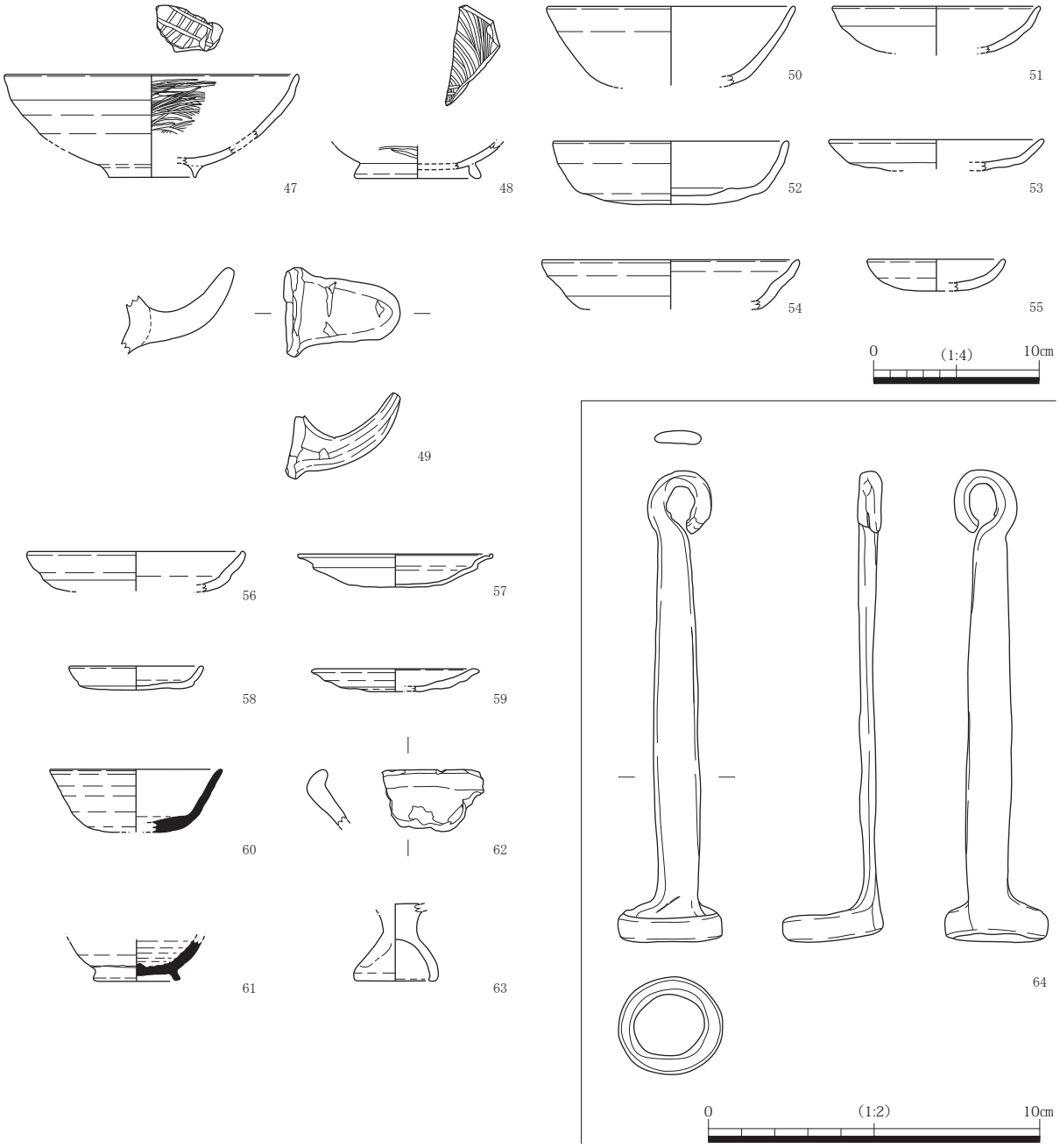


図31　第７－４ａ層・第８ａ層・第９ａ層出土遺物実測図

面にもわずかにミガキが認められる。ミガキの太さや高台のつくりなどは47よりやや新しい印象だが、47と同じく和泉型Ⅰ－３型式相当であろう。

49は１区の第７－４ａ層～第９ａ層から出土した土師器甕の把手である。手づくねで成形され、湾曲して上方にのびる。８世紀後半のものであろうか。

50は２区の第７－４ａ層～第９ａ層から出土した土師器椀である。底部を欠損する。内外面ともナデで仕上げられている。51は１区の第９ｂ層から出土した土師器椀である。器高は浅く、口縁端部は平らである。

52～59は第７－４ａ層～第９ａ層から出土した土師器杯もしくは皿である。52は１区の第９ａ層もしくは第９ｂ層から出土した土師器杯である。底部から体部が直線的に立ち上がる。53は１区の第７－４ａ層～第９ａ層から出土した土師器大皿である。口縁部はわずかに外反する。54は２区の第７

－４ａ層～第９ａ層から出土した土師器杯である。器壁は厚く、外面の強いユビオサエによって、口縁部と体部の境に凹凸ができる。55 は１区の第７－４ａ層～第９ａ層から出土した土師器皿である。口縁部から体部は緩やかに立ち上がる。

56 は２区の第７－４ａ層～第９ａ層から出土した土師器杯である。器壁は厚く、外面の強いユビオサエによって、口縁部と体部の境に凹凸ができる。57 は２区の第７－４ａ層～第９ａ層から出土した土師器皿である。器壁はきわめて薄く、口縁端部を内側に巻き込む、いわゆるての字状口縁皿で、10 世紀代のものであろう。58 は２区の第７－４ａ層～第９ａ層から出土した土師器皿である。底部から体部が直線的に立ち上がる。内外面に煤が付着する。59 は３区の第９ａ層から出土した土師器皿である。ヨコナデとナデで成形されるが、凹凸が激しい。

土師器椀・杯・皿は時期的にも幅があるが、10 ～ 11 世紀代のものが多い。

60 は２区の第７－４ａ層～第９ａ層から出土した須恵器杯身である。底部は平らで、稜も消失し底部から口縁部へとなだらかに広がっていく。口縁端部は平らである。内外面とも回転ナデ調整である。飛鳥時代のものであろう。

61 は２区の第７－４ａ層・第７－４ｂ層から出土した須恵器杯身である。上半は欠損し、体部下半から底部の出土である。底径 5.2㎝と小形で、体部の膨らみから長胴の壺になると推測される。高台の接地面は平らであり、わずかに外に張り出す。底部と高台の境には接合痕が残る。内面は回転ナデ、外面は回転ケズリ、ナデ調整である。奈良時代中期と思われる。

62 は３区の第８ａ面から出土した。土師器甕の口縁部である。小片であるが、口縁部は短くつまみ上げ、くの字状を呈する。

63 は２区の第７－４ａ層～第９ａ層から出土した。土師器のミニチュア土器高杯で、杯部から上を欠損し、脚部のみである。内外面ともナデで仕上げられるが、外面には成形の際のシボリの痕跡や、焼成時の黒斑が残る。奈良時代から平安時代のものであろう。

64 は２区の第７－４ａ層～第９ａ層から出土した。金属製品の馬具で、引手である。長さ 14.2㎝、最大幅 3.15㎝で、厚さ 0.4㎝をはかる。上端には直径約 2.0㎝の鉤部分をもち、下端には鉤に対しては直角の方向で直径約 3.0㎝の環が作られている。引手とは轡（くつわ）の一部で、馬の口に嵌める喰（はみ）にまず、遊金（あそびがね）という円環の金具を連結させる。引手の鉤部分をこの遊金に連結させ、もう一方の環部分に手綱を繋げる道具である。喰は遊金以外には鏡板（かがみいた）、立聞（たちぎき）とも連結しており、これらは馬の頬から耳の後ろを通って、頭の面繋（おもがい）へと続く。出土品は鉄製で完形品だが、全体に錆が付着する。出土層位から 11 世紀から 13 世紀のものと推定される。

古墳時代の馬具は古墳からの出土品などで報告例があるが、古代末から中世になると伝世品はあっても出土品はほぼない。平成 22 ～ 23 年度、滋賀県高島市の天神畑（てんじんばた）遺跡の川跡から、12 世紀末から 13 世紀の土器と共に轡が出土しているのが、鎌倉時代の出土資料としては初出とされている。立聞、鏡板、遊金、喰、引手が繋がった状態で一式出土した。64 も出土時期に幅があるが、包含遺物は古代から中世前期を示しており、引手の出土品としては古い時期の貴重な資料と言える。ただし、耕作地の開墾に馬を使用したとしても、その際に轡や鞍を装着して騎乗したとは考えにくい。川などに流されて漂着すし、何らかの形で耕作土中に混入したものか。

第７－４ａ層は 13 世紀前半まで、第８ａ層は 12 世紀前半までの遺物を含み、第９ａ層と第９ｂ層は、10 世紀から 11 世紀を主体とする。

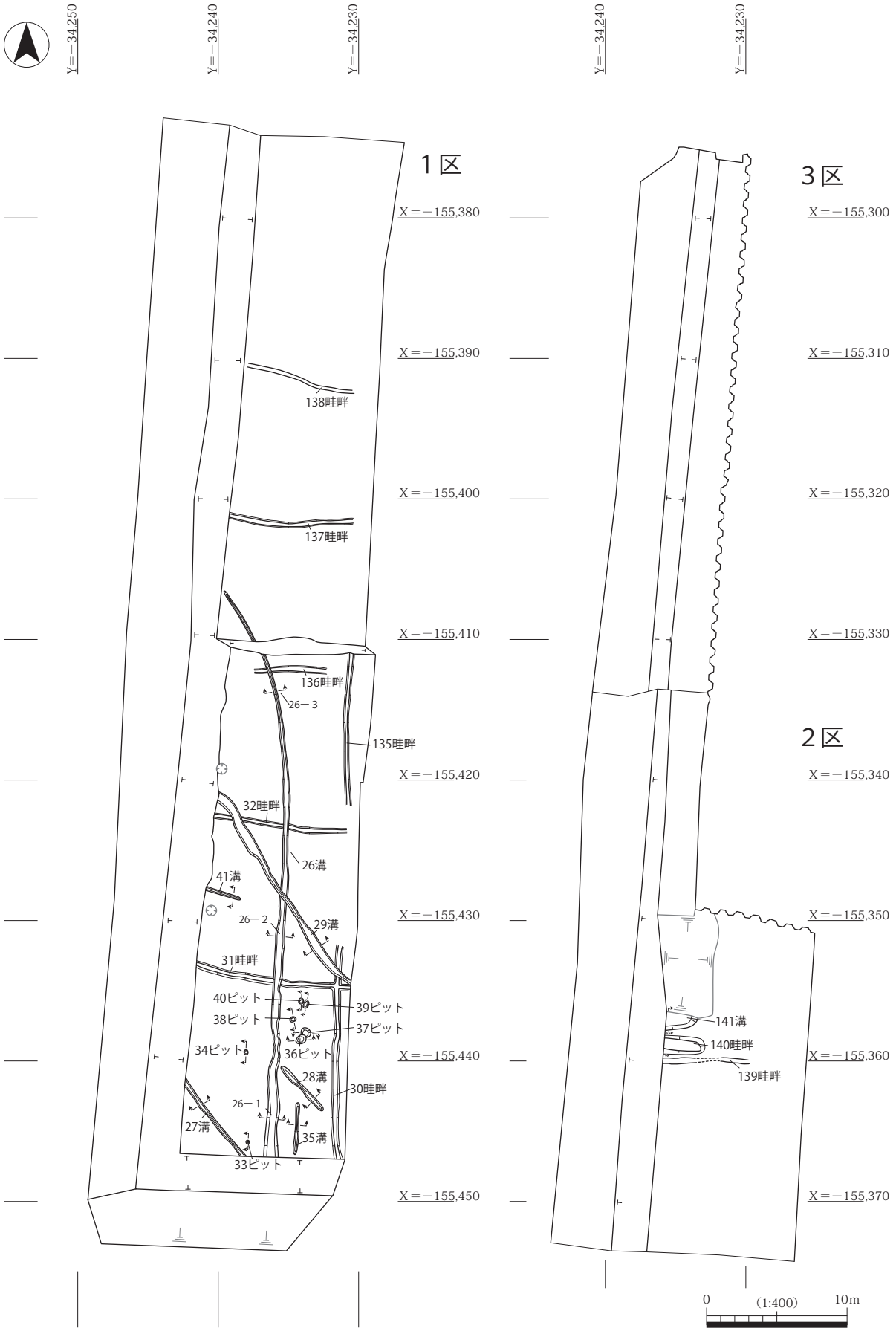


図 32　第 10 － 1 a 面平面図

第６節　第 10 － 1 ａ面・第 10 － 2 ａ面の遺構と遺物

（１）第 10 － 1 ａ面の遺構（図 32・33、写真図版 10・11）

１区南半では第９ｂ層が厚く堆積していたため、遺構面の残存状況が良好であった。第 10 ａ層の堆積は南で厚く、１区南半では第 10 － 1 ｂ層を挟んで第 10 － 1 ａ層と第 10 － 2 ａ層に分層可能だった。しかし、第 10 ａ層の堆積は北にいくほど薄くなり１層としか判別できず、２区と３区では第 10 － 1 ａ面のみの検出となった。従って、第 10 － 1 ａ面は全区を通して調査を行ったが、第 10 － 2 ａ面は１区のみで調査した。

第 10 － 1 ａ面は暗オリーブ灰色シルトをベースとし、遺構面の高さは１区で T.P. ＋ 11.0 ～ 11.1 m、２区で T.P. ＋ 10.8 ～ 10.9 m、３区で T.P. ＋ 11.0 mである。南から北へ低くなる地形をとる。

１区では、東西方向の畦畔５本と、東端で南北方向の畦畔を２本検出した。その他、畦畔を切る溝やピットを検出した。２区では、X ＝－ 155,360 付近で東西方向の畦畔や溝を検出した。３区では遺構は検出されなかった。

31・32・136 ～ 138 畦畔　１区で検出した東西方向の畦畔である。いずれも底部幅 0.5 m程度、高さ約 0.1 mで、頂部を削平されて痕跡を検出した。真方位よりやや北にふる。畦畔と畦畔の間隔は 10.0 ～ 11.0 mと考えられる。

隣接する（その５）調査区では、第 10 － 1 ａ面で、それまでの東西長地型の地割から、ほぼ正方形の格子状の地割へと変遷する（図 46）。しかし、当調査区では東西の 31 畦畔と南北の 30 畦畔が十字状に交差する以外は、格子状の地割区画はみられない。

30・135 畦畔　１区東端で検出した南北方向の畦畔である。東西畦畔同様、削平されて平面痕跡の検出にとどまった。30 畦畔は 31 畦畔と交差して十字状を呈する。南北畦畔と東西畦畔が交わるのはこの１箇所のみなので、１区に格子状の水田区画が存在したかは明らかでない。

26 溝（図 33）　31・32・136 畦畔の上面の遺構として、畦畔に交差して南北にのび、X ＝－ 155,420 付近から弧を描いて緩やかに西に曲がる溝である。幅を狭めて調査区外へとのびていく。検出長は 40.0 m以上であり、最大幅 0.8 m、最小幅 0.3 m、深さ 0.05 ～ 0.1 mをはかる。

埋土は単層で、第９ｂ層の灰色シルトが埋積する。東西畦畔を切る事から、水田区画より新しい遺構と言える。26 溝は、そのさらに上面遺構の 29 溝に切られる。

27 ～ 29 溝（図 33）１区南半で、北西－南東を主軸として 45°の角度で斜行する、27 ～ 29 溝を検出した。

27 ～ 29 溝は北西－南東を主軸として規則的に並行に並ぶ事から、相関性をもった遺構と捉える。条里型地割には沿っていない遺構だが、直線的な形状や、（その５）調査区でも同方向、同規模の溝が検出されており、並行する溝が数本並ぶ事からすると、人為的な溝と考えられる。29 溝が 26 溝や 30 畦畔、32 畦畔を切る事から、これらの溝は第 10 － 1 ａ面では最も新しい遺構と言える。

27 溝は幅 0.5 m、深さ 0.05 mを、28 溝は幅 0.45 m、深さ 0.05 mを、29 溝は幅 0.6 m、深さ 0.08 mをはかる。27 溝と 28 溝は 6.5 m、28 溝と 29 溝は 7.5 mの間隔で並行に並ぶ。

35・41 溝（図 33）　35 溝は１区南東端で検出された南北溝である。26 溝の東で、26 溝に沿うように位置する。幅 0.3 m、深さ 0.05 mをはかる。

41 溝は 31 畦畔と 32 畦畔の中間に位置する東西溝である。幅 0.2 m、深さ 0.05 mをはかる。

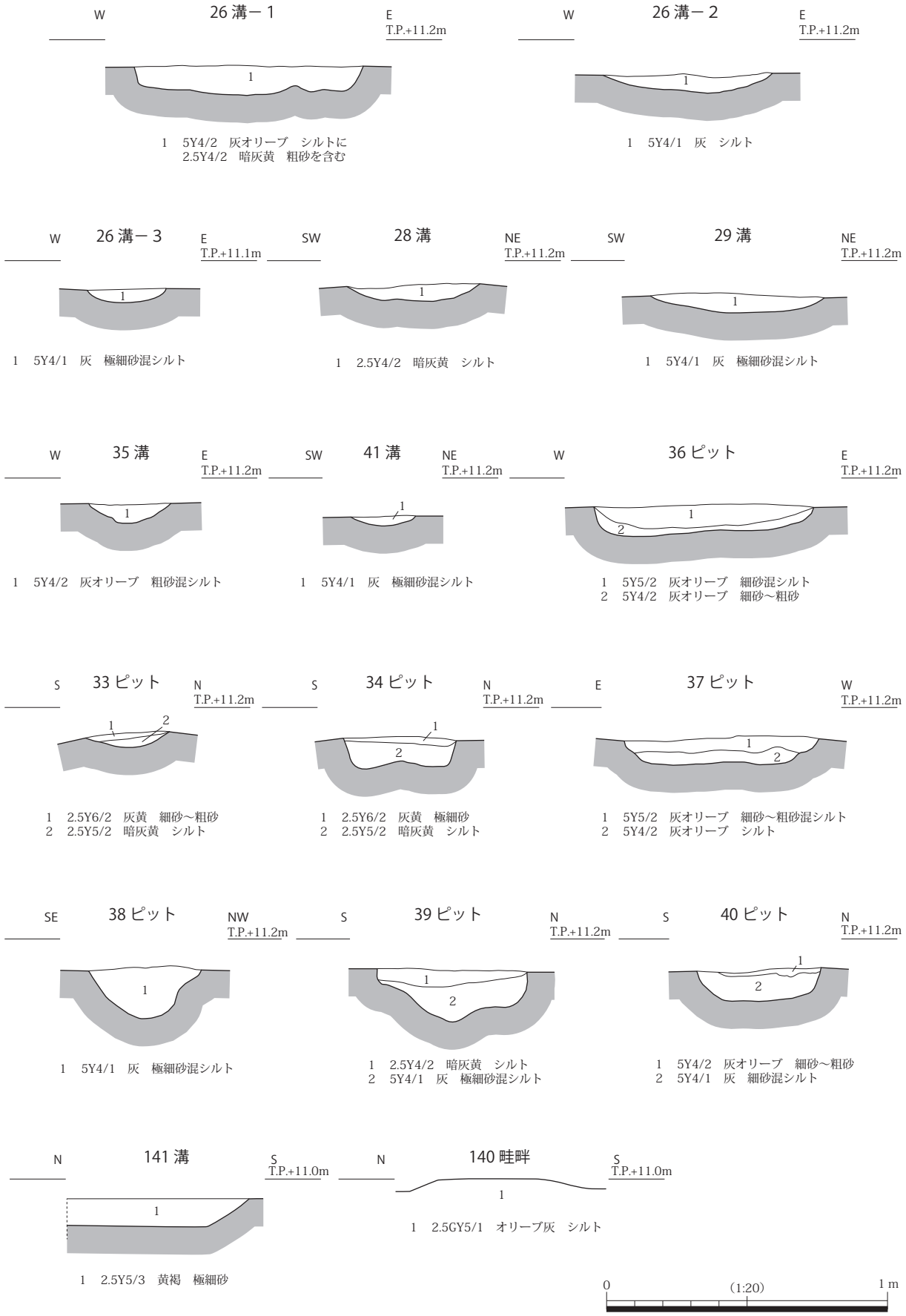


図 33　10 － 1 a 面遺構断面図

33・34・36 ～ 40 ピット（図 33）　1 区南半で検出した、円形もしくは楕円形のピットである。最小の 33 ピットで直径 0.25 m、深さ 0.05 m、最大の 36 ピットで直径 0.8 m、深さ 0.2 mをはかる。

38 ピットは断面U字形で、人為的な埋め戻しによる土が埋積していた。それ以外のピットは、第 10 － 1 a 面のベース土が埋積するので、自然のくぼみに近いかもしれない。

139・140 畦畔、141 溝（図 33）　2 区の坪境付近で検出した東西方向の畦畔と溝である。139 畦畔は頂部を削平されており、痕跡のみ検出した。幅 0.4 mで、調査区西端から約 7.0 m東にのびて消失する。140 畦畔は 139 畦畔の北に位置し、西端から長さ 3.0 mで消失する。頂部幅 0.7 m、底部幅 1.1 m、高さ約 0.1 mをはかる。位置と規模から坪境の大畦畔とも考えられる。

141 溝は 140 畦畔の北に位置し、やはり西端から東に 2.5 mで途切れる。北半は攪乱によって切られる。残存幅 1.3 m、深さ 0.2 mをはかる。

第 10 a 層に古代の土師器や須恵器などを含む事から、第 10 － 1 a 面は 10 世紀中を中心とする遺構面と考えられる。また、第 10 a 面より上層に巻き上がった遺物ではあるが、2 区で 7 世紀後葉の複弁蓮華文軒丸瓦が 1 点出土している。

第 10 － 1 a 面以前になると、畦畔などの耕作遺構は検出されないので、第 10 － 1 a 面は条里地割に基づいて区画された、最古の耕作遺構面と言える。しかし、今回の調査で東西方向の畦畔は確認できたが、既往の調査区でみられるような格子状の地割は確認できなかった。また、遺構の検出範囲もX＝－ 155,360 の坪境より南に限定される。

（2）第 10 － 2 a 面の遺構（図 34・35、写真図版 10・11）

第 10 － 2 a 面は、第 10 － 1 b 層の存在によって、第 10 － 1 a 層と第 10 － 2 a 層が分層可能な 1 区南半でのみ検出した。従って、2 区と 3 区では遺構面を検出していない。

第 10 － 2 a 面は暗オリーブ灰色シルトをベースとし、遺構面の高さは 1 区で T.P. ＋ 10.8 ～ 11.0 m である。南から北へ低くなる地形をとる。2 本の溝や複数のピットを検出した。

42・43 溝（図 35）　42 溝と 43 溝は、第 10 － 1 a 面と逆方向の、北東－南西を主軸として真方位より 45°斜行する溝である。42 溝と 43 溝は約 1.5 m間隔で並行する。

42 溝は蛇行しながら 43 溝に沿ってのび、調査区内で両端が検出される。長さ約 11.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.05 mをはかる。第 10 － 1 b 層が埋積する。

43 溝は両端とも調査区外に続く。北東端から途中までは直線的だが、北西に向かって蛇行して、調査区外に延長する。長さ約 18.5 m、幅 0.6 ～ 1.35 m、深さ 0.05 ～ 0.15 mをはかる。断面を観察すると、浅く広がる部分、深くV字形を呈する部分、踏み込みによって攪拌された部分と様々である。

42 溝、43 溝は幅も一定でなく、平面形も直線的でなく不定であるため、人工的に構築されたものでなく、自然地形によって生じた落ち込み、溝状の遺構と捉えられる。

44 ～ 51 ピット（図 35）　44 ～ 50 ピットはいずれも直径 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.05 mの円形の小形のピットである。1 区南東部に集中するが、検出位置は様々で相互距離にも一定性がなく、建物などを構成するピットにはなり得ない。従って、各ピットに相関性はないと思われる。

51 ピットは 43 溝内で検出した。断面形が椀形で、直径 0.5 m、深さ 0.2 mをはかる。

第 10 － 2 a 面は第 10 － 2 b 層に古墳時代から平安時代の遺物を含み、第 10 － 1 a 面と大きな時期差はない、10 世紀代代の遺構面と考える。

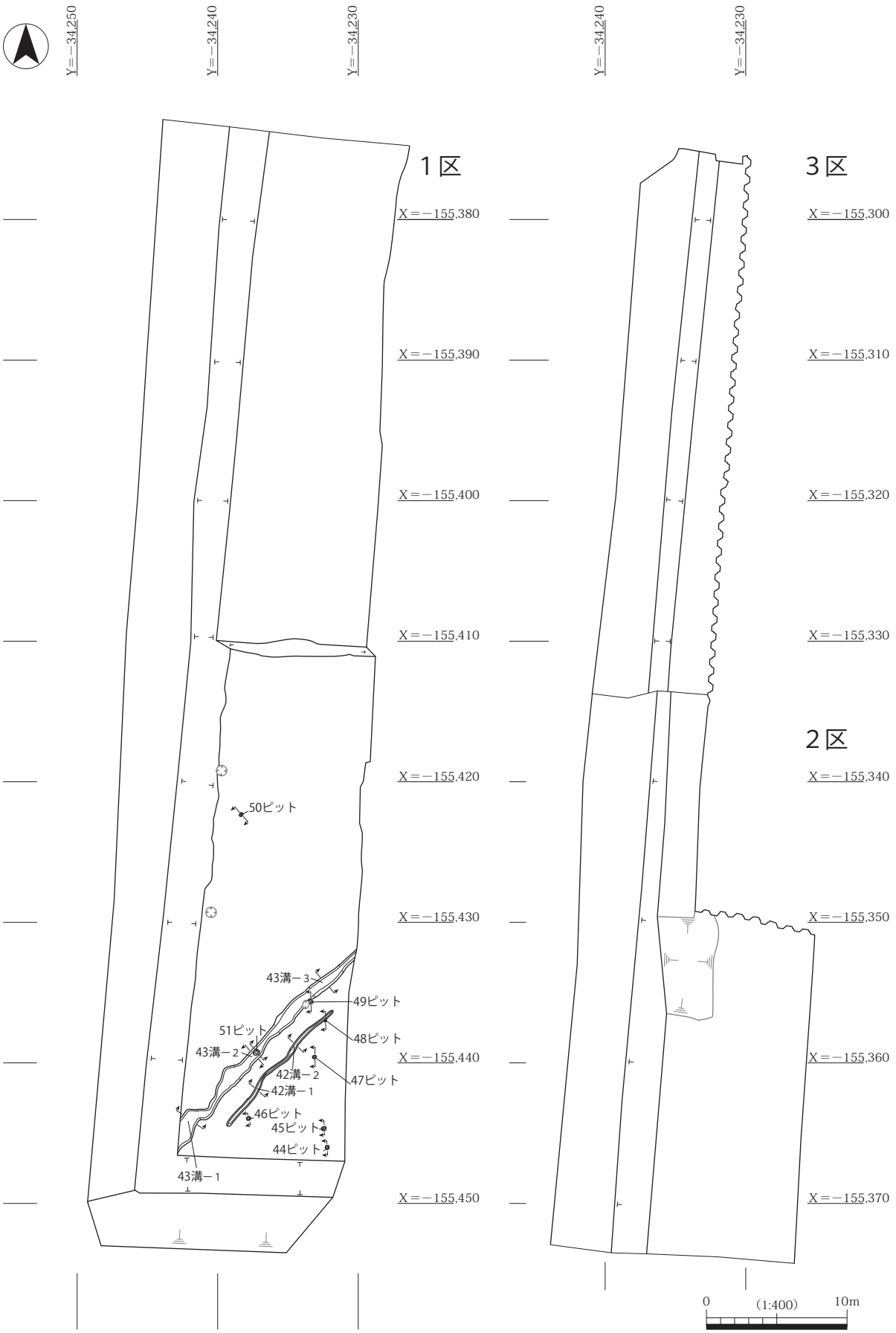


図 34　第 10 − 2 a 面平面図

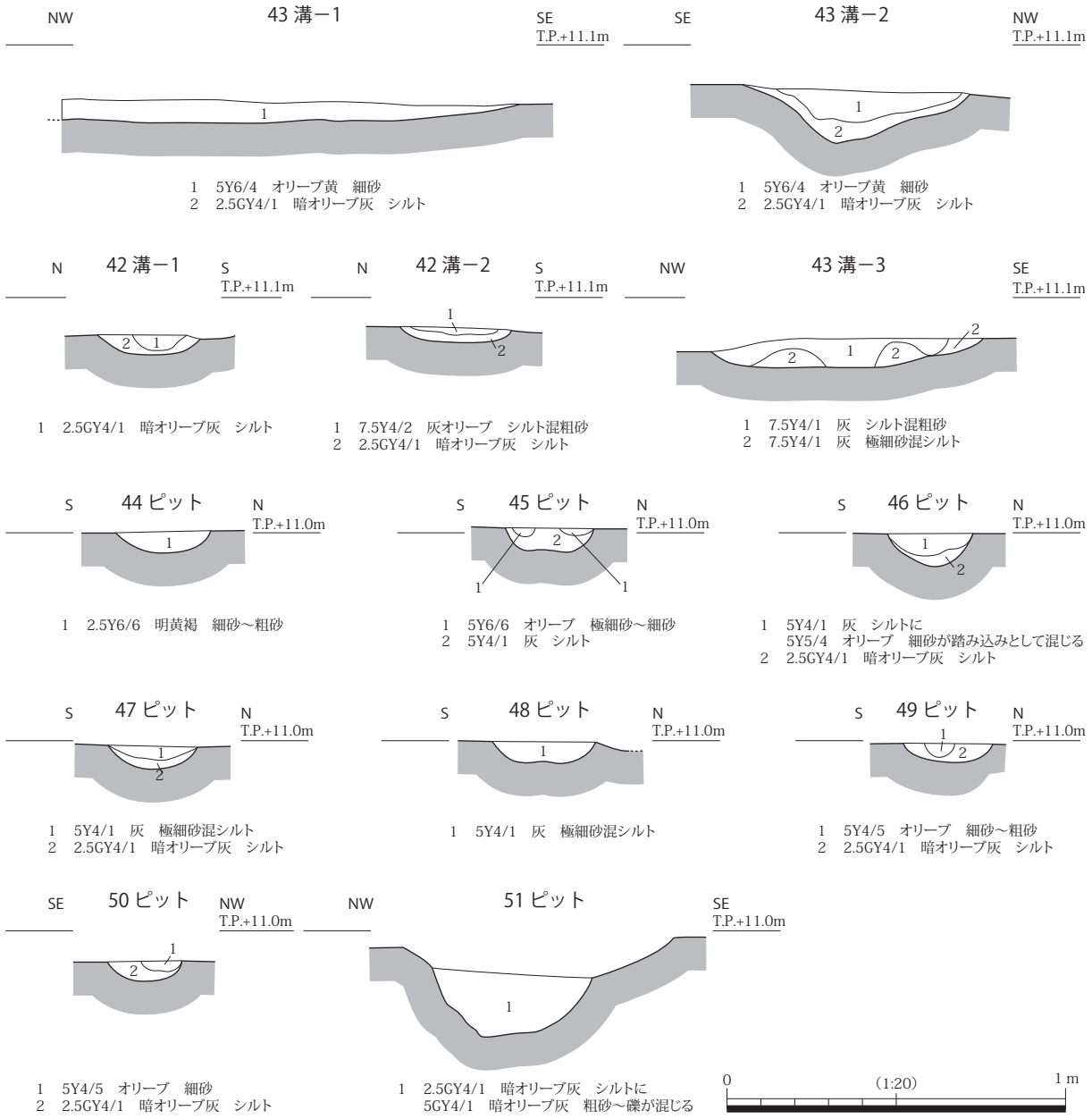


図 35　第 10 － 2 a 面遺構断面図

（3）遺物（図 36・37、写真図版 19・20）

65 ～ 70 は第 10 － 1 a 層～第 10 － 2 b 層から出土した須恵器である。

65 は 1 区の第 10 － 1 a 層から出土した杯蓋である。天井部のみ残り、口縁部は欠損する。天井はほぼ平坦で、中心には宝珠形の直径 3.0㎝のつまみを有する。稜線までは回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデ調整である。66 も 1 区の第 10 － 1 a 層から出土した杯蓋である。65 が平坦なのに対し、66 はドーム形の器形であるが天井部とつまみを欠損する。かえりはなく、口縁端部は平らだが、中央がわずかにくぼむ。回転ナデ調整である。65、66 とも平城Ⅲ型式、8 世紀中頃の所産と思われる。

67 は 1 区の第 10 － 2 a 面 42 溝及び第 10 － 2 a 層から出土した。須恵器杯蓋で、天井部と口縁部を欠損する。復元口径 14.0㎝、残存器高 3.1㎝をはかる。稜線や天井部の段が明瞭に残る事から 6 世紀前半のものと考える。

68 は 2 区の第 10 a 層・第 11 a 層から出土した。本来は杯蓋であるが、天井部内面が擦られて摩耗

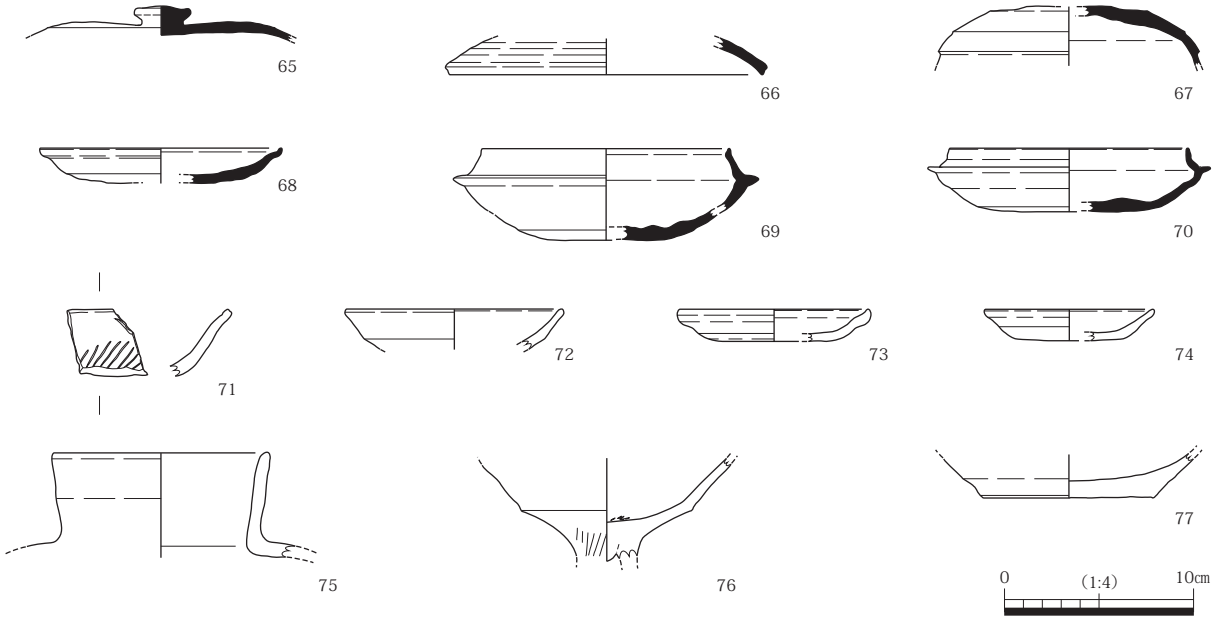


図 36　第 10 － 1 ａ層・第 10 － 2 ａ層他出土土器実測図

している事から、裏返して硯に転用したと考えられる。口縁先端は丸みを帯びる。平城Ⅶ型式、９世紀半ばのものと考えられる。

69 は 1 区の第 10 － 1 ａ層から出土した杯身である。口縁部のたちあがりは内傾し、端部は平らである。受部は短く、水平にのびる。底部外面は平らだが、内面は凹凸が激しい。ＴＫ 10 型式からＴＫ 43 型式、６世紀中頃のものである。

70 は 1 区の第 10 － 2 ａ層・第 10 － 2 ｂ層から出土した杯身である。立ちあがりは短く、内径したのち、垂直にのびる。口縁端部は丸く細い。受け部も細くやや上外方にのびる。口径、器高とも大きく、ＭＴ 85 型式、６世紀中頃のものである。

71・72 は 2 区の第 10 ａ面から出土した土師器杯と皿である。71 は小片であるが、体部内面下半に幅 1 ㎜の放射線状ミガキが 4 ㎜間隔で施される。平城Ⅲ型式、８世紀中頃のものである。

72 は小形の椀とした方がいいかもしれない。口縁部は上方にのび、端部は丸くおさめる。

73 は 1 区の第 10 － 1 ａ面 30 畦畔付近から出土した土師器皿である。口縁部は厚く肥厚し、口縁部と体部の境は、強いユビオサエによって屈曲する。74 は 3 区の第 10 ａ層から出土した土師器皿である。底部は平らで、底部から口縁部は外上方にのびる。口縁部はつまみあげ、端部は丸い。73、74 とも 10 世紀代のものか。

75 ～ 77 は 1 区の第 10 － 2 ａ層・第 10 － 2 ｂ層から出土した弥生土器である。75 は短頸壺の口縁部から肩部で、肩から垂直に頸部が立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。生駒西麓産の胎土で、弥生時代後期のものである。76 は高杯で、杯部上半から口縁部と脚部から台部は欠損する。摩耗しており調整不明だが、杯部と脚部の境にはタテハケメが認められる。77 は壺の底部である。内面に一部焼成時の黒斑があり、弥生時代前期のものと思われる。

78 は 1 区の第 10 － 2 ａ層・第 10 － 2 ｂ層から出土した台皿状石製品である。表面、内面に直径２、３㎜の気泡がみられ、一部を除き欠けや割れが生じている。図でアミフセした部分や側面は摩耗しており、凹状にくぼんでいる。78 を台として、すりつぶす、こねるといった作業により摩滅したと考えられるが、側面の摩耗は何かをあてがってこすった痕跡であろうか。時期は不明であるが、75 ～ 77 と

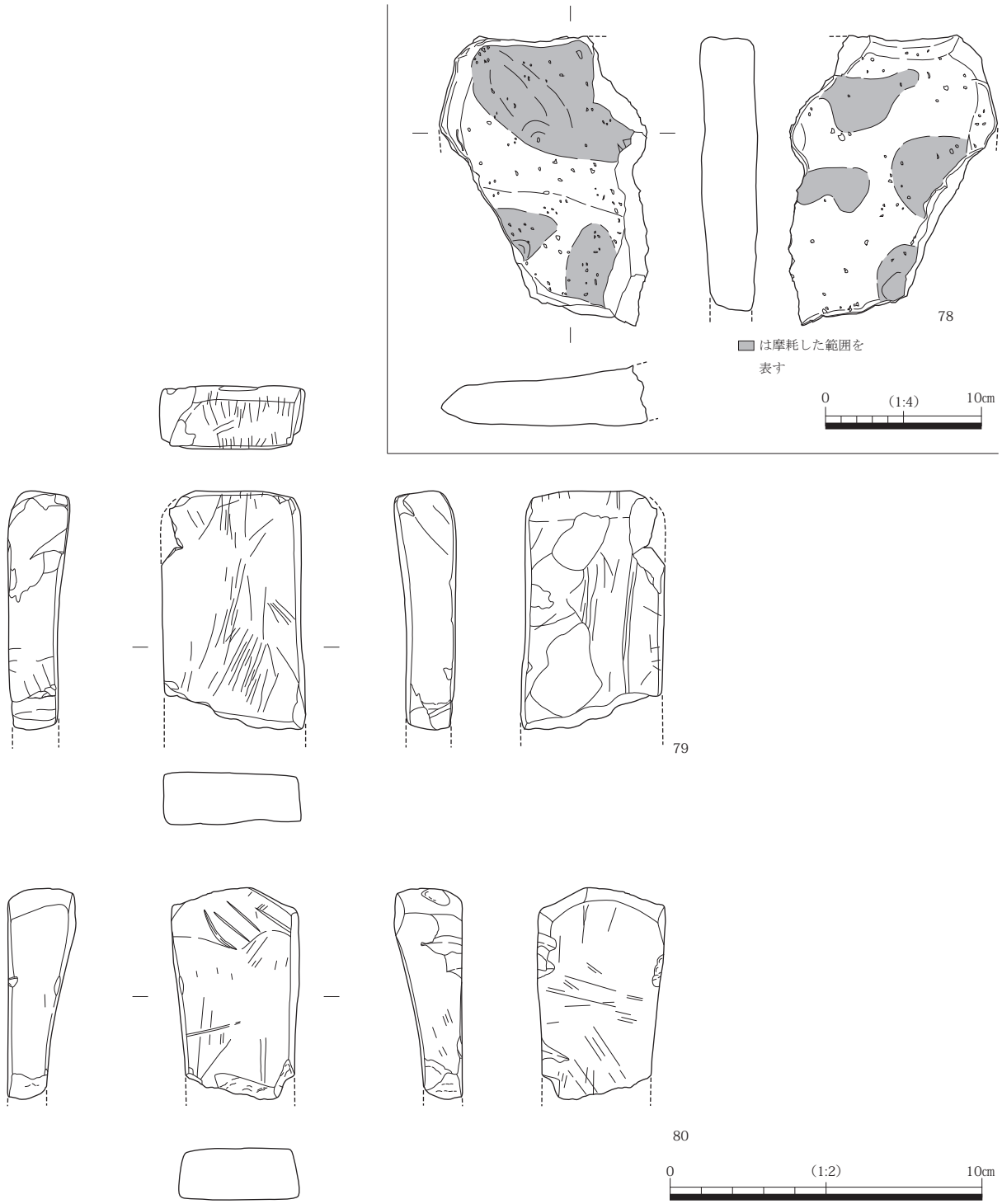


図 37　第 10 － 1 a 層・第 10 － 2 a 層出土石製品実測図

同層からの出土であるので、弥生時代以降、古代以前と言える。

79 は 2 区の第 10 a 層・第 11 a 層から出土した砥石である。表裏面だけでなく、上と左右の側面にも刃物による擦痕が多数認められる。特に表面は中心部分がくぼんでおり、かなり使い込まれて摩耗している。目の細かい砂岩製で、手に握れる程度の大きさであり、仕上げ砥と思われる。

80 は 3 区の第 10 a 層以下から出土した砥石である。表裏面、側面に多数の擦痕や研磨痕が残る。79 と似た法量であり、石材も同じ砂岩製で、仕上げ砥と思われる。

第 10 － 1 層・第 10 － 2 a 層は弥生時代、古墳時代と 8 ～ 10 世紀代の遺物を含んでいる。

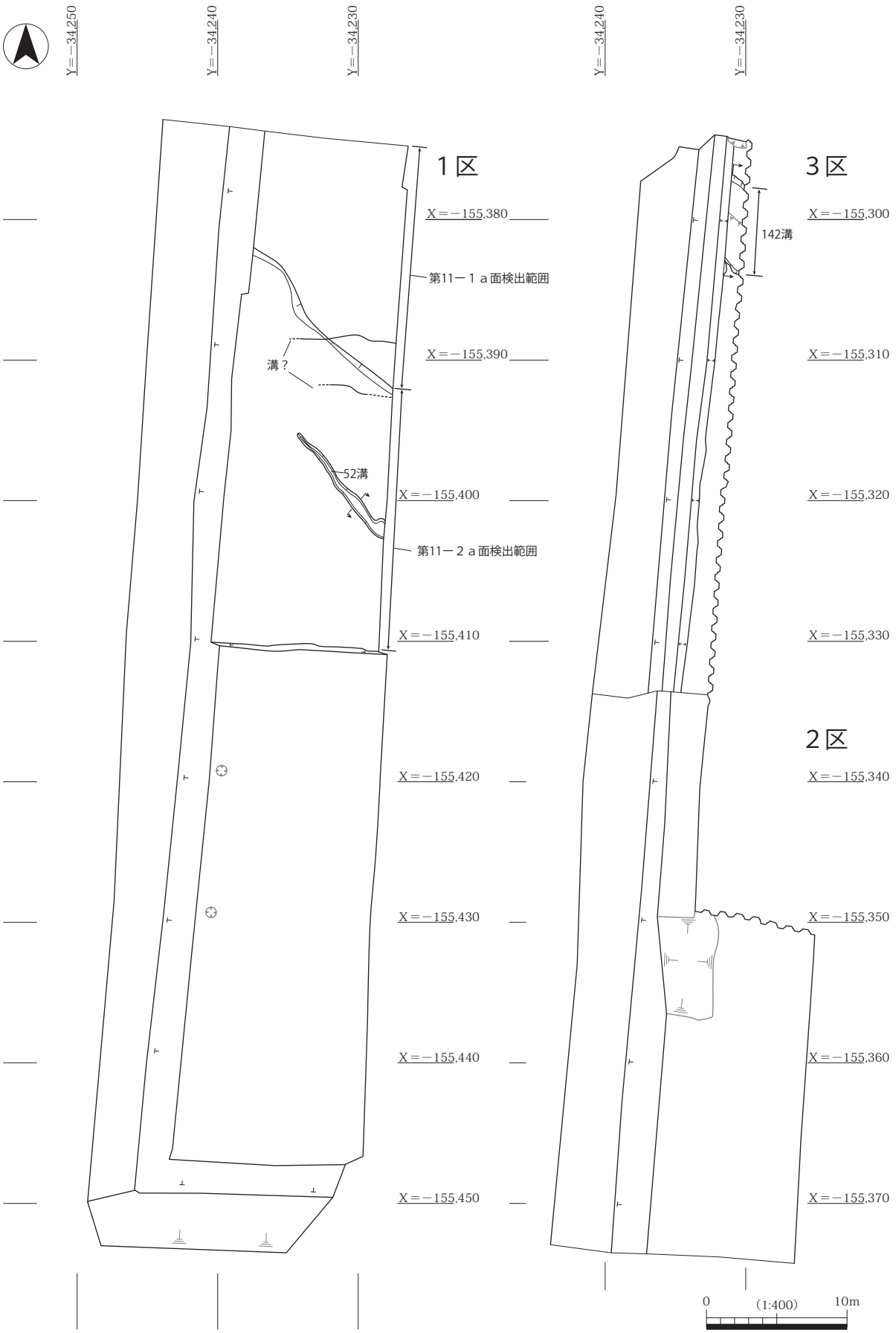


図 38　第 11 a 面平面図

第７節　第 11 ａ面・第 12 ａ面の遺構と遺物

（１）第 11 ａ面の遺構（図 38・39、写真図版 11）

第 10 －２ｂ層は付近が水域化して堆積した止水堆積層である。第 10 －２ｂ層に覆われた第 11 ａ層は黒色シルトをベースとする暗色帯層で、他層と識別が容易で鍵層となる。１区南半では第 11 －１ａ層と第 11 －２ａ層に分層可能であるが、第 11 －２ａ層の方がより黒色化し、有機物を含む。第 11 ａ層は長期間かかって堆積した古土壌層である。

２区では第 11 －１ａ層と第 11 －２ａ層の境界が曖昧となり、３区では分層できなかった。

遺構面の高さは１区で T.P. ＋ 10.7 m、２区で T.P. ＋ 10.8 ～ 10.9 m、３区で T.P. ＋ 10.9 mである。北から南へ徐々に低くなる地形をとるため、全域で第 11 ａ面を検出し得なかった。

第 11 ａ層は２層合わせて、南では約 0.1 mの厚さだが、北にいくにつれて 0.2 ～ 0.3 mと層厚が増す。１区の南端から３分の２は設計掘削深度より深くなるため、第 11 ａ面の調査を行っていない。そこで、図 38 で図示した箇所は、設計掘削深度より高い箇所のみ、第 11 －１ａ面を調査した。その後、X ＝ － 155,405 付近までは設計掘削深度より高かったので第 11 －１ａ層を掘削し、第 11 －２ａ面の遺構として 52 溝を検出した。つまり、１区のみ第 11 －１ａ面と第 11 －２ａ面が混在するが、あわせて第 11 ａ面として報告し、２区と３区は第 11 －１ａ層上面を第 11 ａ面とした。

52 溝（図 39）　１区北半で北西－南東方向に斜行する 52 溝を検出した。北西－南東を主軸とし、調査区中央で途切れる。検出長約 10.0 m、幅 0.8 m、深さ 0.1 mをはかる。52 溝は（その５）・（その６）調査区の第 11 －１ａ面で検出した溝の続きと思われる（図 45）。また、52 溝の北で幅 4.0 mの東西方向の溝状の痕跡を検出するが、これも（その５）調査区で検出した溝（流路）の続きと思われる。

142 溝（図 39）　３区は調査区東西幅が 1.0 mと狭小であるが、北端で 142 溝を検出した。

142 溝は主軸を北西－南東とする溝で、南北幅 6.0 m、北端から 2.8 mまでは深さ 0.1 mをはかるが、そこから南は一段深くなり、深さ 0.2 mをはかる。

２区は調査を行っていないが、第 12 ａ面で検出した 56 ～ 58 溝やその上面の土坑が、第 11 ａ面の下面遺構となる可能性がある。

第 11 ａ面ではこれまでの耕作遺構は消失し、自然地形に沿って溝を検出した。第 11 ａ面は、弥生土器や古墳時代、古代の須恵器などを含む事から、古代以前の遺構面と考えられるが、詳細な時期は不明である。遺物量としては、弥生時代のものが多い。

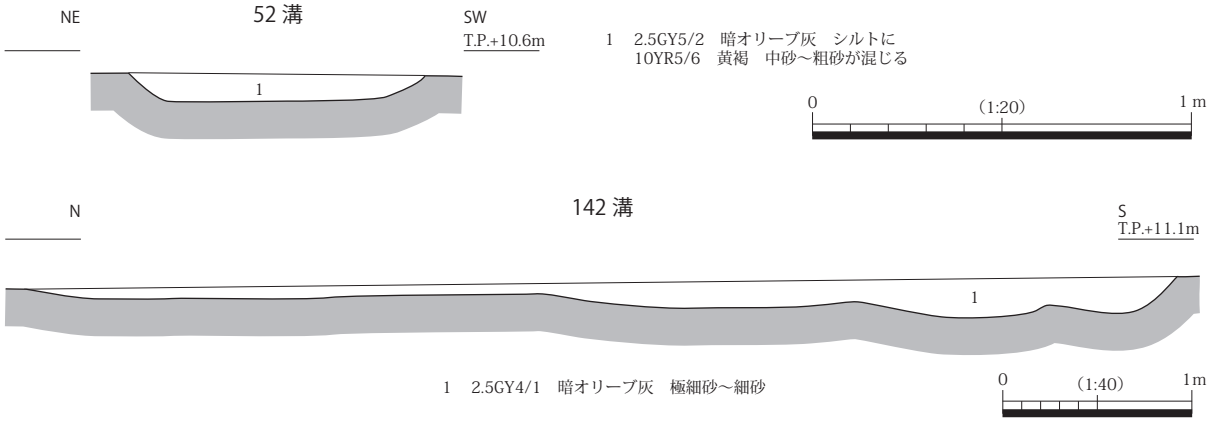


図 39　第 11 ａ面遺構断面図

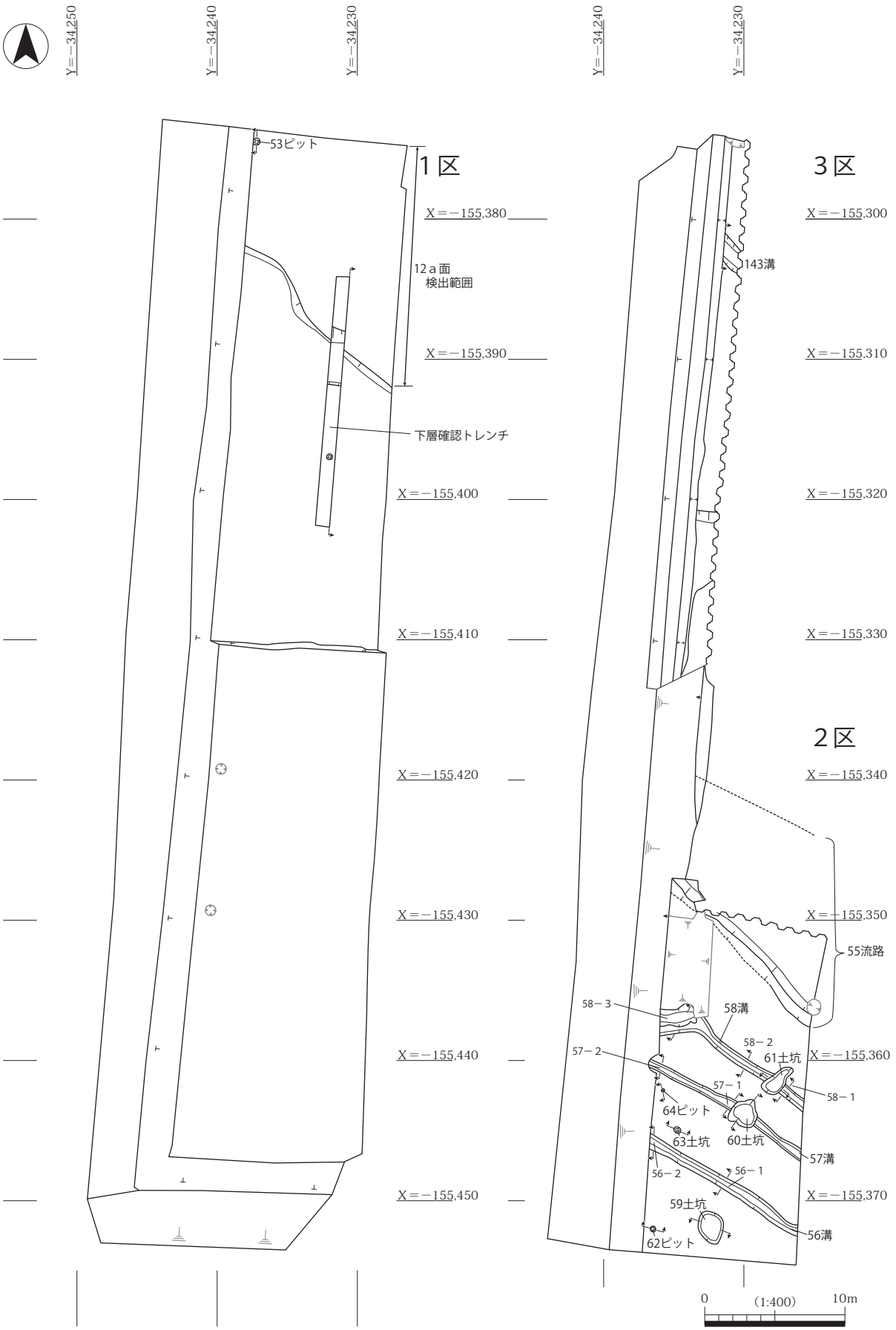


図 40　第 12 a 面平面図

（２）第 12 a 面の遺構(図 40～ 42、写真図版 12・13)

第 12 a 層は青灰色シルトをベースとする層で、第 12 a 層以下は遺物を包含しない無遺物層となるため、第 12 面を最終遺構面と捉える。

１区は第 11 a 面同様に、第 12 a 面を検出し得たのは X ＝－ 155,390 以北にとどまり、北西端で 53 ピットを検出した。また、（その５）・（その６）調査区で検出された溝（流路）が、（その７）調査区まで続いているか確認するため、X ＝－ 155,384 ～－ 155,402 の南北約 18.0 mにわたって、幅 1.0m の下層確認トレンチを設定した。このトレンチでは第 11 a 面、第 12 a 面で調査を行い、第 11 a 面では遺構を検出しなかったが、第 12 a 面で溝状遺構やピットを確認した。

２区から３区にかけて、（その６）調査区からのびてくる大規模な 55 流路を検出した。他に２区では 56 ～ 58 溝、土坑、ピットなどを、３区は北端で 143 溝を検出した。

遺構面の高さは１区で T.P. ＋ 10.4 ～ 10.5 m、２区で T.P. ＋ 10.5 ～ 10.7 m、３区で T.P. ＋ 10.6 ～ 10.7 mである。１区から２区へと高くなり、２区では南から 55 流路に向けて低くなり、55 流路を過ぎて北の３区に入ると再び高くなる。高低差があるなかでも２区の低地部に遺構が集中する。

53 ピット（図 41）　１区の北西端では 53 ピットを検出した。直径 0.5 m、深さ 0.2 mをはかる円形のピットである。第 11 a 層と第 12 a 層の土が攪拌された土が埋積する。

１区の X ＝－ 155,390 以南では、第 11 a 層の途中で設計掘削深度に達したため、第 11 a 面を最終面として第 12 a 面の調査を行っていない。下層確認トレンチで検出した溝状遺構やピットは、自然地形のくぼみや落ちと考えられる。

56 ～ 58 溝（図 41）　２区では北西－南東を主軸とする 56 ～ 58 溝を検出した。各溝とも調査区を斜行して横切り、さらに調査区外へのびていく。３つの溝は並行しており、その間隔は 56 溝と 57 溝が 4.5 m、57 溝と 58 溝が 2.5 mである。

56 溝は検出長 12.5 m、幅 0.65 ～ 0.85 m、深さ 0.3 ～ 0.35 mをはかる。断面は逆台形を呈し、３層の土が水平に堆積する事から、比較的長期間機能していたと考えられる。

57 溝は検出長 13.0 m、幅 0.75 ～ 0.8 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈し、単層の土が堆積する。60 土坑に切られる。

58 溝は検出長 12.0 m、幅 0.6 ～ 1.85 m、深さ 0.1 ～ 0.35 mをはかる。断面は皿形を呈し、幅が狭い個所では単一層の土が、幅広の部分では段落ちになって数層が堆積する。61 土坑に切られる。他の溝が直線的なのに対し、58 溝は水流が緩やかなためか、西側で幅広になる。

壁断面を観察すると、これらの溝は第 11 a 面から切り込んでおり、第 11 a 面の遺構を第 12 a 面で検出したと言える。隣接する（その５）・（その６）調査区を斜めに走る溝と規模が合致し、位置的にも連続する。（その６）調査区東端から計測すると全長 80.0 m以上の長い溝である（図 44）。

また、主軸の方向が北に位置する 55 流路や、さらにその北の（その１）調査区で検出した溝群とも同じであり、これは南東から北西に向かって低くなる自然地形によって、水流が微低地に集まった結果と言える。

62・64 ピット、63 土坑（図 41）　２区の南東で検出した小形のピットもしくは土坑である。

62 ピットは直径 0.35 m、深さ 0.2 mをはかる。63 土坑は直径 0.5 m、深さ 0.3 mをはかり、断面逆台形を呈する。64 ピットは直径 0.25 m、深さ 0.05 mをはかる。底部の凹凸が著しい。

59 ～ 61 土坑（図 42）　２区南半で検出した、やや大形の土坑である。59 土坑は隅丸方形の土坑で、

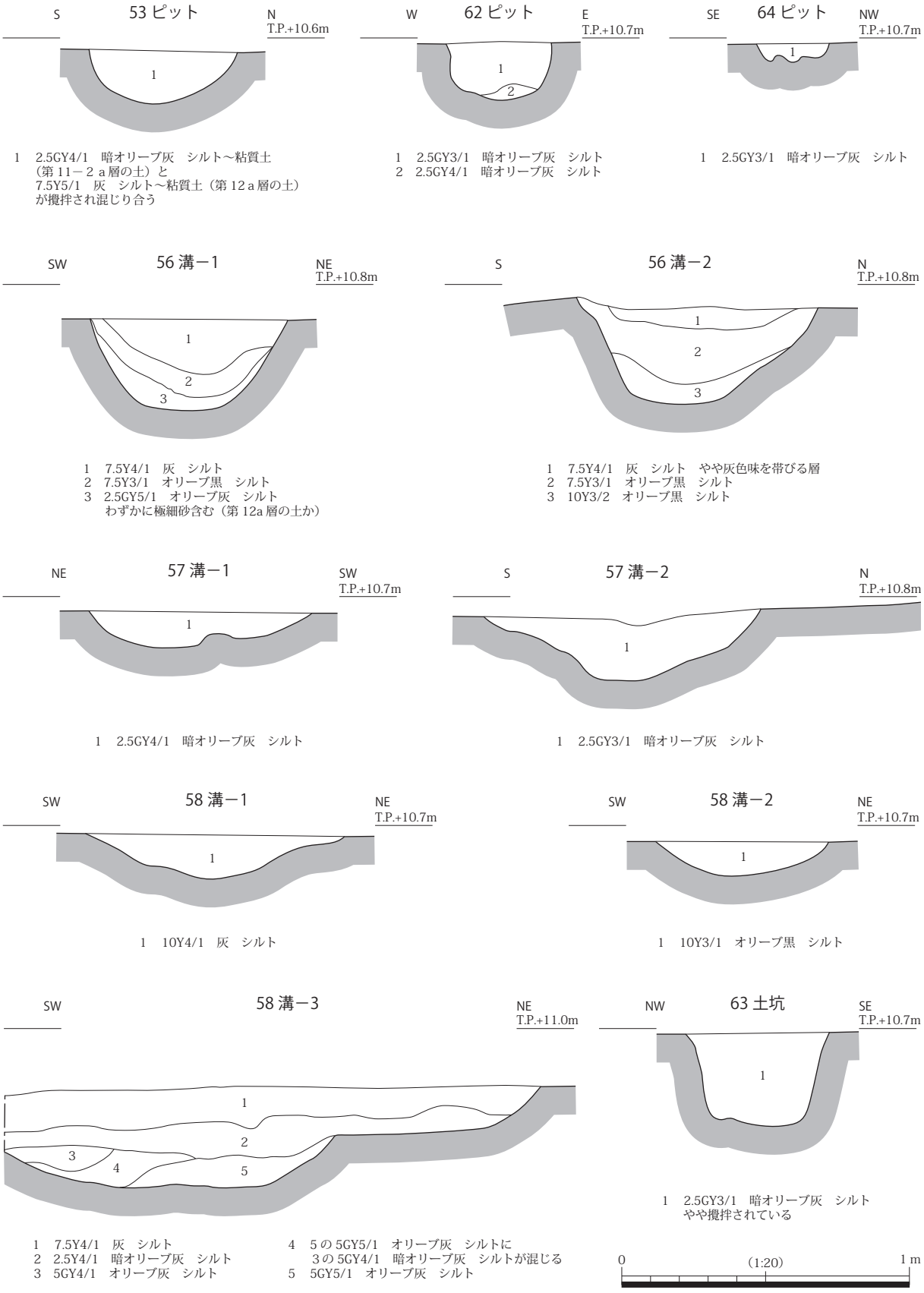


図 41　第 12 ａ面遺構断面図－１

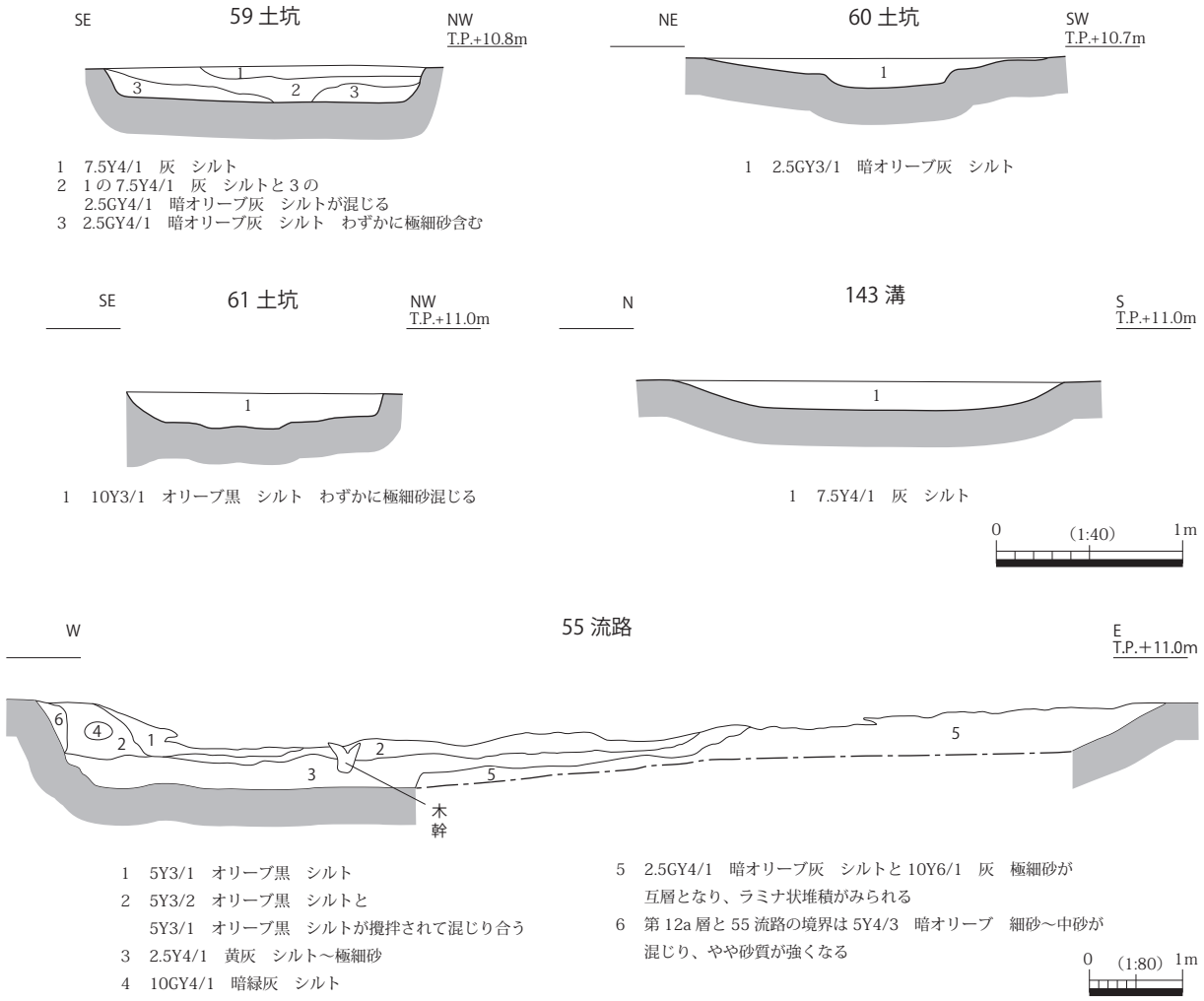


図42　第12ａ面遺構断面図－２

長辺 1.7 m、深さ 0.2 mをはかる。断面逆台形を呈する。

60 土坑は不整円形の土坑で、直径 1.9 m、深さ 0.15 mをはかる。断面逆台形を呈する。57 溝を切る。

61 土坑は長円形の土坑で、直径 1.25 m、深さ 0.2 mをはかる。断面皿形を呈する。58 溝を切る。隣接する（その５）・（その６）調査区でも同様の土坑が検出されているが、用途、機能は不明である。

55 流路（図 42）　２区北端から３区にまたがって 55 流路を検出した。55 流路は、（その６）調査区で検出した流路の延長と考えられ、北西から南東に主軸をもつ大規模な流路である。地形に即して、南東から北西に流れていたと考えられる。

２区と３区で検出したが、幅が 10.0 m、深さ 1.0 m以上をはかる。３区では調査区幅が狭小となるため平面形はほとんど確認できず、調査区の法肩断面で 55 流路の川幅を確認した。55 流路は隣接する（その６）調査区の流路が延伸してきたもので、（その６）調査区東端からはかると全長 80.0 m以上となり、さらに調査区を抜けて西へとのびてゆく（図 44）。上層にはオリーブ黒色シルトが堆積し、下層になると暗緑灰色や灰色のシルト～極細砂がラミナ状に堆積する（写真図版 13 － 3）。最下層には有機物を含む茶褐色シルトから粘質土が堆積していた。

最下層中から、縄文時代晩期前半から弥生時代前期の土器が少量出土する。（その６）調査区の流路では、縄文時代晩期の土器と共に、古墳時代の土器も含まれるようである。よって、縄文時代晩期から機能していた流路であるが、廃絶時期は弥生時代前期か、さらに新しい古墳時代となるかは不明である。

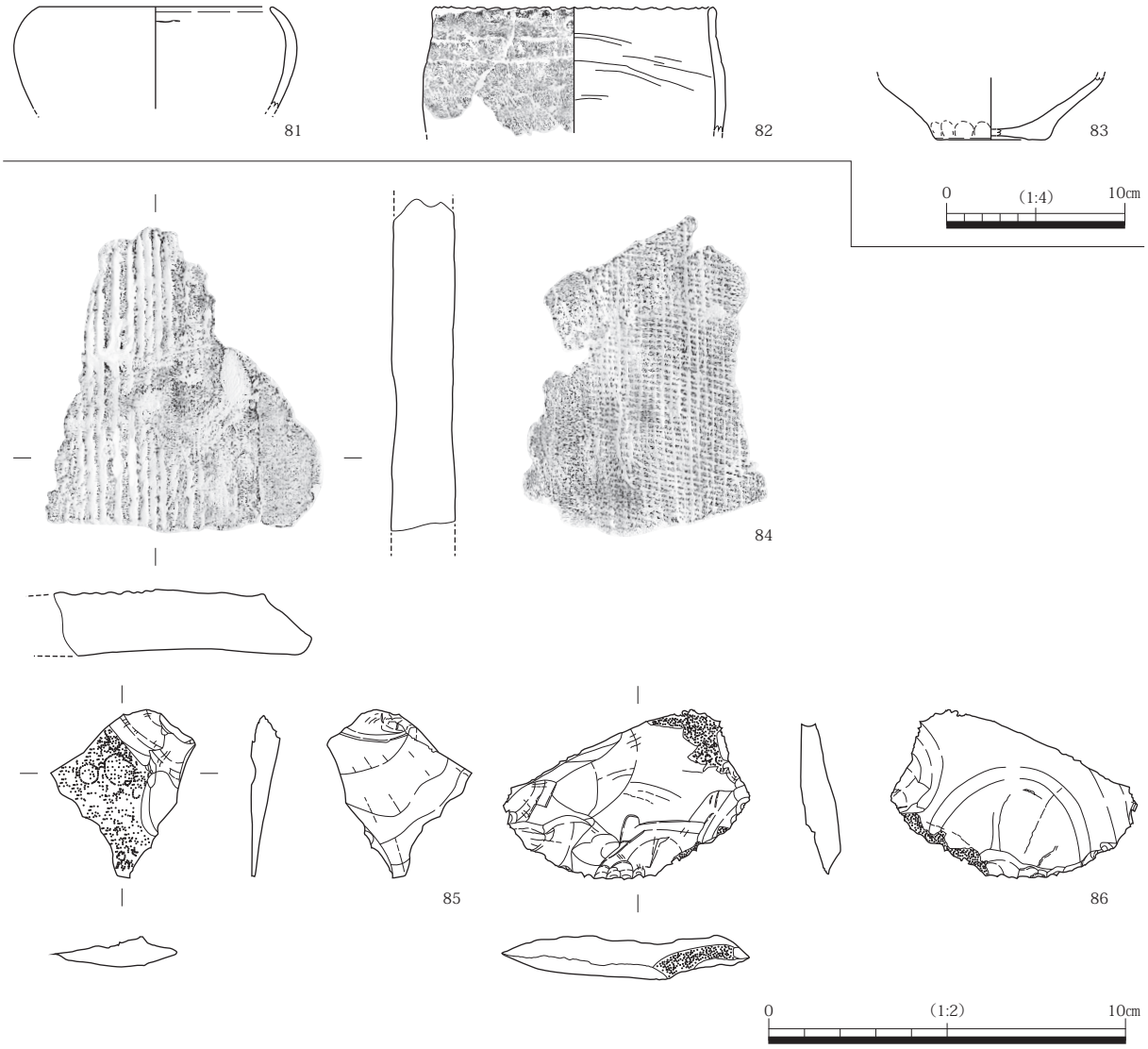


図 43　第 11 a 層・55 流路出土遺物実測図

143 溝（図 42）　3 区では北端で北西－南東を主軸とする 143 溝を検出した。幅 2.0 m、深さ 0.15 mをはかる。隣接する（その 1）調査区の溝の延長となる溝で、合わせて 100 m以上の長さとなる。

第 12 a 面では、流路や溝などを検出した。上層包含遺物や 55 流路出土遺物から、縄文時代晩期から弥生時代の遺構面と考える。

（3）遺物（図 43、写真図版 19・20）

81 は 1 区の第 11 － 1 a 層から出土した弥生土器鉢であり、底部を欠損する。胴部の最大径が器高の中心よりかなり上にあり、そこから内傾する口縁部は細く、先端は丸い。剥離が著しく外面の調整は不明だが、内面はナデと思われる。器形から、弥生時代前期のものと思われる。

82・83 は 2 区の第 12 a 面 55 流路から出土した。

82 は縄文土器深鉢である。体部下半から底部は欠損する。口縁部からわずかに膨らむが、ほぼ垂直に下にのびる。口縁部は波状口縁、外面は口縁部と胴部の境に、口縁部と平行する沈線を 2 条巡らす。胴部外面には右斜め下がりの貝殻条痕をもつ。胴部内面は板状工具によるナデで、工具痕が残る。胎土には、石英やクサリ礫を含む。

縄文時代晩期前半、滋賀里Ⅲ b 式～Ⅳ型式のものである。（その 1）・（その 2）調査区の河川堆積層

や土坑などの遺構から、縄文時代晩期、滋賀里式や船橋式の土器が一定量出土している。事業地西側北半のみならず、南半でも縄文時代晩期の土器が出土した事は、当該期に広い範囲で人が活動していた事の証左となる。

83 は弥生土器壺底部である。底径 6.8㎝で、底部に胴部を貼り付けた際のユビオサエがみられる。体部は摩耗のため調整は不明である。器形からは、弥生時代前期のものか。

84 は 3 区の第 11 層から出土した平瓦である。3 方向は欠けるが、狭端面は残る。凸面には縄状のタタキ痕が、凹面には布目痕が残り、側縁はケズリ後ナデ消している。古代の瓦であるが、詳細な時期は不明である。

85・86 は 1 区の第 11 － 1 a 層から出土した。85 はサヌカイトの剝片で、石核から剥離した後、加工されていない。

86 もサヌカイトで、石器の未製品である。スクレイパーなどに加工途中のものか、下端を細かく打ち欠き刃部を作り出そうとした痕跡がみられる。

第 3 章　遺物に関しての参考文献

家根祥多 「晩期の土器　近畿地方の土器」『縄文文化の研究　縄文土器Ⅱ』 1981　雄山閣

『須恵器のものさし』 2006　大阪府立近つ飛鳥博物館編

中村浩 『須恵器集成図録 1 』近畿編　1995　雄山閣

『古代の土器Ⅰ　都城の土器集成』 1992　古代の土器研究会編

『概説　中世の土器・陶磁器』 1995　中世土器研究会編　真陽社

小森俊寛・上村憲章 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』 第 3 号　1996　(財) 京都市埋蔵文化財研究所

青木修 「片口鉢の研究－中世知多古窯跡群を中心として－」『(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』 第 1 輯　1993　(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター

『愛知県史　別編　窯業 3　中世・近世常滑系』 2012　愛知県史編纂委員会

横田賢次郎・森田勉 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として」 1978 『九州歴史資料館研究論集』 4

「天神畑（てんじんばた）遺跡出土の鎌倉時代の轡（くつわ）について」2011. 7　(財) 滋賀県文化財保護協会報道提供資料

第４章　総括

第１節　遺構面の変遷

第３章第２節では、調査を開始した第３ａ面から最終面の第 12 ａ面まで、各遺構面の調査結果を検出遺構、出土遺物からみてきた。

(その７) 調査区の調査をもって、事業予定地西半の調査は大部分が終了した事となる。

当調査区は恩智川沿いの南北に長い狭小な区域でもあるので、当調査区だけでは遺構のつながりが不明瞭な部分もある。また、恩智川の堤防造営や越流による浸水、削平などによって、遺構面の残存状況が良好ではなかった。そこで、隣接する調査区も含めてこれまで調査した全域を概観する事で、遺構面の変遷を追いたい（(その６）調査区については、（その７）調査区と同時期に発掘調査を終了し、当センター報告書としての刊行が予定されているため掲載した)。

（１）縄文時代晩期以前（図 44）

第 12 ａ面もしくは第 12 ｂ面が相当する（(その２）調査区のみ遺構面の呼称が他と異なるため、第９面下面が第 12 面に相当する)。

第 10 ａ面より古い遺構面では畦畔などは検出されず、耕作地としての利用はされていなかったと判明している。

第 11 ａ面と第 12 ａ面で検出される遺構は、溝や流路等である。北東が高く、南西が低い地形であるため、水流も自然地形に沿って北東から南西へと流れる。

（その７）調査区では、２区から３区の南端にかけて、遺構を集中して検出した。なお、１区は第 12 ａ面が掘削深度より低くなるため、調査を実施しておらず不明である。

（その７）調査区で検出した 55 流路は、（その６）調査区から続いて西にのびており、その全長は 80.0 m以上に及ぶ。

55 流路内から出土した遺物は、縄文時代晩期前半から古墳時代のものを含む事から、長期間存続した事がうかがえる。55 流路より南の（その６）調査区では、多数の溝が 55 流路と切り合いながら、放射線状に広がっている。

（その２）調査区の第９面では、北東部の微高地で竪穴住居２棟や土坑、ピットなどが検出され、居住域だったと想定されている。縄文時代晩期の滋賀里式、船橋式、長原式の土器が出土している。

（その１）調査区では、図 44 の第 12 ａ面より

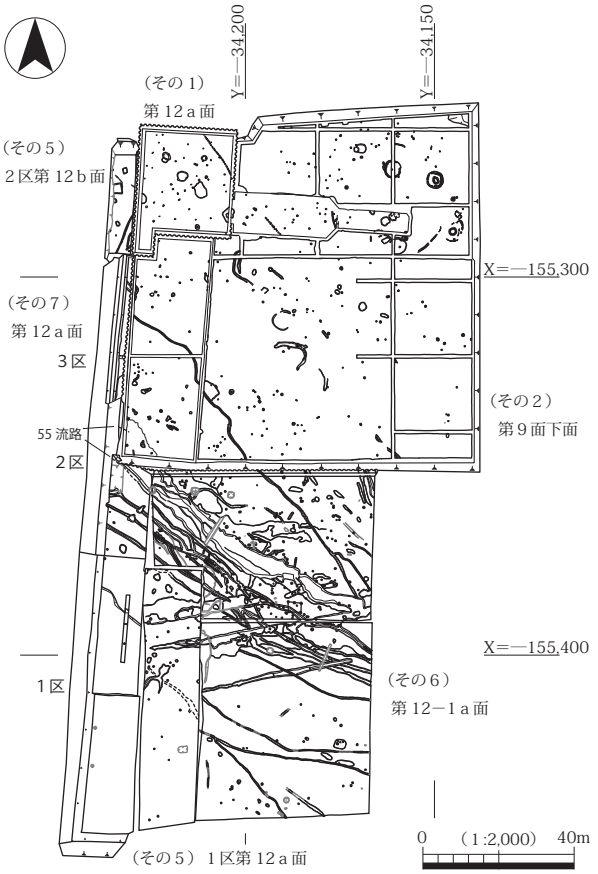


図 44　第 12 ａ面合成平面図

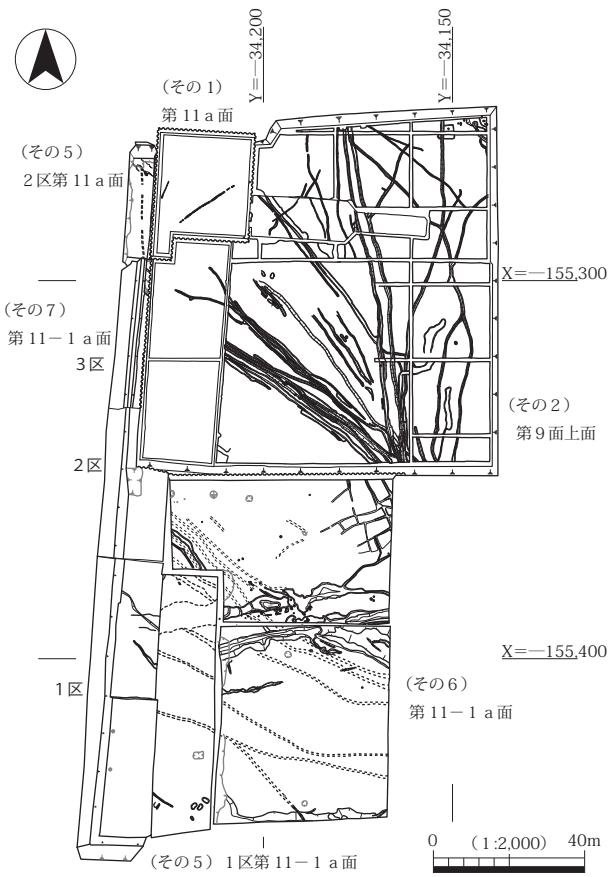


図45　第11ａ面合成平面図

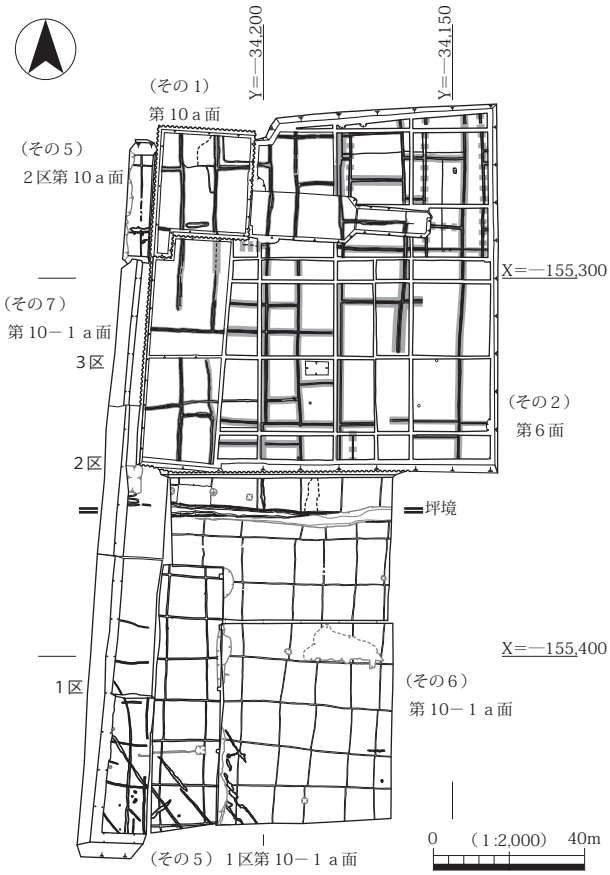


図46　第10ａ面合成平面図

古い段階の遺構面も調査しており、河川（第14ｂ層）の堆積層からは縄文時代晩期前半から中葉の滋賀里式土器や石器などが出土している。河川の堆積有機物や縄文土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定では、縄文時代後期末から晩期中葉の年代が示されている。

これらの事から、縄文時代後期には図44の区域の主に北東部で、人が居住していたと考えられる。なお、当遺跡より上流の大県遺跡でも縄文時代後期末～晩期中葉の集落が確認されている。

河川は縄文時代晩期中葉には埋没したものが多いが、55流路のように弥生時代前期か古墳時代まで機能していた可能性を持つものもある。

北東部の微高地では居住域が形成された。微高地より南西では、多数の溝やピットがみられるが、植物珪酸体分析からもヨシが生育する湿潤な低地だったとされ、人間が居住する環境ではなかったと考えられる。

（２）弥生時代～古墳時代（図45）

第11ａ面もしくは第11－１ａ面が相当する（（その２）調査区では第７面～第９面上面が相当する）。

（その２）調査区では、南東から北や北西に流れる溝が多数検出される。（その２）調査区南東端で、ほぼ同位置から出る溝は放射線状に広がるが（その１）調査区まで到達し、検出される溝はわずかである。各溝は同規模で、幾重にも切り合っている。

縄文時代晩期同様、自然地形に沿って南東から北西に流れるかたちで溝が形成されたと思われる。

（その５）・（その６）調査区では、東から西に流れる溝や流路を検出している。また、（その６）調査区の北東部、（その２）調査区と接する区域では、部分的であるが小区画畦畔を検出している。

（その７）調査区では、東からの溝の延長が検出されるが、それ以外の遺構は検出していない。１区では第10面、第11面間で洪水に起因する砂層（第10－２ｂ層）の堆積が厚い。

弥生時代前期から古墳時代の遺物が少量ではあるが出土しており、第 11 面から第 12 面までは、当遺跡周辺に人が往来していた事が判明した。

（３）古代（図 46）

第８ａ面から第 10 ａ面が相当するが、（その７）の調査では、第８ａ面と第９ａ面は遺構面調査を実施していないため、第 10 ａ面のみ掲載した（（その２）調査区では第６面が相当する）。ただし、（その 2）・（その６）調査区では、第８ａ面や第９ａ面でも第 10 ａ面同様の南北長地型、あるいは格子状の水田区割を検出している。

第 10 ａ面は、ほぼ全域で遺構を検出している。

（その５）・（その６）調査区では、１辺 10.0 m四方の格子状の水田区画がみられる。ところが、（その１）・（その２）調査区にいくと南北の畦畔の間隔が約 20.0 mと長くなり、水田区画は正方形の格子状地割から長方形の南北長地型へと変化する。

北半では、水田区画は長方形を基本とするが、南北の畦畔が主畦畔となり、その間をつなぐ東西の畦畔は同一線上を通らない段違いになっている。畦畔は真方位にのっており、条里制に基づく地割であることは疑いない。

（その７）調査区では南端から約 60 mにわたっては東西畦畔が確認されるが、南北畦畔の検出が少なく格子型地割になるかは不明である。また、畦畔を切って斜行する溝が（その７）・（その６）調査区南西で認められる。

第 10 ａ面からは飛鳥時代から平安時代中期までの遺物が出土しており、10 世紀中頃までには条里制が施行されていたと考えられる。条里型地割が成立し、小区画から長地型へと地割が整備されてきたと思われれる。調査区全域に水田区画がみられるので、耕作地としての利用が進んだ事がうかがえる。

（４）中世（図 47 ～ 49）

第３ａ面から第７－４ａ面が中世に相当する。第７－１ａ～第７－４ａ面が中世前半期、第３ａ～第６ａ面が中世後半期と考えられる。

第７－４ａ面では、北半は残存状況がよくないため地割が不明だが、南西部では東西長地型の区割が確認された。特に、（その６）調査区では東西、南北の畦畔が検出されており、一筆の区画は南北 10.0 m、東西 25.0 mである。

第７－１ａ面は坪境にあたる X ＝－ 155,360 付近に旧恩智川があり、それを境に調査区南半は東西長地型、調査区北半は南北長地型と地割の方向が明確に分かれる（図 47）。ただし、南半は交差する畦畔がわずかしか検出できず、一筆の区画は不明である。畦畔と畦畔の間隔は 11.0 mだが、やや不均等な印象を受ける。また、畦畔以外には

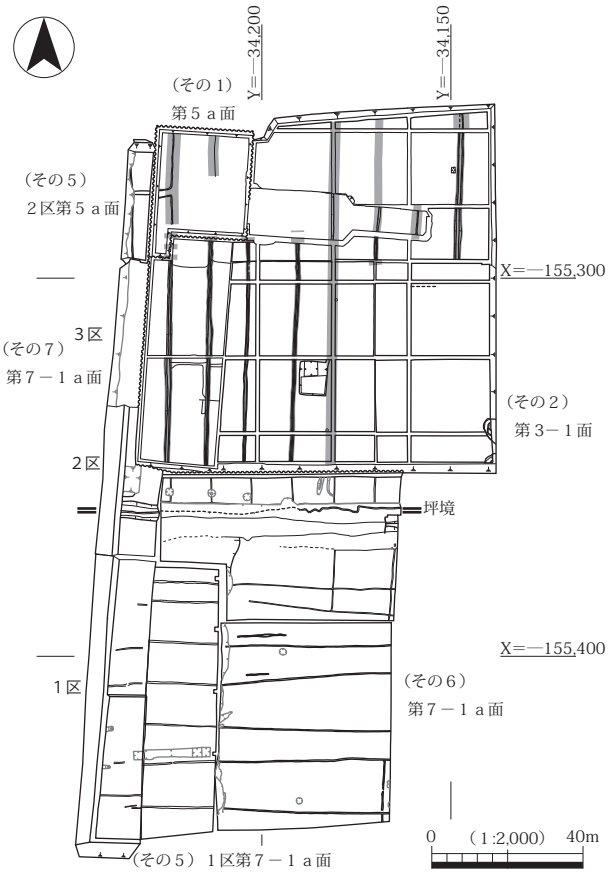


図 47　第７－１ａ面合成平面図

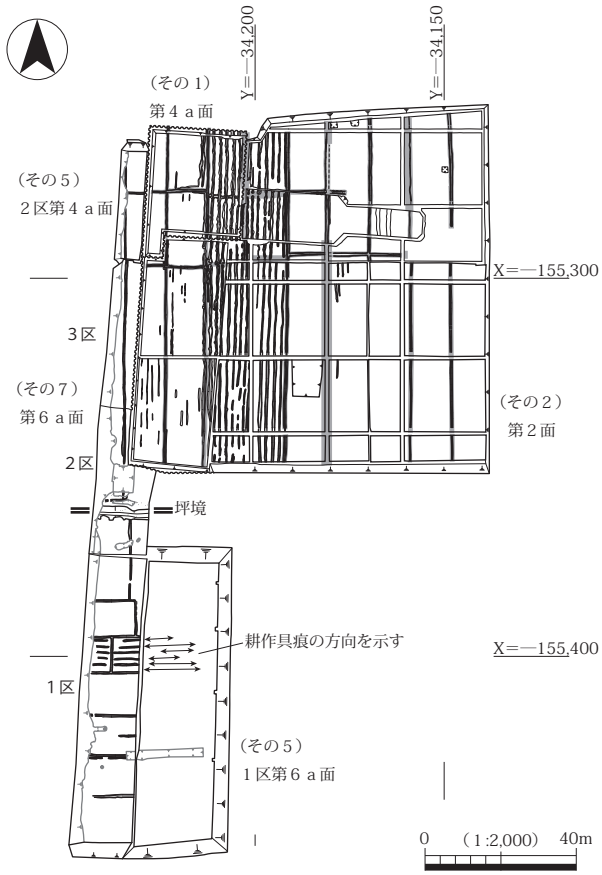


図 48　第６ａ面合成平面図

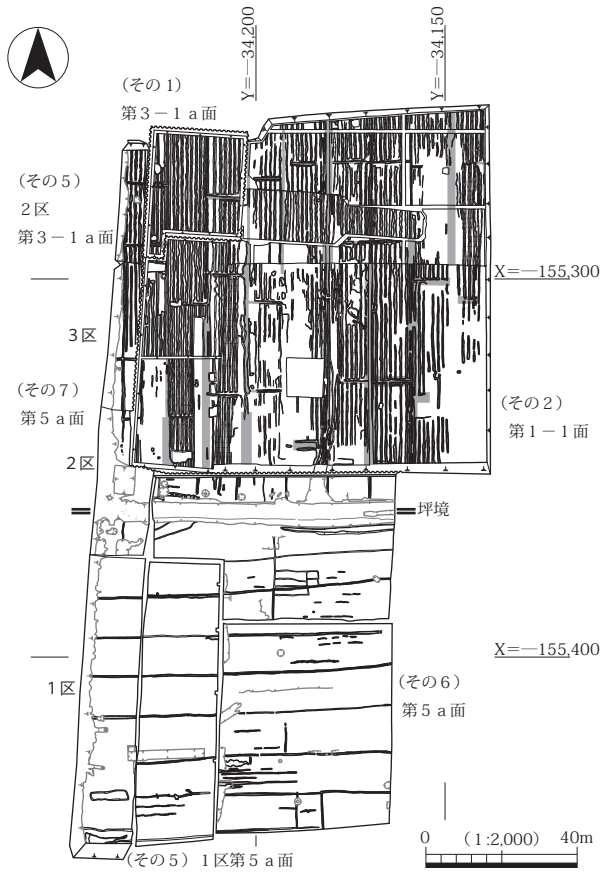


図 49　第５ａ面合成平面図

畝溝等は認められない。

（その７）調査区では、南側の１区で東西畦畔の痕跡が部分的に認められたのみである。

第６ａ面は、区域南半の（その５）・（その６）調査区では調査や報告がされていないため、詳細が不明であるが、上層の厚い砂層（第５ｂ層）に覆われていた結果、東西方向の耕作具痕や足跡が検出されている（図 48）。

（その７）調査区では、１区から２区坪境辺りまでは、疎らであるが東西の畦畔とそれに交差する南北畦畔、その畦畔に囲まれた区画の中に東西方向の畝溝が確認できる。東西畦畔の間隔は約 10.0 ｍだが、南北畦畔は２本検出したのみで四方を畦畔で囲まれた区画は検出できていないため、一筆の区画は不明である。

坪境よりやや北のＸ＝－ 155,370 以北や３区になると、南北畦畔とそれに平行する南北の溝が検出されるが、東西畦畔は検出されない。

北東部の（その１）・（その２）調査区、（その５）調査区の２区では南北畦畔が主畦畔となり、それに交差する東西畦畔も部分的にみられる。水田一筆の区画は南北 20.0 ｍ、東西 10.0 ｍである。一筆の区画内には、2.0 ｍ間隔で５本程度の畝溝が均等に並ぶ。

第７－１ａ面、第７－４ａ面と同じく坪境より北は南北長地型、南は東西長地型の地割で、部分的に畝溝がみられる事から、水田から畠への一部転作も考えられる。第６ａ面は出土遺物から 13 世紀後半から 14 世紀代の遺構面と考えられる。

第５ａ面では全域から長地型の地割が検出された（図 49）。

区域南半、（その５）・（その６）・（その７）調査区のＸ＝－ 155,360（坪境）付近を境として、その北と南で地割の方向が変化しているのが明瞭である。

南半は東西に長い地割で、東西畦畔の間に南北畦畔がＹ＝－ 34,190 ～－ 34,200 間までは認められる。それ以外では南北畦畔は消失する。また、

畝溝になると思われる東西方向の溝もわずかに認められるが、北半に比べると、遺構の残存状況がよくない。

坪境より北の北半では、南北長地型の地割に変わる。南北、東西の畦畔とも検出され、一筆の区画は南北 35.0 ～ 38.0 m、東西 10.0 mである。北半はほぼ全域で一筆の区画の中に、南北方向の畝溝が密にみられる点が、南半と大きく異なる。畝溝は一筆の区画内に、およそ 0.1 ～ 0.15 m間隔で 8 本程度が均等に並ぶ。

第 5 a 面はほぼ全域で耕作遺構が広がり、坪境を境に南北長地型から東西長地型への区画割の変化が明瞭である。土地利用のあり方も北半は畠、南半は水田と異なってくる。低いところを水田に、高いところを畠にしたとも推測されるが、南北で地表面の高低差はさほどない事から、利用目的の違いは他の要因もあると推測する。

第 5 a 面は中世後半期、15 世紀前半代の遺構面と考えられる。第 5 a 面が耕作の区画割が確立した一つの画期と捉える事ができる。

第 3 a 面から第 4 a 面にかけても、東西長地型の水田や、その中に部分的に畝溝は検出されているが、北半の（その 1）・（その 2）調査区の詳細が不明である。その上層の近世期にあたる第 2 面では、島畠が確認されている。

縄文時代晩期には微高地を利用して一部では居住域が形成されたが、それ以外は河川や溝などが主であった。それ以降も弥生時代から古代のある時期までは、近隣に人が住んでいた痕跡は追えるが、明確な居住域や生産域は検出されず、その縁辺部だった可能性が高い。

第 10 a 面以降になると、いずれの遺構面でも南北、東西の畦畔は、現在の座標値の真方位にほぼ平行な位置に造られている。10 世紀には条里制を意識した土地区画割が成立し、12 世紀から 15 世紀には条里型水田が完成する遺構面の変遷を追う事ができた。当地では古代から近世まで連続して、広範囲に耕作されていた生産域であった事が判明した。今回の調査は、これまでの大県郡条里遺跡の調査成果を裏付け、より補強したと言える。

第２節　大県郡条里遺跡出土の蓮華文軒丸瓦

今回の調査では、上層面からではあるが、古代の蓮華文軒丸瓦が１点出土した（図 50 － 1）。

瓦当のごく一部のみの出土であり、残存状況は良くない。また、出土層位も中世後半期の包含層であるため、機能していた遺構面出土資料ではないが、当遺跡近隣の古代寺院との関連も示唆されるため、ここでとりあげてみたい。

なお、既往の（その２）調査でも、平安時代後期と目される包含層から蓮華文軒丸瓦が１点出土している（図 50 － 6）。これもあわせて、今一度検討したい。

50 － 1 の瓦当は１区の第４ａ層から出土した（第３章第２節参照）。軒丸瓦だが瓦当の４分の１弱程度の残存状態であり、丸瓦は剥離して存在せず、瓦当のみとなっている。

瓦当の外区は失われ、中房も径の中心までは残っておらず、蓮子は２、３点確認されるのみである。従って、瓦当径も残存径の約２倍、約 18.0㎝としか推測できない。蓮子径は 0.7㎝と大きい。複弁２組の間にはＴ字状の棒芯が入る。複弁の連弁が二葉とその外側にも確認されることから、複弁八葉蓮華文軒丸瓦と推測される。瓦当は剥離しており厚みは 1.5㎝と薄く、瓦当断面は平らではなく、凸レンズ状に外り気味である。

川原寺式軒丸瓦であり、川原寺の創建年代から７世紀後葉か、それよりやや後で作られた奈良時代初めのものであろう。

古代において、当遺跡の南東、生駒山麓の東高野街道沿い 1.0 ～ 2.0㎞にわたって、「河内六寺」と称される寺院が建ち並んでいた（図３－１・３－２、第２章第２節参照）。「河内六寺」とは、『続日本書紀』天平勝宝８（756）年２月条に、「戊申、行幸難波、是日、至河内国、御智識寺南行宮、己酉、天皇幸智識、山下、大里、三宅、家原、鳥坂等六寺礼仏」という記述がある事により、この六つの寺が「河内六寺」と称されている。この条の記載から、孝謙天皇が 756 年２月 24 日、平城宮から難波宮に行幸の際、智識寺南行宮に立ち寄り、翌日に河内六寺に行幸した事が分る。

河内六寺は地名や考古学的成果から研究が重ねられ、現在では智識寺が太平寺廃寺、山下寺が大県南廃寺、大里寺が大県廃寺、三宅寺が平野廃寺、家原寺が安堂廃寺、鳥坂寺が高井田廃寺に該当するとされ、三宅寺以外はほぼ確定している。

河内六寺やそれと比較的近い距離の寺院跡からは瓦が一定量出土しており、報告書などで報告されている。このうち、図 50 － 1 と類似するものを図 50 － 2 ～ 5 にまとめた。智識寺跡、鳥坂寺跡、原山廃寺（原山廃寺は現在の大阪府柏原市、河内国安宿（あすかべ）郡尾張郷に存在した寺院、鳥坂寺よりさらに 2.5㎞南に位置する）などからの出土である。

特に、50 － 2 の智識寺跡出土資料は、中房や蓮子の大きさが 50 － 1 と似る。

50 － 2 は中房がすべて残り、中房径は 5.5cm である。連子は１点を中心に置き、その周りに８点が配されている。外区は失われているが、複弁の蓮弁は二葉が３対とその外側にも確認され、これで径のほぼ２分の１を占める事から、複弁八葉の蓮華文軒丸瓦と推察される。瓦当の厚みは 2.0 ～ 2.5cm である。50 － 4 も智識寺跡出土資料である。中房は残らず、外区が一部残る。外縁幅が 2.0cm と広い印象を受ける。

智識寺は大阪府教育委員会によって、東塔跡が発掘調査され、基壇の一部が確認されている。軒丸瓦は素弁蓮華文、重弁蓮華文、複弁蓮華文、重圏文が出土しており、７世紀中頃から後半の創建と考えら

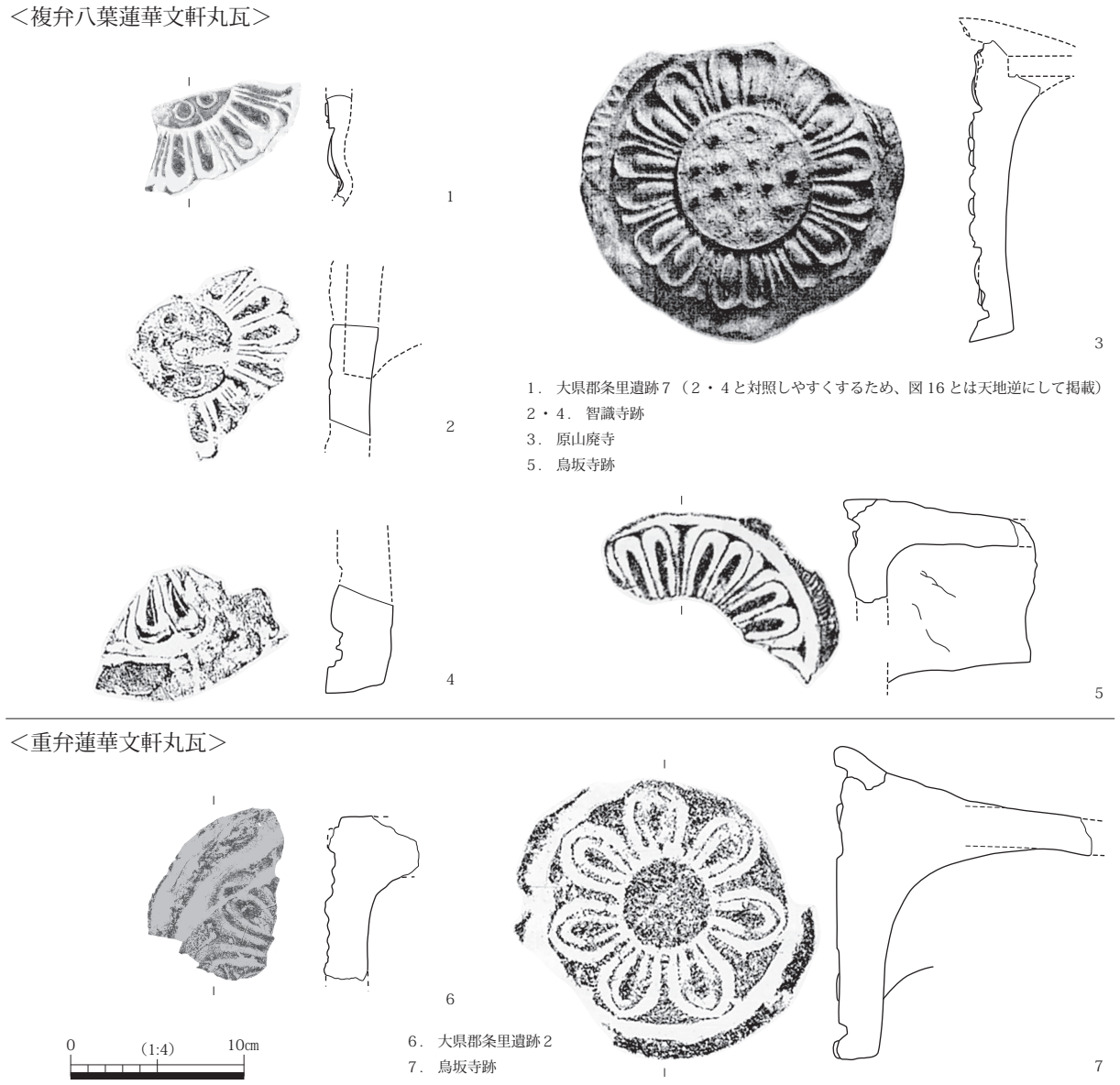


図 50 出典：

1．本報告書『大県郡条里遺跡７』図 16－６　2021　（公財）大阪府文化財センター

２～４．近藤康司　「２．摂河泉の川原寺式軒丸瓦」第 96 図より抜粋　『古代瓦研究Ⅲ―川原寺式軒丸瓦の成立と展開―』　2009　奈良文化財研究所

5．『鳥坂寺跡発掘調査報告書』図 11－29　2011　柏原市教育委員会

6．『大県郡条里遺跡２』図 18－195　2015　（公財）大阪府文化財センター

7．『鳥坂寺跡発掘調査報告書』図 48－154　2011　柏原市教育委員会

図 50　大県郡条里遺跡と周辺出土の蓮華文軒丸瓦

れる。

50 － 3 の原山廃寺出土資料は、外縁がわずかに欠損する以外は瓦当がほぼ残る良好な資料である。直径 18.8cm、外区幅 1.6cm、中房径が 7.9cm をはかる。複弁がすべて残り、外区には鋸歯文が施される。中房径が 50 － 1 、50 － 2 と比較すると大きく、蓮子が中房内に 1 ＋ 5 ＋ 9 の 15 点配されているのが 50 － 1 、50 － 2 と異なる。

50 － 5 は鳥坂寺跡出土資料である。中房は失われ、外区も一部を残し欠損するが、複弁の長さや複弁と複弁の間に明瞭に T 字状の棒芯がみられる点が 50 － 1 、50 － 2 とは異なる。

50－1と50－2はどちらも小片で同氾かは不明だが、地理的にも近いことから、今回大県郡条里遺跡から出土した軒丸瓦は、智識寺との関係が最も密接と考えられる。

また、平成24～26年度に実施された、その2調査区の第6ａ層でも、蓮華文軒丸瓦が1点出土した（図50－6）。

50－6は瓦当部が4分の1程度の残存状態で、瓦当部分のみで丸瓦は剥離している。瓦当も外区は残るが、中房は残らない。推定直径が約17.0㎝で、瓦当の厚さは2.5㎝である。外縁と文様の間に1.0cm強の周環が巡る。連弁は単弁であるが二重に重なっている事から、重弁蓮華文軒丸瓦と言える。花弁の数は七葉もしくは八葉で、弁端は尖っており、外区は素文と思われる。

50－6に類似しているのが、鳥坂寺講堂東跡から出土した重弁七葉蓮華文軒丸瓦である（図50－7）。鳥坂寺跡は図3－2で図示しているように、河内六寺の最も南にあり、家原寺跡よりさらに1.0㎞ほど南東に位置する。河内六寺のなかで、唯一、発掘調査によって主要伽藍の配置が確認されており、7世紀中頃から後半の創建と考えられる。

50－7は、重弁七葉蓮華文軒丸瓦である。直径17.6cm、中房径4.8cm、外縁幅は0.8～1.0cm、瓦当の厚さは3.2cmをはかる。外区は素縁である。周環の幅や、蓮弁の大きさ、弁端の尖り具合などが50－6に似る。

智識寺と当調査区との直線距離は約1.7㎞、鳥坂寺と当調査区との直線距離は約3.1㎞である。陸路でも、あるいは川の水運等を利用しても、往来や交流は十分可能な距離であろう。今回紹介した軒丸瓦は、中世の包含層からの出土であるため、いつ、どのように移動したかは不明確な点もある。ただし、古代の遺構面で、硯に転用した須恵器蓋も出土しており、識字層が当遺跡周辺にいた事も示唆される。

大県郡条里遺跡は、古代から近世に至る耕作遺構の遺跡と知られている。その大県郡条里遺跡から少量ではあるが、奈良時代に隆盛を誇った古代寺院の瓦に近似した軒丸瓦が出土した事は、耕作地以外の利用もあった可能性も考えられる。

参考文献

近藤康司　「2．摂河泉の川原寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅲ－川原寺式軒瓦の成立と展開－』　2009　奈良文化財研究所

『鳥坂寺跡発掘調査報告書』　2011　柏原市教育委員会

『鳥坂寺再興－平成24年度夏季企画展示図録－』　2012　柏原市立歴史資料館

『河内六寺の輝き－平成19年度夏季企画展示図録－』　2007　柏原市立歴史資料館

表３　遺物観察表

法量の〔　〕は推定、（　）は残存を表す

遺物番号	挿図番号	写真図版	調査区 層・面・遺構名	種別 器形	法量（cm） 口径・長	底径・幅	器高・厚	色調	時期	調整・特徴など
1	15	15	１区 第４－１ａ・ 第４－２ａ層	瓦質土器 擂鉢	－	－	（4.8）	外：2.5Y6/2 灰黄 内：2.5Y5/1 黄灰	中世後期	外：ヨコナデ、ケズリ 内：ヨコナデ
2	15	15	１区 第４－１ａ・ 第４－２ａ層	瓦質土器 擂鉢	－	－	（5.5）	外：N 4/0 灰 内：N 5/0 灰	中世後期	外：ヨコナデ、ケズリ 内：ヨコナデ、ナデ、ハケメ
3	15	－	１区 第４－１ａ・ 第４－２ａ層	須恵器 把手付容器	－	－	（6.2）	釉：10Y4/2 オリーブ灰 外：N7/0 灰白 内：N7/0 灰白	－	外：ナデ、自然釉付着 内：上方ヨコナデ、下方タテナデ
4	15	－	１区 堤部上溝（第３ａ層）	磁器（染付） 碗	〔11.2〕	4.8	5.3	外：2.5GY8/1 灰白 内：5GY8/1 灰白	近世	外：梅花文、三重圏線 内：蛇の目釉剥ぎ 高台部に重ね焼の砂が付着
5	15	－	２区 攪乱	陶器（湊焼） 火鉢	－	－	（10.4）	外：7.5YR6/3 にぶい褐 内：7.5YR4/2 灰褐	近世	外内：回転ナデ 外面に突帯貼り付け
6	16	15	１区 第４－１ａ・ 第４－２ａ層	瓦 軒丸瓦	（8.5）	（6.0）	（1.5）	表：N7/0 灰白	飛鳥時代 末～奈良 時代初	複弁蓮華文軒丸瓦 川原寺式
7	16	15	２区 攪乱	金属製品 銅銭 （寛永通寶）	2.5	2.5	0.1	－	近世	銅一文銭 腐食により「通」の右下辺に孔が生じている
8	16	15	３区 表採（第３ａ層）	金属製品 銅銭	2.5	2.5	0.1	－	－	錆が付着 寛永通寶か
9	16	15	１区 第４－１ａ・ 第４－２ａ層	金属製品 斧	18.9	1.4	0.2	－	近世	赤銅か 竿から穂先は上面に向けて湾曲する 地板は魚々子地
10	16	－	１区 第４－１ａ・ 第４－２ａ層	金属製品 不明	（8.7）	1.75	0.3	－	－	鉄製品、全体的に錆付着 先端に釣状の突起をもつ
11	16	15	１区 第４－１ａ・ 第４－２ａ層	木製品 角材状製品	（17.8）	2.0	1.9	－	－	何かの部材の一部か、柄穴を２箇所もつ 木釘状の痕跡あり
12	16	15	１区 第４－１ａ・ 第４－２ａ層	木製品 曲物底板	12.4	（2.9）	0.4	－	－	杉などの針葉樹材
13	19	15	１区 第５ａ・ 第５ｂ層	瓦質土器 擂鉢	－	－	（5.7）	外：5Y4/1 灰 内：5Y4/1 灰・ 2.5Y6/2 灰黄	中世後期	外：口縁部ヨコナデ、体部縦方向のヘラケズリの後、ハケナデ 内：ヨコナデ、摩耗を受けている
14	19	15	１区 第５ａ・ 第５ｂ層	瓦質土器 羽釜	－	－	（4.7）	外：5Y6/1 灰 内：2.5Y6/1 黄灰	中世後期	外内：ナデ 径２～5mm の黒色礫を含む
15	19	15	３区 第５ａ層	磁器（白磁） 皿	－	〔7.0〕	（0.6）	外：5Y8/1 灰白 内：5Y7/2 灰白	中世後期	糸切り底で底部外縁辺にも釉残る
16	19	－	２区 第５ｂ層	瓦 平瓦	（7.3）	（8.0）	2.5	凸面：N4/0 灰 凹面：N7/0 灰白	中世後期 ？	凸面：砂目、格子状のタタキ痕残る 凹面：弧状の圧痕
17	19	－	１区 第５ａ・ 第５ｂ層	瓦 平瓦	（5.5）	（3.7）	2.2	凸面：N4/0 灰 凹面：N4/0 灰	中世後期 ？	凸面：縄タタキ 凹面：弧状の圧痕
18	22	16	１区 第６ａ層	瓦器 椀	〔11.4〕	－	（2.7）	外：N4/0 灰・ 2.5Y8/1 灰白 内：N4/0 灰・ 2.5Y8/1 灰白	鎌倉時代	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデでわずかにユビオサエ残る 内：ヨコナデ
19	22	16	１区 第６ａ～ 第７ａ層 （南側溝）	須恵器 こね鉢	－	－	（4.3）	外：N6/0 灰 内：N6/0 灰	鎌倉時代 前期	東播系 外内：回転ナデ、ヨコナデ
20	22	16	１区 第６ａ層	須恵器 こね鉢	－	〔10.8〕	（4.5）	外：5Y6/1 灰 内：5Y6/1 灰	平安時代 後期	東播系 外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ、使用により摩耗している 径３～4mm の白色礫を含み、胎土やや粗
21	22	16	１区 第６ａ層	陶器 （備前焼） 擂鉢	－	－	（6.0）	外：2.5YR5/3 にぶい赤褐 内：2.5YR5/3 にぶい赤褐	鎌倉時代 前期	外：回転ナデ 内：回転ナデ、擂目あり
22	22	16	３区 第６ａ層	土師器 羽釜	〔23.6〕	－	（3.0）	外：10YR8/2 灰白 内：10YR8/2 灰白	鎌倉時代 後期	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内：ヨコナデ
23	22	16	２区 第６ａ層	磁器（白磁） 皿	－	〔8.0〕	（1.8）	外：7.5Y7/1 灰白 内：7.5Y7/1 灰白	中世前期	

表３　遺物観察表

法量の〔　〕は推定、（　）は残存を表す

遺物番号	挿図番号	写真図版	調査区 層・面・遺構名	種別 器形	法量（cm） 口径・長	底径・幅	器高・厚	色調	時期	調整・特徴など
24	22	—	３区 第６ａ層	弥生土器 甕	—	〔4.0〕	(1.9)	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：2.5Y4/1 黄灰	弥生時代	外：ヨコナデ 内：ナデ
25	22	—	１区 第６ａ層	木製品 杭状木製品	6.0	1.9	2.0	—	—	刃物による刻み痕、斜めの擦痕あり
26	29	—	１区 第７－１ａ・第７－２ａ層	瓦器 椀	〔12.8〕	—	(2.9)	外：N5/0 灰 内：2.5Y7/1 灰白	鎌倉時代 後期	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ミガキ
27	29	17	１区 第７ａ層（西側溝）	瓦器 椀	〔13.0〕	—	(3.4)	外：N4/0 灰 内：N5/0 灰	鎌倉時代 前期	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、体部幅１～2mm のミガキ、見込みは平行線ミガキ
28	29	—	１区 第７－１ａ・第７－２ａ層	瓦器 椀	〔11.6〕	—	(2.5)	外：5Y7/1 灰白 内：2.5Y7/1 灰白	鎌倉時代 後期	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、体部ミガキ
29	29	17	３区 第７ａ層	瓦器 椀	—	〔4.8〕	(2.6)	外：N4/0 灰 内：N4/0 灰	平安時代 後期	外：ナデ、ユビオサエ 内：ナデ、幅 4mm の太いミガキ
30	29	16	２区 第７－１ａ面 54 流路	瓦器 椀	〔12.2〕	—	(3.5)	外：5Y8/1 灰白 内：5Y8/1 灰白	鎌倉時代 後期	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ミガキ
31	29	—	２区 第７－１ａ～第７－３ａ層	瓦器 椀	〔12.4〕	—	(2.4)	外：N6/0 灰 内：N6/0 灰	鎌倉時代 後期	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、体部ミガキ
32	29	17	２区 第７－１ａ～第７－３ａ層	瓦器 皿	〔9.2〕	—	1.7	外：N4/0 灰 内：N5/0 灰	平安時代 後期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
33	29	16	２区 第７－１ａ面 54 流路	土師器 皿	〔8.2〕	—	(1.2)	外：10YR6/2 灰黄褐 内：10YR6/1 褐灰	鎌倉時代 後期	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内：ヨコナデ
34	29	17	１区 第７－１ａ・第７－２ａ層	土師器 皿	〔12.4〕	—	2.0	外：7.5YR7/3 にぶい橙・10YR6/2 灰黄褐 内：10YR7/3 にぶい黄橙	鎌倉時代 後期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
35	29	17	１区 第７－１ａ・第７－２ａ層	土師器 皿	〔9.0〕	—	1.1	外：2.5Y6/2 灰黄 内：2.5Y5/2 暗灰黄	鎌倉時代 前期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
36	29	—	３区 第７－２ａ層	土師器 皿	〔8.6〕	—	(1.4)	外：2.5Y6/2 灰黄 内：2.5Y5/1 黄灰	平安時代 後期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
37	29	16	２区 第７－１ａ・第７－２ａ層（堤部溝内）	磁器（青磁） 碗	〔17.8〕	〔5.4〕	(5.5)	外：7.5Y6/3 オリーブ黄 内：7.5Y6/3 オリーブ黄	平安時代 後期	同安窯系Ⅰ類か 外：櫛目文 内：ヘラによる片彫りで圏線、その中に櫛でジグザグ文
38	29	17	１区 第７－１ａ・第７－２ａ層	陶器（常滑焼） 甕	—	—	(4.5)	外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR4/1 褐灰	鎌倉時代 後期	外：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ、ハケ状のものでナデた痕跡 内：ナデ 内外面とも火を受け全体に煤付着あり
39	29	17	１区 第７－１ａ・第７－２ａ層	瓦質土器 羽釜	—	—	(3.1)	外：5YR7/3 にぶい橙 内：5YR7/2 明褐灰	中世後期	外内：口縁～鍔部ヨコナデ、体部ナデ
40	29	17	３区 第７ａ層	土師器 ミニチュア土器 高杯	—	〔4.4〕	(2.8)	外：2.5Y6/2 灰黄 内：2.5Y6/2 灰黄	—	外内：ナデ
41	29	16	２区 第７－１ａ・第７－２ａ層	陶器 鉢	—	〔13.6〕	(5.3)	外：2.5Y7/1 灰白 内：2.5Y6/1 黄灰	平安時代 後期	常滑窯片口鉢Ⅰ類か 外：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、ナデ、使用によりかなり摩耗
42	29	17	２区 第７－１ａ面 精査	須恵器 こね鉢	—	〔8.0〕	(2.7)	外：5Y6/1 灰 内：5Y6/1 灰	平安時代 後期	東播系 外：回転ナデ、ケズリ、ユビオサエ 内：回転ナデ
43	30	17	１区 第７－１ａ・第７－２ａ層	瓦 平瓦	(11.0)	(10.1)	(1.9)	凸面：N4/0 灰 凹面：N3/0 暗灰	中世	凹面：布目痕
44	30	—	３区 第７ａ層	瓦 平瓦	(6.0)	(4.5)	(2.2)	凸面：5Y7/1 灰白 凹面：N3/0 暗灰	中世	凹面と狭端面は火を受けて炭化している

表３　遺物観察表

法量の〔　〕は推定、（　）は残存を表す

遺物番号	挿図番号	写真図版	調査区 層・面・遺構名	種別 器形	法量（cm） 口径・長	底径・幅	器高・厚	色調	時期	調整・特徴など
45	30	－	２区 第７－１ａ・ 第７－２ａ層 （堤部溝内）	石材	6.9	4.8	3.3	－	－	サヌカイト 石核から打ち欠いたままの状態と思われる
46	30	－	２区 第７－１ａ～ 第７－４ａ層 （西法肩）	石材	5.6	5.1	2.8	－	－	サヌカイト 石核から打ち割った際に生じた破片と思われる
47	31	18	３区 第８ａ層	瓦器 椀	〔17.8〕	〔5.3〕	6.2	外：N4/0 灰 内：N4/0 灰	平安時代 後期	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ミガキ、見込みは格子状ミガキ
48	30	－	１区 第９ｂ層	瓦器 椀	－	〔7.6〕	（2.0）	外：N4/0 灰 内：N4/0 灰	平安時代 後期	外：ナデ、ミガキ 内：見込みはおそらく格子状ミガキ
49	30	18	１区 第７－４ａ・第８ａ・第９ａ層	土師器 甕	7.0	5.2	－	外：5Y7/2 灰白 内：5Y7/2 灰白	奈良時代 末～平安 時代初	把手：ヨコナデ、ナデ 石英・クサリ礫？を含む
50	31	－	２区 第７－４ａ・第８ａ・第９ａ層	土師器 椀	〔15.0〕	－	（4.8）	外：2.5Y6/3 にぶい黄 内：2.5Y6/2 灰黄	平安時代 中期か	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
51	31	18	１区 第９ｂ層	土師器 椀	〔12.6〕	－	（2.8）	外：2.5Y7/2 灰黄 内：2.5Y7/3 浅黄	平安時代 中期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
52	31	18	１区 第９ａ層	土師器 杯	〔14.2〕	－	3.8	外：7.5YR8/3 浅黄橙 内：7.5YR8/4 浅黄橙	平安時代 前期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
53	31	－	１区 第７－４ａ・第８ａ・第９ａ層	土師器 皿	〔13.0〕	－	（1.9）	外：2.5Y7/3 浅黄 内：2.5Y7/2 灰黄	平安時代 中期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
54	31	－	２区 第７－４ａ・第８ａ・第９ａ層	土師器 杯	〔15.6〕	－	（3.0）	外：2.5Y7/2 灰黄 内：2.5Y7/2 灰黄	平安時代 中期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
55	31	－	１区 第７－４ａ・第８ａ・第９ａ層	土師器 皿	〔8.4〕	－	1.9	外：2.5Y6/3 にぶい黄 内：2.5Y6/2 灰黄	平安時代 後期 ？	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
56	31	－	２区 第７－４ａ・第８ａ・第９ａ層	土師器 杯	〔13.2〕	－	（2.4）	外：2.5Y6/2 灰黄 内：2.5Y6/2 灰黄	平安時代 前期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
57	31	－	２区 第７－４ａ・第８ａ・第９ａ層	土師器 皿	〔11.8〕	－	2.0	外：5YR7/2 明褐灰 内：5YR8/3 淡橙	平安時代 中期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、丁寧なナデで器壁薄い
58	31	18	２区 第７－４ａ・第８ａ・第９ａ層	土師器 皿	〔8.1〕	6.6	1.5	外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR6/2 灰黄褐	平安時代 後期 ？	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、煤付着している箇所あり
59	31	－	３区 第９ａ層	土師器 皿	〔10.2〕	－	（1.4）	外：2.5Y7/3 浅黄 内：2.5Y7/3 浅黄	平安時代 中期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
60	31	18	２区 第７－４ａ・第８ａ・第９ａ層	須恵器 杯身	〔10.4〕	－	（3.8）	外：5Y7/1 灰白 内：5Y7/1 灰白	飛鳥時代	外内：回転ナデ 金雲母含む
61	31	18	１区 第７－４ａ・ 第７－４ｂ層 （西側溝）	須恵器 壺	－	5.2	（2.5）	外：2.5GY7/1 明オリーブ灰 内：N7/0 灰白	奈良時代	外：回転ケズリ、ナデ 内：回転ナデ
62	31	－	３区 第８ａ面精査	土師器 甕	－	－	（2.9）	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：10YR6/3 にぶい黄橙	古代	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、わずかにハケ状の痕跡残る 内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
63	31	18	２区 第７－４ａ・第８ａ・第９ａ層	土師器 ミニチュア 土器 高杯	－	5.1	（4.7）	外：5Y7/3 浅黄 内：5Y7/3 浅黄	奈良～ 平安時代	外：ナデ、成形時のシボリナデ痕跡残る、焼成時の黒斑あり 内：ナデ
64	31	18	２区 第７－４ａ・第８ａ・第９ａ層	金属製品 馬具	14.2	1.4	0.4	－	鎌倉時代 か	轡の一部、引手 鉄製品、全体的に錆付着
65	36	19	１区 第 10 － １ａ層	須恵器 杯蓋	〔13.8〕	－	（1.9）	外：5Y5/1 灰 内：N6/0 灰	奈良時代	外：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ 細かい黒色・白色砂粒を含む
66	36	－	１区 第 10 － １ａ層	須恵器 杯蓋	〔16.6〕	－	（1.9）	外：N6/0 灰 内：N6/0 灰	奈良時代	外内：回転ナデ

表３　遺物観察表

法量の〔　〕は推定、（　）は残存を表す

遺物番号	挿図番号	写真図版	調査区 層・面・遺構名	種別 器形	法量（㎝） 口径・長	底径・幅	器高・厚	色調	時期	調整・特徴など
67	36	19	１区 第 10 － 2 a 面 42 溝	須恵器 杯蓋	〔14.0〕	－	(3.1)	外：5PB5/1 青灰 内：5PB6/1 青灰	古墳時代 後期	外：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ、粘土付着部分あり 径２～ 5mm の白色礫を含む
68	36	19	２区 第 10 a ・ 第 11 a 層	須恵器 転用硯 （杯蓋を転用）	〔12.8〕	－	(1.9)	外：5P7/1 明紫灰 内：5PB7/1 明青灰	平安時代 前期	外：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ、磨滅した痕跡が残る
69	36	19	１区 第 10 － 1 a 層	須恵器 杯身	〔13.2〕	－	(4.8)	外：5PB6/1 青灰 内：5PB5/1 青灰	古墳時代 後期	外：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ
70	36	19	１区 第 10 － 2 a ・ 第 10 － 2 b 層	須恵器 杯身	〔15.0〕	12.8	3.4	外：N5/0 灰 内：5PB5/1 青灰	古墳時代	外：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ 径 1mm 以下の白色砂粒を含む
71	36	19	２区 第 10 a 面精査	土師器 杯	－	－	(3.7)	外：5Y7/2 灰白 内：5Y7/2 灰白	奈良時代	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、体部ミガキ、幅 1mm の放射線状ミガキが施される
72	36	－	２区 第 10 a 面精査	土師器 皿	〔11.6〕	－	(2.1)	外：5Y7/1 灰白 内：5Y7/1 灰白	平安時代 中期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
73	36	19	１区 第 10 － 1 a 層 （30 畦畔付近）	土師器 皿	〔10.2〕	－	(1.7)	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙	平安時代 中期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
74	36	－	３区 第 10 a 層	土師器 皿	〔9.0〕	－	(1.7)	外：2.5Y7/2 灰黄 内：2.5Y7/2 灰黄	平安時代 中期	外内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
75	36	19	１区 第 10 － 2 a ・ 第 10 － 2 b 層	弥生土器 壺	〔11.6〕	－	(4.9)	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR6/3 にぶい黄橙	弥生時代 後期	外内：ヨコナデ、ナデ 径 2mm 程度の石英・クサリ礫を含む 生駒西麓産
76	36	19	１区 第 10 － 2 a 面 精査	弥生土器 高杯	－	－	(5.5)	外：2.5Y6/3 にぶい黄 内：2.5Y6/3 にぶい黄	弥生時代 後期	外：調整不明、一部タテ方向ハケメ痕あり 内：ナデかと思われるが摩耗著しい 径 4 ～ 5mm 程の長石若干、径 0.3 ～ 1mm の長石・石英・角閃石・クサリ礫・雲母含む
77	36	－	１区 第 10 － 2 a ・ 第 10 － 2 b 層	弥生土器 壺	－	〔9.0〕	(2.1)	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：2.5Y7/3 浅黄	弥生時代 前期	外：ヨコナデ、タテ方向のナデ、底部は摩耗のため調整不明 内：ナデ、一部黒斑あり 径 2mm 程度の白色礫を多く含む
78	37	20	１区 第 10 － 2 a ・ 第 10 － 2 b 層	石製品 台皿状製品	17.9	13.3	3.7	－	古代以前	表面・裏面ともに径２～ 3mm の気泡 表裏側面に摩耗痕
79	37	20	２区 第 10 a ・ 第 11 a 層	石製品 砥石	7.2	4.3	1.8	－	古代以前	砂岩製、表裏側面に擦痕 仕上げ砥
80	37	20	３区 第 10 a 層以下	石製品 砥石	6.8	4.1	2.2	－	古代以前	砂岩製、表裏側面に擦痕 仕上げ砥
81	43	19	１区 第 11 － 1 a 層	弥生土器 鉢	〔13.0〕	－	(5.7)	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：2.5Y7/3 浅黄	弥生時代 前期	外：剥離著しく調整不明 内：ヨコナデ、ナデ 径 0.5 ～ 3mm の長石・石英・角閃石・赤灰色砂粒含む
82	43	20	２区 第 12 a 面 55 流路下層	縄文土器 深鉢	〔16.0〕	－	(7.0)	外：10YR6/3 にぶい黄橙 内：10YR7/2 にぶい黄橙	縄文時代 晩期前半	滋賀里Ⅲｂ～Ⅳ型式 外：ナデ、斜め方向の貝殻条痕、右斜め下がりのケズリの痕跡 内：ナデ 径１～ 5mm の石英・金雲母・チャートを含む
83	43	20	２区 第 12 a 面 55 流路	弥生土器 壺	－	〔6.8〕	(3.5)	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR4/1 褐灰	弥生時代 前期？	外内：ナデ 径１～２ｍｍの石英・金雲母・クサリ礫を含む、生駒西麓産
84	43	－	３区 第 11 a 層	瓦 平瓦	(8.5)	(5.5)	(1.7)	凸面：N6/0 灰 凹面：N6/0 灰	古代	凸面：縄状のタタキ痕、側縁はナデ消し 凹面：布目痕 胎土はやや粗く、径 5mm 以上の白色砂粒を含む
85	43	20	１区 第 11 － 1 a 層	石器 剥片	4.7	3.7	0.8	－	弥生時代	サヌカイト
86	43	20	１区 第 11 － 1 a 層	石器 未製品	6.9	4.7	1.0	－	弥生時代	サヌカイト、刃部加工、やや風化

写　真　図　版

１．１区第３ａ面全景（南から）

２．１区第３ａ面全景（北から）

写真図版２　遺構

１．１区第４ａ面近景
（東から）

２．１区第４－2ｂ面
検出状況（南西から）

３．１区第４－２ｂ面
畝溝断面（南東から）

１．２区第５ａ面南半全景（北から）

２．２区第５ａ面81畦畔（南から）

写真図版４　遺構

１．３区第５ａ面全景（南から）

２．３区第６ａ面全景（南から）

１．１区第６ａ面全景（北から）

２．２区第６ａ面全景（北東から）

写真図版６　遺構

１．１区第６ａ面近景
（南西から）

２．１区第６ａ面近景
（北東から）

３．２区第６ａ面全景
（北から）

１．１区第７－１ａ面全景
（南から）

２．２区第７－１ａ面全景
（北東から）

３．２区54流路断面
（西から）

写真図版８　遺構

１．１区第７－４ａ面全景（南から）

２．２区第７－４ａ近景（北東から）

１．３区第８ａ面全景（南から）

２．３区第９ａ面全景（南から）

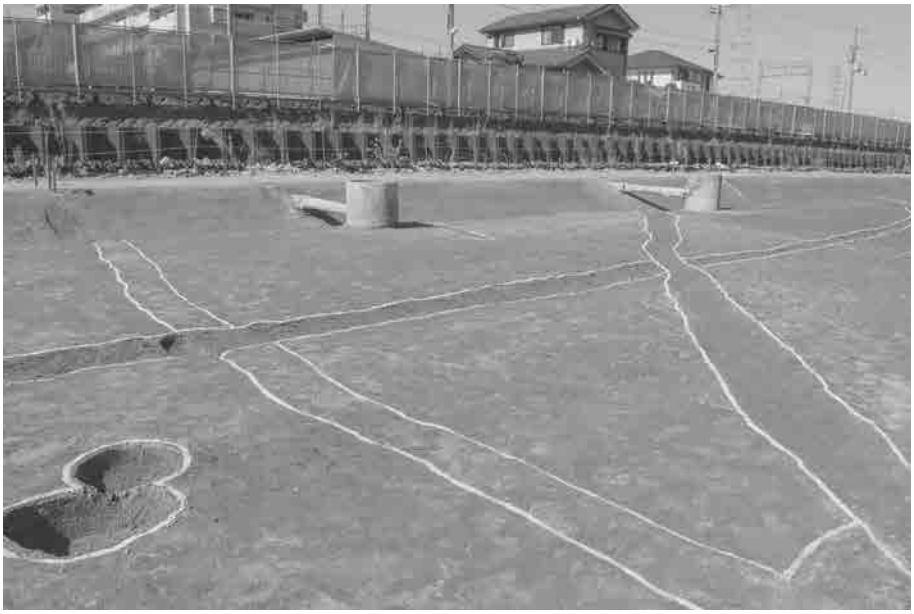
３．３区第11ａ面全景（南から）

４．３区第12ａ面全景（南から）

写真図版 10　遺構

１．１区第 10 － １ａ面全景（南から）

２．１区第 10 － ２ａ面全景（南から）



1．１区26溝・29溝・
31畦畔（東から）

2．１区42溝・43溝
（南西から）

3．１区第11ａ面全景
（北から）

写真図版 12　遺構

１．２区第12ａ面全景（北東から）

２．２区第12ａ面近景（西から）

1．２区56溝断面
（南東から）

2．２区55流路
（東から）

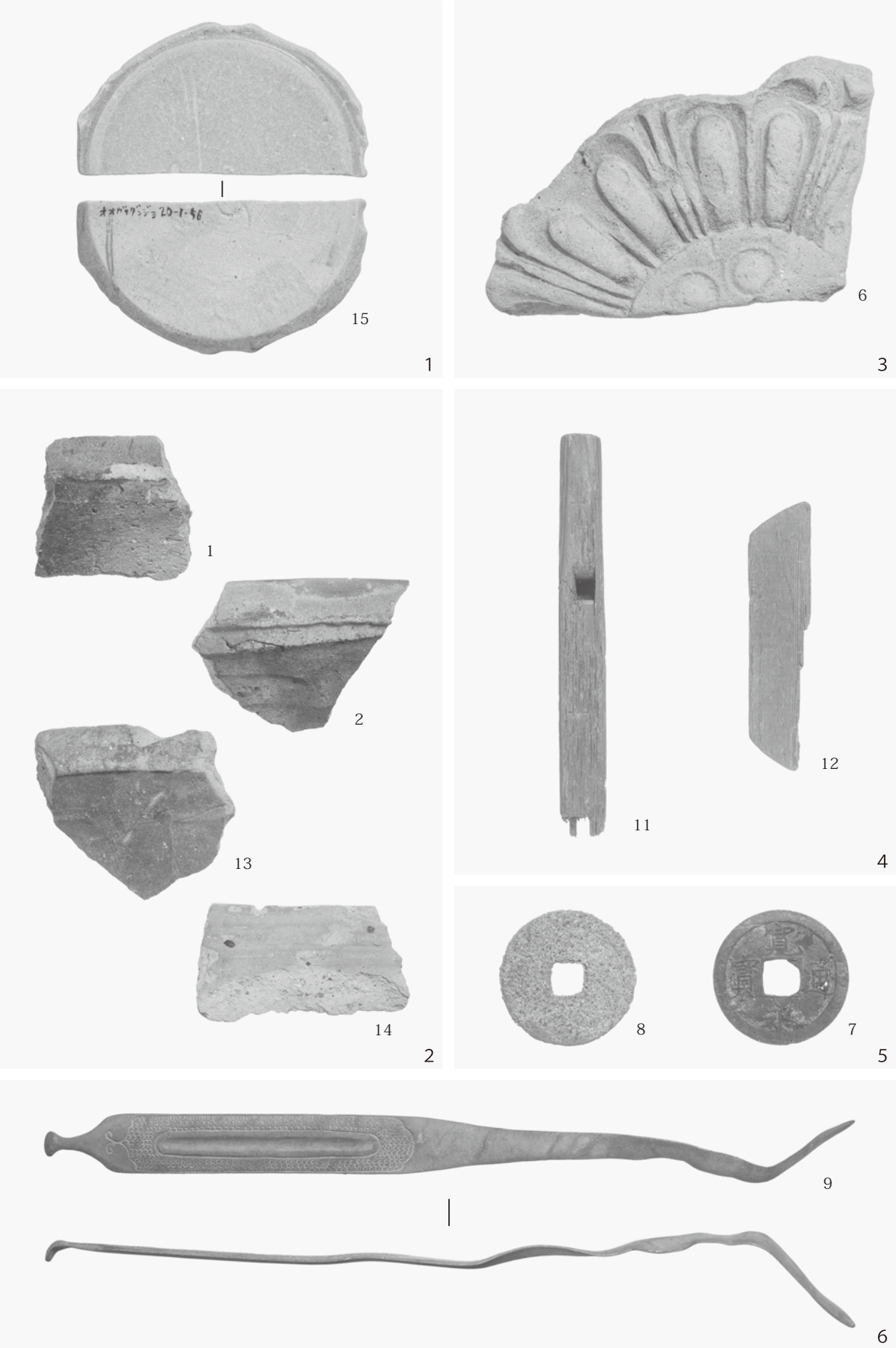
3．２区55流路断面
（東から）

写真図版 14　遺構

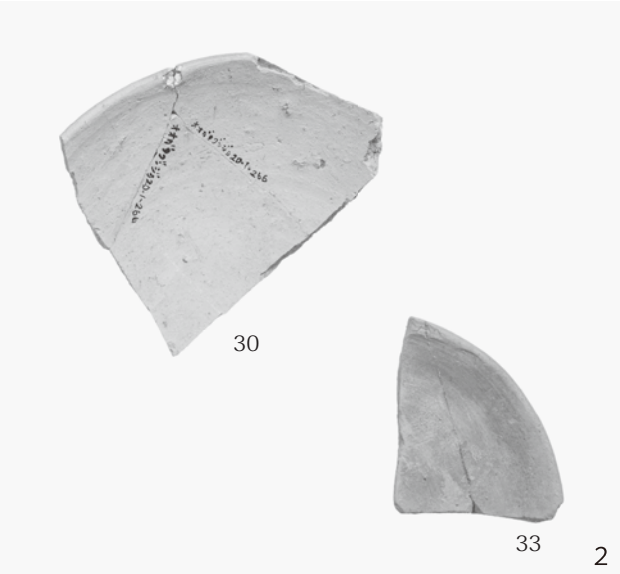
1．１区南壁断面
（北東から）

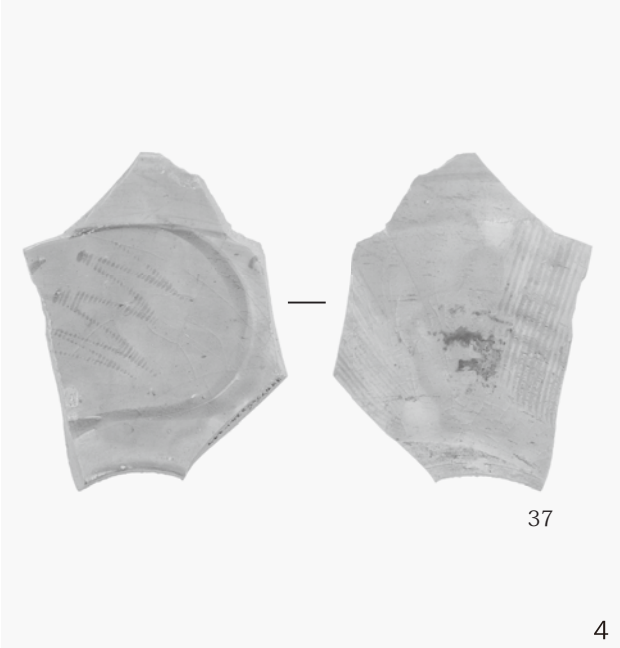
2．１区北壁断面
（南から）

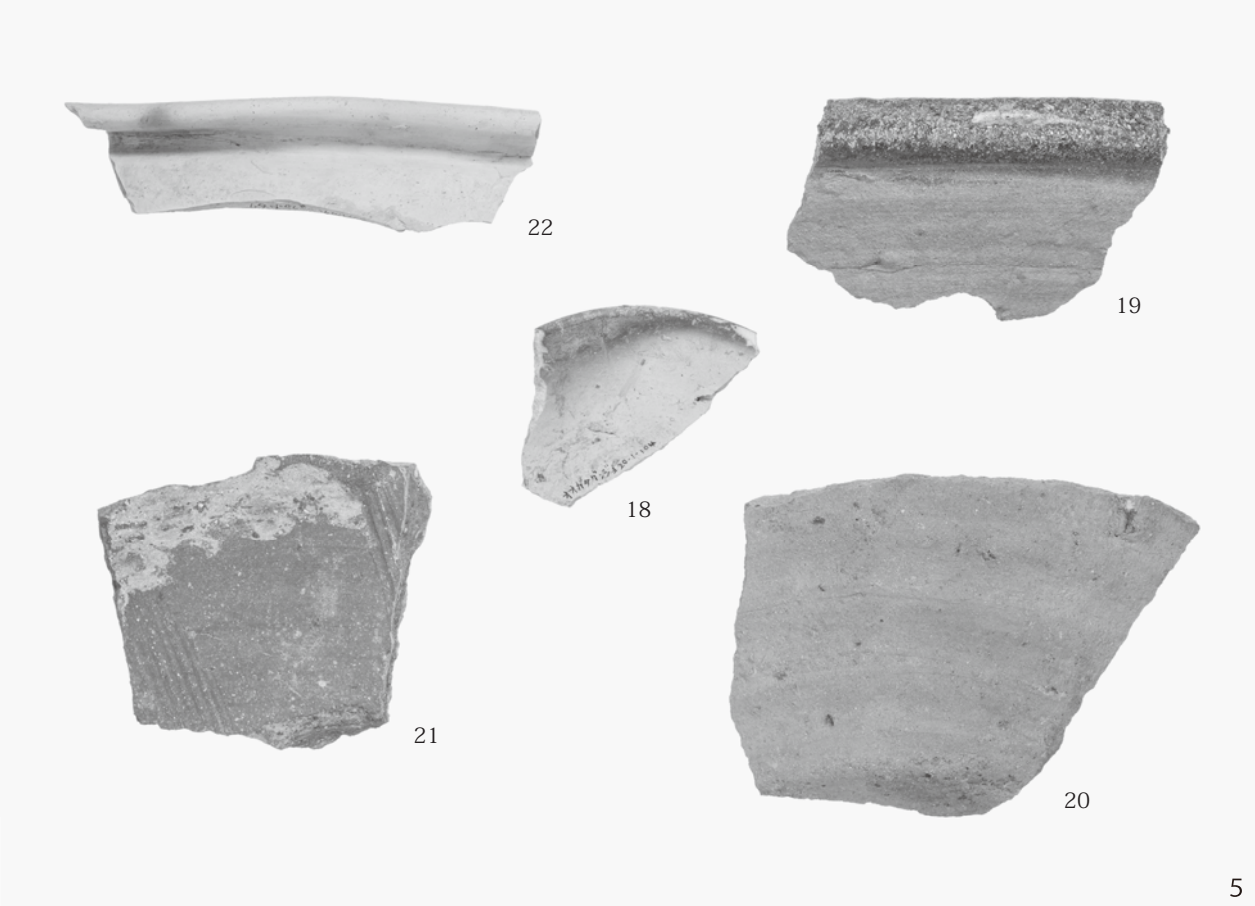
3．３区南壁断面
（北から）



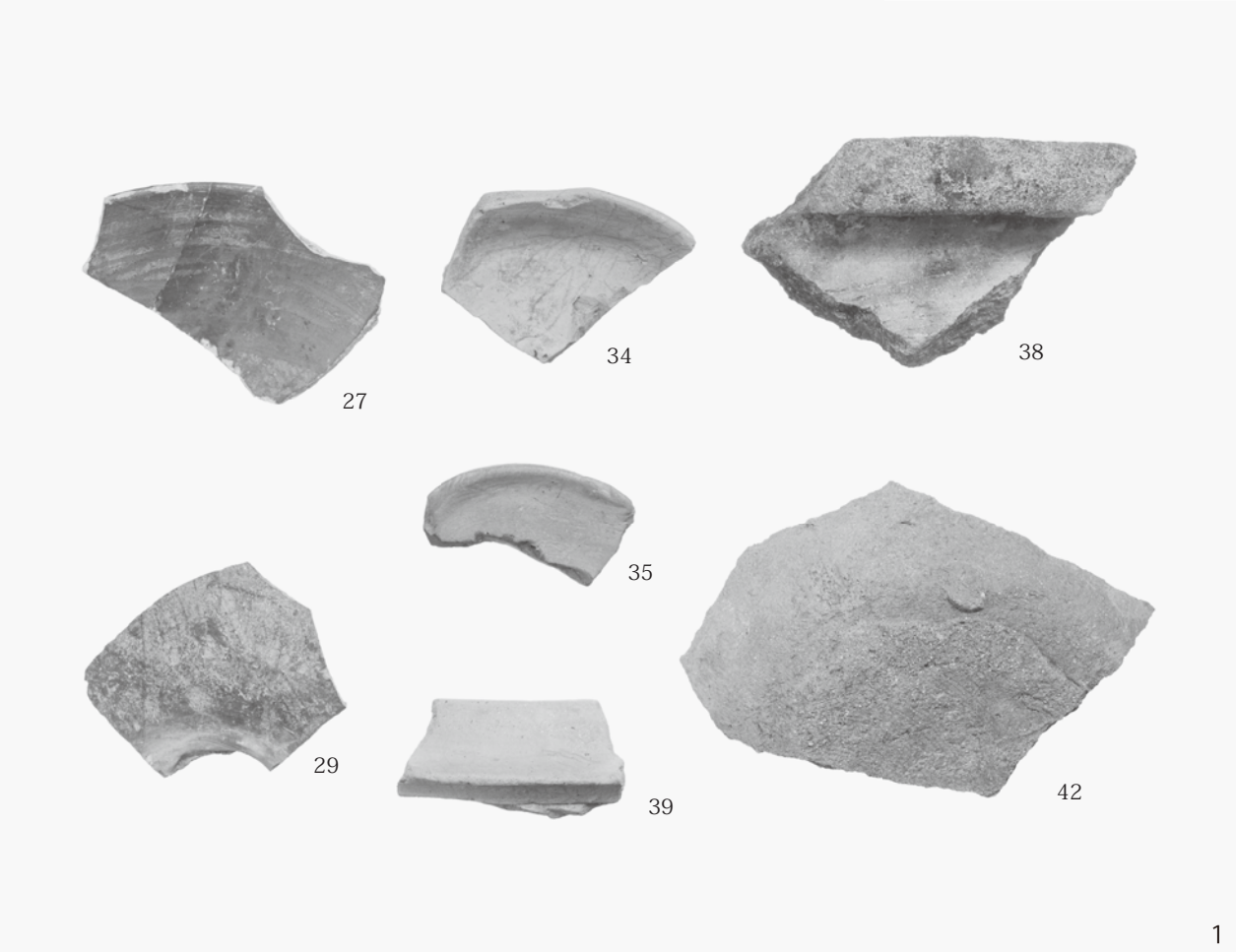
1．第５ａ層出土磁器　2．第４ａ・５ａ・５ｂ層出土瓦質土器　3．第４ａ層出土軒丸瓦
4．第４ａ層出土木製品　5．銭貨　6．第４ａ層出土金属製品

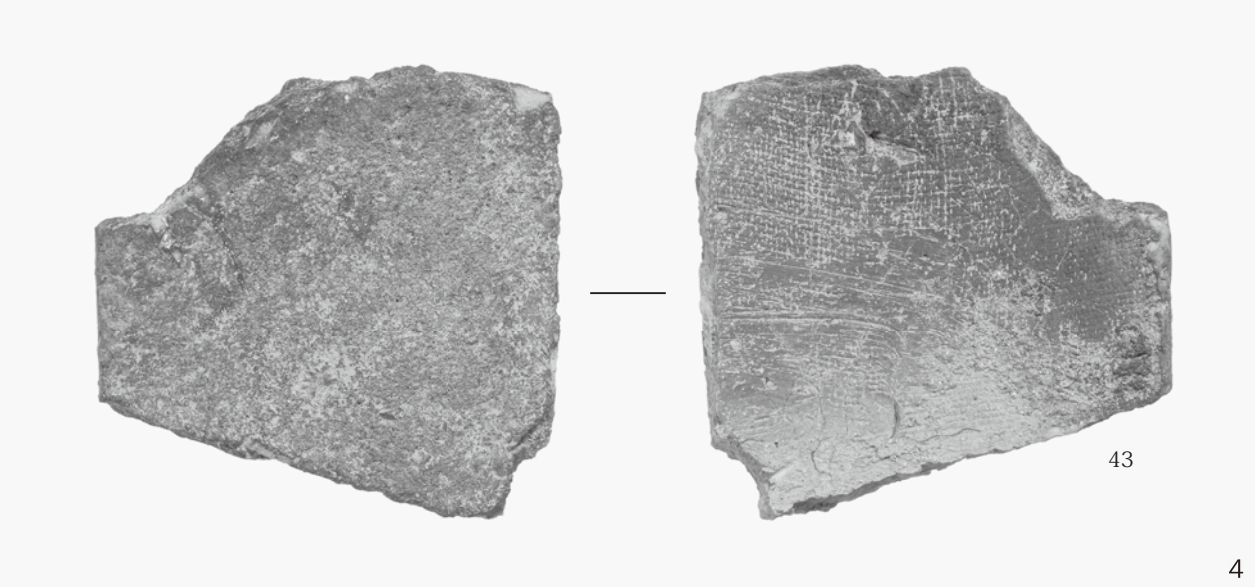




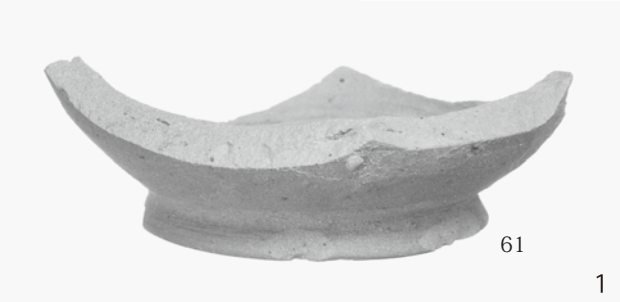


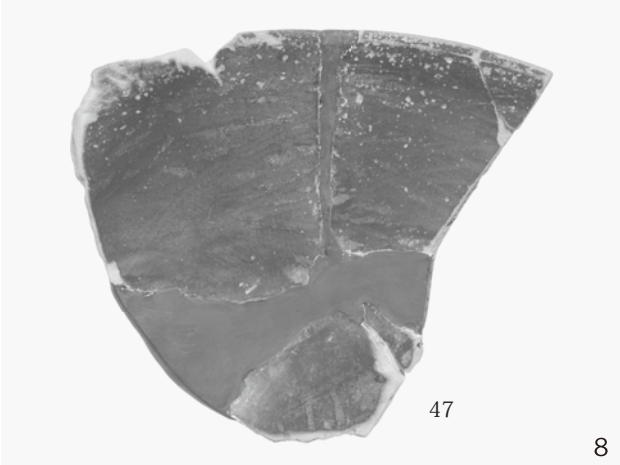
1．第７－１ａ・７－２ａ層出土陶器　　2．54流路出土瓦器・土師器　　3．第６ａ層出土磁器
4．第７－１ａ・７－２ａ層出土磁器　　5．第６ａ層出土土器

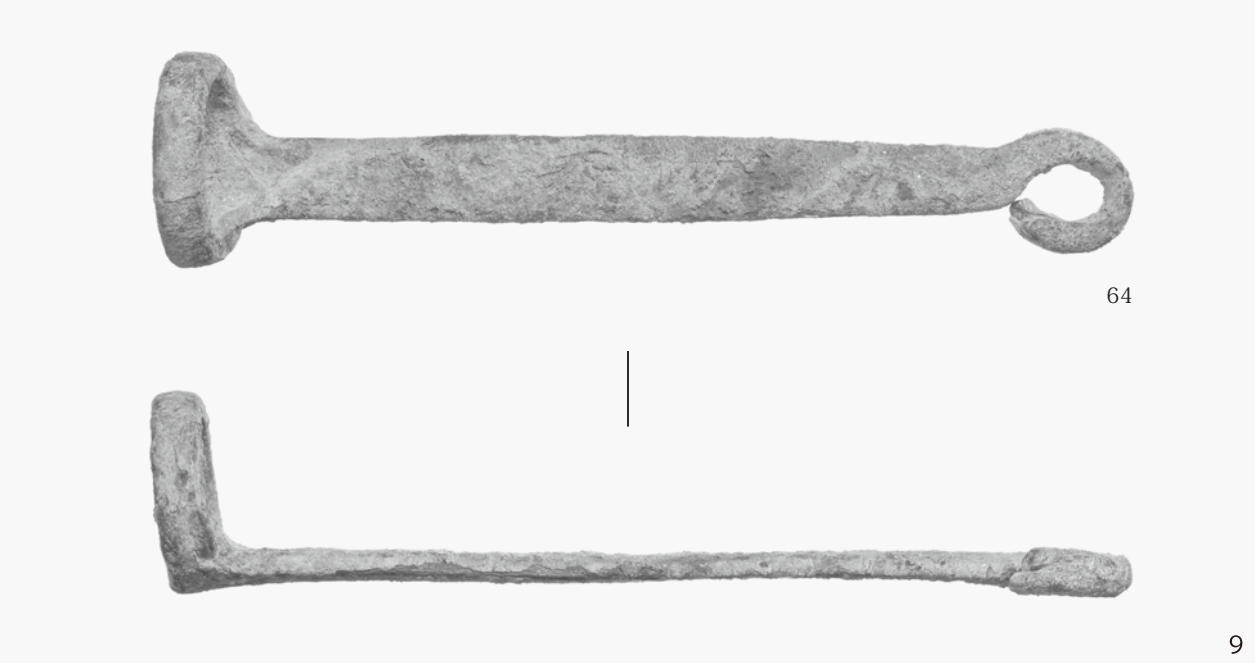




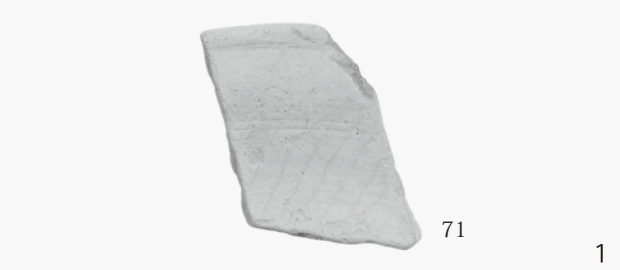
1．第７－１ａ～７－３ａ層出土土器　　2．第７－１～７－３ａ層出土瓦器
3．第７ａ層出土ミニチュア土器　　4．第７－１ａ・７－２ａ層出土平瓦

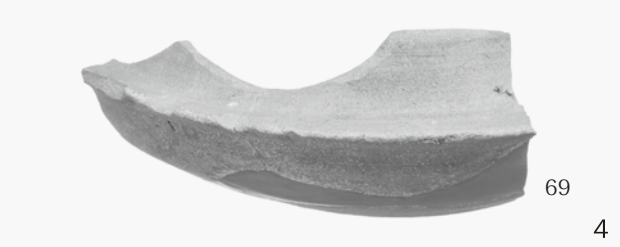


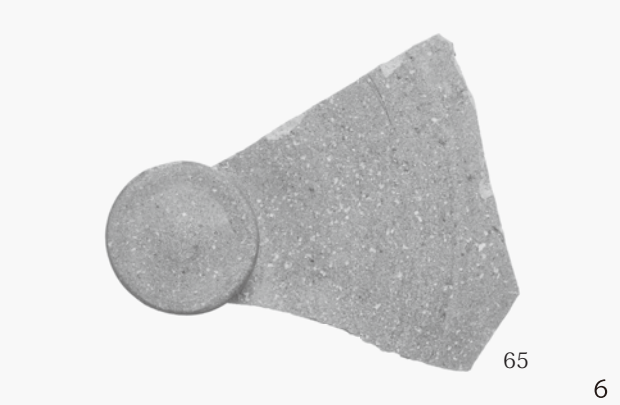


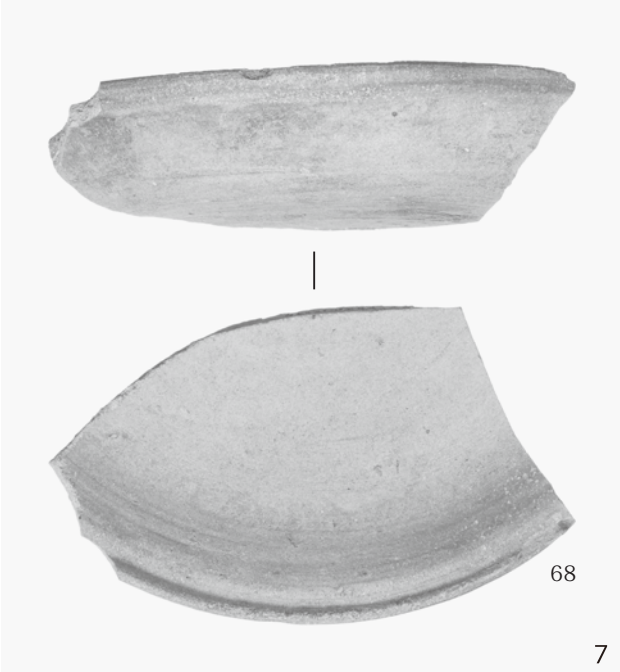


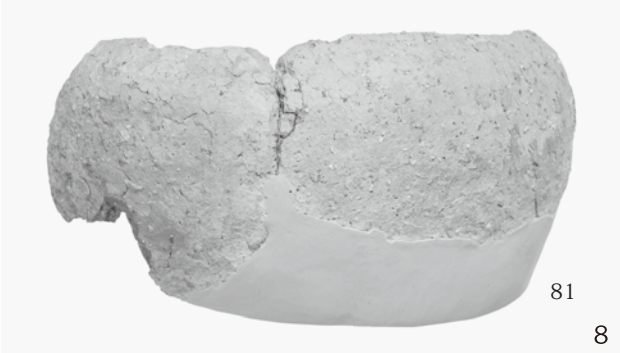
1．第７－４ａ・７－４ｂ層出土陶器　　2．第７－４ａ～９ａ層出土須恵器　　3．第７－４ａ～９ａ層出土ミニチュア土器
4・5・7．第７－４ａ～９ａ層出土土師器　6．第９ｂ層出土土師器　8．第８ａ層出土瓦器　9．第７－４ａ～９ａ層出土金属製品

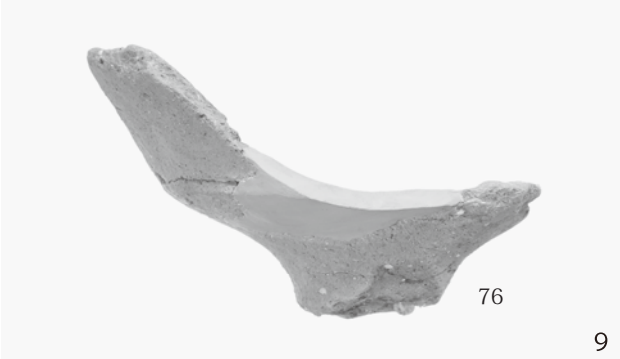




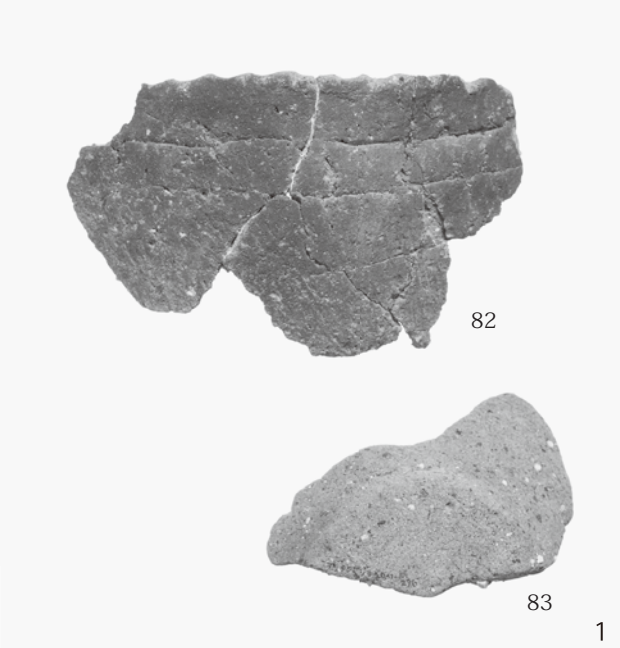


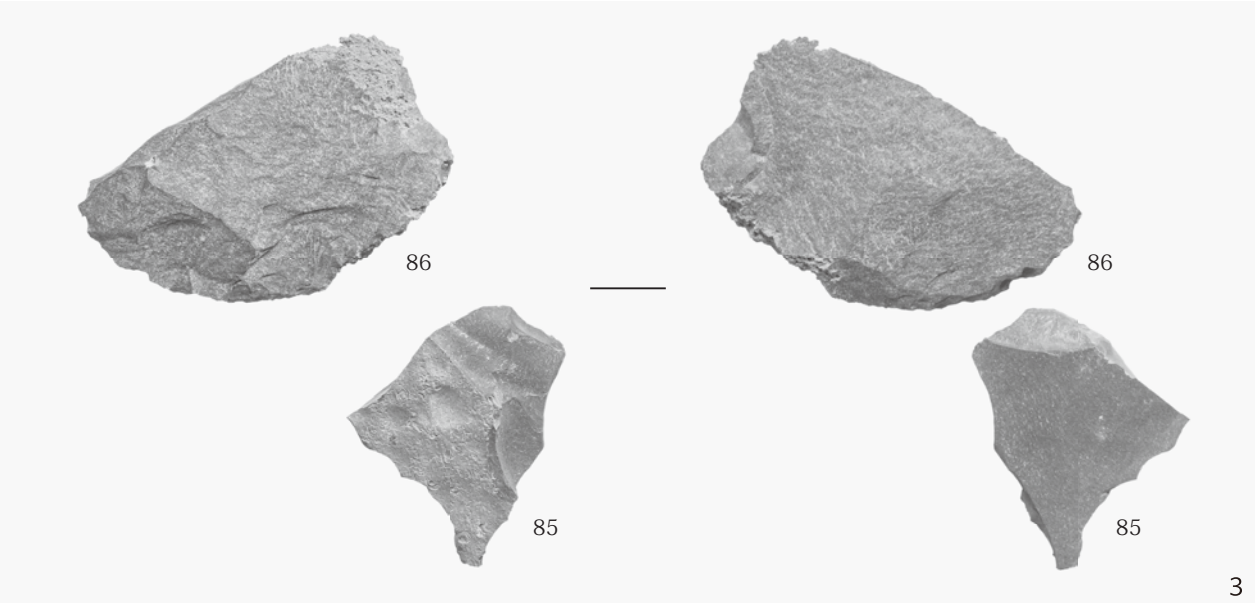


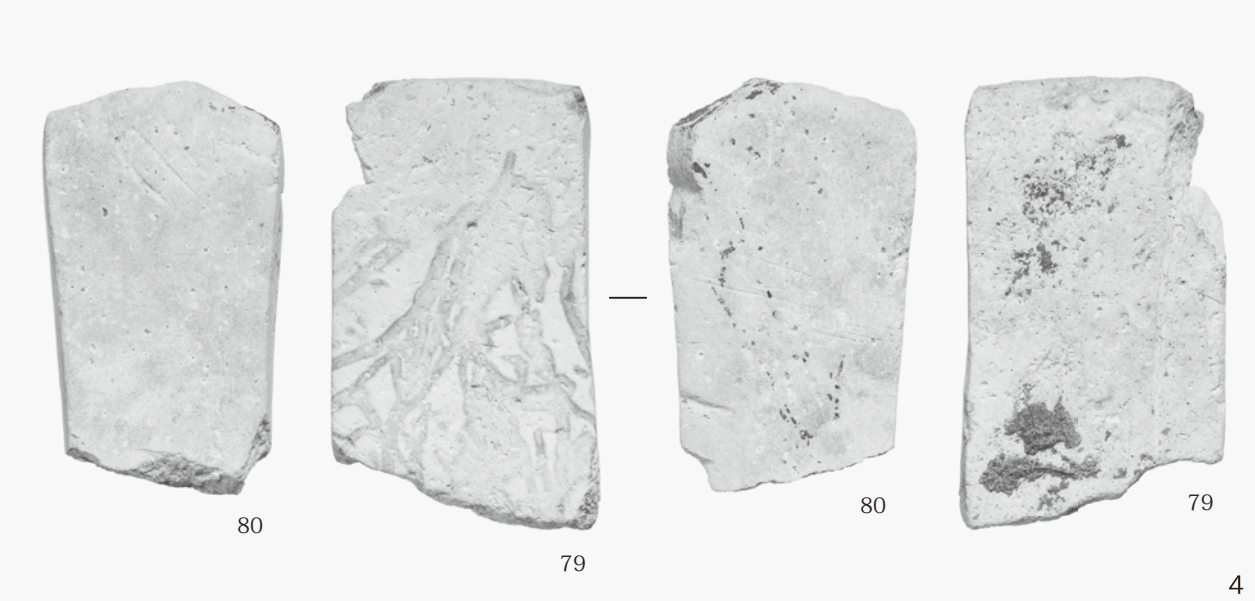




1・2．第10－１ａ層出土土師器　　3・4・6．第10－１ａ～１０－２ｂ層出土須恵器　　5．42溝出土須恵器
7．第10ａ・11ａ層出土須恵器（転用硯）　8～10.　第10－２ａ～11ａ層出土弥生土器







1．55流路出土縄文土器・弥生土器　2．第10－２ａ・１０－２ｂ層出土石製品　3．第11－１ａ層出土石器
4．第10ａ層以下出土石製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおがたぐんじょうりいせき
書名	大県郡条里遺跡７
副書名	寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第311集
編著者名	駒井正明、川瀬貴子
編集機関	公益財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒590－0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号　℡072(299)8791
発行年月日	2021年10月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大県郡条里遺跡（おおがたぐんじょうりいせき）	おおさかふかしわらし 大阪府柏原市 ほうぜんじよんちょうめ 法善寺４丁目 ちない 地内	27221	69	34°59′64″	135°62′78″	20200601～20210131	2,142㎡	恩智川法善寺多目的遊水地

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大県郡条里遺跡	生産	古代～中世	条里畦畔・溝・畝・土坑・ピット・流路	陶磁器・瓦質土器・瓦器・土師器・須恵器・黒色土器・金属製品・石製品・木製品	古代から中世にかけての条里型地割に基づく水田及び畠を検出
	集落	縄文時代晩期～古代	溝・土坑・ピット・流路	須恵器・土師器・弥生土器・瓦・縄文土器・石器・サヌカイト剥片	地形の高低に沿って流れる河川や溝を検出

要約

条里型地割の施行時期について、10世紀前葉頃という、既往の調査成果を裏付ける遺構面を検出した。

耕地区画の地割が、当初の格子型地割から、長地型地割に変化する事も判明した。長地型地割は坪境を境にして、南北方向と東西方向に分れている。

坪境付近は旧恩智川の堤防にあたる箇所でもあり、数時期にわたる恩智川と、その堤や畦畔を確認した。

当遺跡より東となる東高野街道沿いに位置する、河内六寺で出土する瓦に類似した、川原寺式の複弁蓮華文軒丸瓦が当遺跡でも出土した。

公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書　第311集

大　県　郡　条　里　遺　跡　7

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 /　2021年10月29日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号

印刷・製本 /　株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南２丁目６番８号